

ISSN 2185-4440

自治医科大学看護学部年報 (第9号)

Annual Report Jichi Medical University School of Nursing

自治医科大学大学院看護学研究科年報 (第5号)

Annual Report Jichi Medical University Graduate School of Nursing



2010

目 次

○ 巻頭言				
	看護学部長（兼）大学院看護学研究科長	水戸美津子	……	3
○ 特別報告				
	看護職キャリア支援センターの活動報告	高木 初子	……	7
○ 活動報告				
	研究推進委員会3年間の総括	研究推進委員長	半澤 節子	……11
	活動報告：「研究セミナー」	科目責任者	春山 早苗	……12
	専門看護師の育成について		成田 伸	……16
○ 看護学部委員会等報告				
	人事委員会	委員長	水戸美津子	……21
	教務委員会	委員長	春山 早苗	……22
	学生委員会	委員長	竹田津文俊	……23
	FD評価・実施委員会	委員長	中村 美鈴	……25
	広報委員会	委員長	成田 伸	……27
	編集委員会	委員長	本田 芳香	……28
	国家試験対策委員会	委員長	渡邊 亮一	……29
	臨床実習指導研修委員会	委員長	永井 優子	……31
	実習調整委員会	委員長	中島登美子	……32
	研究推進委員会	委員長	半澤 節子	……33
	入試実施委員会	委員長	大塚公一郎	……34
○ 大学院看護学研究科委員会等報告				
	大学院看護学研究科委員会	委員長	水戸美津子	……37
	研究科委員会幹事会	幹事長	半澤 節子	……38
○ 教育研究分野別報告				
	基礎科学関連			……41
	医学関連			……43
	基礎看護学			……44
	地域看護学			……45
	精神看護学			……48

母性看護学	49
小児看護学	52
成人看護学	53
老年看護学	58
○ 大学院看護学研究科 教育の概要	
母子看護学領域「小児看護学」	63
母性看護学	64
健康危機看護学領域クリティカル看護学	65
健康危機看護学領域「精神看護学」	69
がん看護学領域「がん看護学」	70
老年地域看護管理学領域「老年看護管理学」	72
老年・地域看護管理学領域「地域看護管理学」	73
共通科目	74
○ 研究業績録	
基礎科学関連	77
医学関連	78
基礎看護学	79
地域看護学	80
精神看護学	82
母性看護学	83
小児看護学	85
成人看護学	86
老年看護学	87
がん看護学	88
○ 資料	
2010年度（平成22年度）看護学部学年暦	91
自治医科大学看護学部の概況（平成23年3月31日現在）	92
看護学部教職員名簿	93
2010年度（平成22年度）大学院看護学研究科学年暦	94
大学院看護学研究科教職員名簿	95
編集後記	96

巻 頭 言

看護学部長，大学院看護学研究科長
水戸美津子

平成22年度年報が出来上がりました。平成22年度の最大の出来事は、3月の東日本大震災でしょう。未曾有の大地震と津波により、多くの人々の尊い命が失われました。ここに被災されました皆様へのお見舞いと、亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。この震災により、平成22年度本学部卒業生一名も亡くなられました。心からご冥福をお祈りいたします。

全国の看護学部、看護学科は本学部が開設された平成14年には100校でしたが、その後、急激に増加し平成22年4月には193校となりました。そして、平成23年4月にはついに200校となり、このうちの約7割弱に大学院博士前期課程（修士課程）が設置され、さらにその約半数が博士後期課程を有しています。首都圏を中心にさらに増加することが予想されています。このような急激な学部・学科設置や大幅な定員増加のために教員の充足が、質・量共に追いついていません。研究者人材データベース（JREC-IN）には、常に100件近くの看護学担当教員の公募が掲載されています。これは、明らかに異常な状態といわざるを得ません。本学部も平成22年4月には、教員定数上4名の欠員でスタートせざるを得ない状況となりました。

一方、全国的な現象として経済状況の混迷から就職に有利な看護学部・看護学科への希望者は増加していますが、入学してくる学生の基礎的能力の低下が指摘されており、本学部に入ってくる学生も例外ではなく、教員一人ひとりの負担は増加しています。

このような状況であるにもかかわらず、教員一人ひとりが本学部学生並びに大学院生への教育に情熱を傾け、さらに看護学研究で成果を上げていることが年報から読み取ることができます。教員の皆様そして教員の教育研究活動をサポートしていただいている事務職員の皆様に心から感謝申し上げる次第です。

本年報は平成22年度の看護学部並びに看護学研究科の教育研究活動成果記録であります。ご一読いただき、ご意見ご批判をいただければ幸いに存じます。

特別報告

看護職キャリア支援センターの活動報告

自治医科大学附属病院 看護職キャリア支援センター
キャリア形成支援部門長 高木 初子

自治医科大学附属病院看護職キャリア支援センターは、附属病院に勤務する看護職の方がライフイベントに応じて生涯働き続けられるキャリアを支援することを目的に、平成22年4月1日に発足しました。このキャリア支援センターは島田和幸センター長、水戸美津子副センター長および朝野春美副センター長のもと、教育プログラム開発支援部門、キャリア形成支援部門で構成されています。このセンターでは、看護部・看護学部双方からメンバーが選出され、臨床と教育とが協働することで、人材や環境を有効に活用し実践に重点を置いたプログラムを提供できるよう検討をしております。活動内容としては、教育プログラムの提供等を検討し、看護職の人材育成や活動計画の立案及び推進を図り、看護部と看護学部との人事交流の調整やキャリア評価体制の確立、キャリアに応じた処遇の改善の促進、看護学生の卒前・卒後教育を一体となって取り組む体制の強化に取り組んでおります。

平成22年度は、キャリア支援センターが開設されたばかりであり、月に数回のランチ・ミーティングが開催され、臨床の看護師、看護学部の教員が共同し、楽しく交流しながらときには意見を戦わせ、メンバー全員でそれぞれの部門での活動内容の検討を行いました。この2年間の活動内容について、教育プログラム開発支援部門とキャリア形成支援部門のそれぞれの活動状況についてご報告します。

【教育プログラム開発支援部門の活動】

平成22年度の教育プログラム開発支援部門は、新人看護職員の臨床研修制度の実施に向けて検討を重ねてきました。従来の各部署、各指導者任せていた新人教育を見直し、到達目標に沿っての部署異動研修を柱に、集合研修、部署別研修、重症救急部門短期研修（ICU、OPE、ER等）を取り入れ、体系的な制度の構築を検討しました。さらに他部門（薬剤部、臨床検査部、栄養部等）の見学も加え、他職種の業務内容を知り、チーム医療の中の一員であることの自覚を促すことができるよ

う工夫をしました。これと同時並行に、新人看護職員への指導體制作りも検討しました。看護職キャリア支援センター内に新人臨床研修責任者および新人臨床研修実施委員会を設置し、各部署の管理者を新人臨床研修教育担当者に任命し、その下部に新人研修実地指導者を配置する体制としました。さらに、新人臨床研修教育担当者研修や実施指導者研修を重ね、新人看護職員への看護技術指導および精神的支援体制を強化しました。

このように新人看護師にとって自己の看護実践能力を向上させ、看護職としてキャリアの第一歩を踏み出せるような研修制度を構築し、平成23年4月に、「自治医科大学附属病院新人看護職員臨床研修制度」を開始することができました。

平成23年度はこの研修制度のもと、まず4月に集合技術研修を行いました。これは、看護基礎教育とのつながりをスムーズにするための実践に即した看護技術の集合研修になります。と同時に3部署異動研修も始まりました。4月から翌年1月までの10ヶ月間に外科・内科・その他の科を4カ月・3カ月・3カ月毎に異動します。新人看護職員にとっては、基礎技術・態度・知識の習得ができ、ジェネラリストナースとしての臨床実践能力の基盤を形成していく研修となっております。

【キャリア形成支援部門の活動】

平成22年度のキャリア形成支援部門は、まず、キャリア支援に関する広報活動を開始しました。看護職キャリア支援センターが設立されたこと、附属病院で働く看護職の方々のキャリア選択やキャリアアップなどのキャリア開発の広報活動のためにホームページの開設に着手し、検討に検討を重ね、平成23年3月に自治医科大学のホームページにUPすることができました。同時に、キャリア支援相談窓口の設置に向けて、キャリア支援相談窓口の取り扱い事項の内容や具体的方策について検討を重ね、キャリア支援相談窓口の設置をすることが出来ました。プライバシーへの配慮としてホームページからアクセス可能とし、専用のアドレスを設置し、附属病院の看護職の一人ひとり

に対して、キャリアビジョン等に関する相談や助言を行えるような体制を作りました。

次に、附属病院の看護職の方々へのキャリア形成支援内容を検討するにあたり、キャリア支援ニーズ調査を実施しました。調査内容はキャリア形成支援部門およびランチ・ミーティングにおいて検討し決定しました。調査結果については今後ホームページに載せていく予定です。

平成23年度の活動として、キャリア・パスモデルの作成に取り組みました。キャリア・パスモデルの作成にあたり、自治医科大学附属病院看護部の理念に基づき、「どんな人材を育てたいのか」「どのような看護実践能力が必要なのか」について討議を重ね、P.Bennerの枠組みを用いて、キャリア・パスモデル及びキャリア・ラダーを作成しました。現在、キャリア・ラダーの申請システム及びラダー評価システムについて検討中です。

キャリア相談窓口の活動に関しては、一人ひとりの看護職員に対してアピールしていく方針となり、専用のポストを設置して、看護職員全員にキャリア相談用紙を配布する方法も取り入れました。今後も看護職員の方々がキャリアを築いていくための疑問や悩みの解決を支援していく体制を強化していきたいと思います。また、キャリア開発は看護職員個々人と病院看護部の組織間の相互作用で取り組むものです。附属病院の看護職員一人ひとりがキャリア発達、キャリア形成の考え方を正しく理解し、自分自身のキャリアを確立することが出来るように、キャリア開発支援に関する講演会を企画しました。テーマは「日々の看護実践をキャリアにつなげるためには」です。

看護職キャリア支援センターでは様々な取り組みを開始しておりますが、看護職員の皆様のお声に耳を傾け、キャリア支援のために取り組みを進めていきたいと思っています。

活動報告

研究推進委員会3年間の総括

研究推進委員長 半澤 節子

研究推進委員会は、平成20年度に看護学部の教員による研究活動の強化を図るために、新たに設置された。平成20年度～平成24年度までの第二期中長期目標、中期計画、すなわち、中長期目標「教員の教育研究活動を適切に評価するための評価方法を構築する」、中期計画「評価方法を検討する」に基づき、本委員会の所管事項を次のように位置付けた。①「教員の研究能力、指導能力の向上を図るための研究体制の確立」、②「研究活動評価のためのシステムの構築」、③「実践の場における研究の推進を図るため、臨床及び地域における看護職者との共同研究を推進する具体的な方策の検討」など、教員の研究能力の向上に資するための環境整備に関する事項を本委員会の検討課題とした。

初年度である平成20年度は、実践の場における研究の推進を図るため、臨床及び地域における看護職者との共同研究を推進する具体的な方策の検討を重点課題とし、その基盤整備を行った。具体的には、看護学部看護系教員共同研究費を活用し、臨床実習での連携体制を基盤とした本学附属病院等の看護職者との共同研究の推進を図った。しかしながら、大学評価、認証評価（平成21年3月）でも指摘されたように、学内共同研究費の活用だけでなく、多様な研究活動における制度的な支援を活用し、研究成果を増やすことが課題とされた。科学研究費補助金（主として文部科学省所管のもの）の申請件数を増やすための取り組みを、次年度以降の本委員会の課題とすることとした。

設置2年目となった平成21年度は、引き続き現場の看護職者との共同研究を推進すべく、看護系教員共同研究費の活用を図った。また、9月及び2月の年2回開催される本学附属病院看護部主催看護研究発表会には委員が参加し、発表演題に対する詳細な助言を行い、看護学部教員との共同研究へ理解を求めた。

こうした取り組みにより、看護学部教員と附属病院看護職の共著による、本学看護学ジャーナルの原著、報告、学術誌などへの論文発表が増加し

た。また、教員の研究能力、研究指導能力の向上のため、引き続き学内外の研究費補助制度の活用を促し、一例としては、科学研究費補助金獲得の増加など一定の成果を達成できた。しかしながら、科学研究費補助金の申請及び採択件数の確実な増加につなげるべく、学内の研究費獲得ゼミの開催、内容の充実、個別支援体制の確保、附属病院看護部などとの共同研究の強化について、引き続き課題とした。

設置3年目となった平成22年度は、引き続き現場の看護職者との共同研究を推進し、看護系教員共同研究費の活用を促進した。また、年2回開催される附属病院看護部主催看護研究発表会には、この年度から、研究論文の査読の段階から本委員会委員3名で参加し、発表会でも各病棟の研究発表に対し詳細な助言を行うこととなった。さらに、検討を残していた本委員会の課題であった研究活動評価の方法について、委員会において検討し、委員会（案）を作成し、教授総会の了承を得て、初年度として研究活動自己評価を実施した。

こうした取り組みの結果、学内外の研究費補助制度の活用促進、研究活動の充実強化の一例としては、科学研究費補助金獲得件数の増加、本学学内学術雑誌「自治医科大学看護学ジャーナル」の掲載論文数の増加といった一連の成果を得ることができた。

平成23年度以降も、科学研究費補助金の申請及び採択件数を増やすためのセミナーの開催、内容の充実、附属病院看護部など実践現場の看護職者との共同研究の強化を引き続き課題とする。また、本学で毎年主催される自治医科大学シンポジウムにおけるポスターセッションについても、シンポジウム委員会と連携を図りながら、学内教員及び看護学研究科修士課程の在学生、修了生による研究発表の場として活用を促し、研究活動のさらなる推進を図ることとしている。

活動報告：「研究セミナー」

科目責任者 春山 早苗

1. カリキュラムにおける位置づけと学習目的・学習目標

2008（平成20）年度からスタートしたカリキュラムは、基礎科学分野、看護学分野、総合分野の3分野で構成されている。総合分野は、学生が、基礎科学分野、並びに、看護学分野で学んだ知識や技術も併せて、総合的に、実践の中で研鑽し創造的に専門性を深め、看護実践の開発を追求するための基礎能力を、1年次から4年次にかけて段階的に身につけることを目指している。「研究セミナー」は、総合分野の目的を達成する一科目として3年次に配当された新設の必修科目であり、1年次配当の必修科目である「看護基礎セミナー」、2

年次配当の必修科目である「文献講読セミナー」の学習内容を基盤とし、さらに4年次配当の必修科目である「総合実習」、「看護総合セミナー」の学習内容につながっていく授業科目として位置づけられている。履修条件として、単位を取得していることが必要な科目は2年次配当科目の「日常生活援助実習」である。また、本科目の単位を取得していることが必要な科目は「看護総合セミナー」である。

学習目的は、看護実践を積み重ねる過程で専門性を深めていくための基本的な方法を修得することであり、学習目標は以下の3点である。

表1 「研究セミナー」の学習内容と教授方法

回	学習課題	学習内容及び方法	評価方法	担当
1	オリエンテーション 研究とは	研究セミナー オリエンテーション 〔講義〕研究とは何か、研究の目的、研究者・研究対象者・研究協力者等研究に関わる人々について学習する。	20% ・講義において提出を求める記録物	春山 渡邊
2	看護研究とは何か	〔講義〕看護研究とは何か、看護研究の目的と意義、研究の問いの源について学習する。		春山
3	研究の問いと研究方法	〔講義〕研究の問いと、それに応じた研究方法の選択の重要性を理解する。		春山
4	研究のプロセス	〔講義〕研究のプロセスを学習する。		春山
5	倫理と看護研究	〔講義〕研究の倫理とは何か、研究を進めていくために不可欠な倫理的配慮を理解する。		塚本
6	研究計画 研究成果のまとめ方	〔講義〕研究計画書の内容を理解する。 論文の構成と書き方、報告・公表の方法を理解する。		塚本
7	文献検討による看護実践課題の整理と研究の問いの明確化	〔演習〕 1) これまでの講義・演習・実習から生じた疑問や自分自身の課題に関する文献検討を行い、レポートにまとめる。 <レポート1>	80% ・レポート1、レポート2 ・プレゼンテーションの内容 ・演習への参加態度	春山 各看護学科目に分かれて
8				
9		*1) について学生の学習の進め方について確認し、指導する。		
10				
11		2) 1) について他のグループメンバーにプレゼンテーションし、ディスカッションする。		
12		3) 2) に基づき、学生各自が看護実践の課題を整理する。 4) 3) で整理した看護実践課題の改善・充実に向けた研究の問いを明らかにし、研究の問いに応じた研究方法、研究に関わる人々を考え、レポートにまとめる。<レポート2>		
13		5) 4) について他のグループメンバーにプレゼンテーションし、		
14		ディスカッションする。		
15	まとめ	個別指導		

- ①看護研究の意義と看護研究方法の基本を理解する
- ②これまでの講義・演習・実習から生じた疑問や自分自身の課題に関する文献検討により，研究成果を確認するとともに，看護実践の改善課題を整理する
- ③看護実践課題の改善・充実に向けた研究の問いを明らかにする

2. 学習内容と教授方法

「研究セミナー」の学習内容と教授方法を表1に示す。第6回目までは講義を中心に教授し，担当は春山の他，渡邊亮一教授，塚本友栄講師が担当した。第7回目からは演習とし，特に第9回目からは，学生を各看護学科目に分けて看護系教員が全員担当し，学習課題に沿った2つのレポート作成を，グループディスカッション及び個別指導により教授した。平成22年度の履修学生数は98名であり，各看護学科目への学生配置数は，教員数に応じて基礎看護学8名，小児看護学12名，母性看護学11名，成人看護学19名，老年看護学12名，精神看護学16名，地域看護学16名，がん看護学4名とした。

教科書は指定せず，第1回目の授業において，複数の文献を紹介した。

評価方法は，評価割合を講義を中心とした第6回目までを20%，演習の第7回目以降を80%とした。評価の視点を表2に示す。

3. 学習の成果

評価結果は，『優』が90人（91.8%），『良』が6人（6.1%），『可』が2人（2.0%）であった。学習目標の到達度が低い学生については，担当する看護学科目の教員が，レポートの修正等個別指導を行い，学習目標の到達度を高めることに努めた。

4. 学生の反応

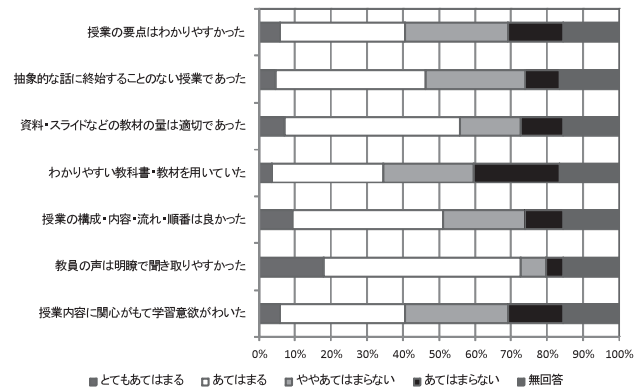
学生による授業評価は，第6回目までの講義と，第7回目からの演習に分けて実施した。授業評価の回収数（率）は，84人（85.7%）であった。

講義についての学生による授業評価の結果を図1に示す。全ての評価項目において約15%の無回答があり，それを除くと全体的には「とてもあてはまる」，「あてはまる」と回答した者は約6割，「ややあてはまらない」，「あてはまらない」と回

表2 評価の視点

■第1回目～第6回目	<ul style="list-style-type: none"> ・講義において提出を求める記録物を提出しているか ・求められた内容が記録されているか
■第7回目～第15回目	<ul style="list-style-type: none"> ・第11回目までに，講義・演習・実習から生じた疑問や自分自身の課題に関する文献検討を行い，レポート1にまとめることができたか ・第11回目にレポート1について，他のグループメンバーにプレゼンテーションできたか ・第11回目のグループ・ディスカッションには，主体的に参加できたか ・第11回目のグループ・ディスカッションを踏まえて，看護実践の課題を整理できたか ・第13回目までに看護実践課題の改善・充実に向けた研究の問いを明らかにし，研究の問いに応じた研究方法，研究に関わる人々を考え，レポート2にまとめることができたか ・第13回目にレポート2について，他のグループメンバーにプレゼンテーションできたか ・第13回目のグループ・ディスカッションには，主体的に参加できたか ・第13回目のグループ・ディスカッションを踏まえて，また必要時，教員の個別指導を受けて，レポート2を加筆・修正するなど精練できたか

図1 学生による授業評価の結果—講義—



答した者は約4割であった。評価が高かった項目は，「資料・スライドなどの教材の量は適切であった」，「教員の声は明瞭で聞き取りやすかった」であり，評価が低かった項目は，「わかりやすい教科書・教材を用いていた」であった。自由記載への回答は12名から得られ，その結果を表3に示す。

演習についての学生による授業評価の結果を図2に示す。全ての評価項目において約15%の無回

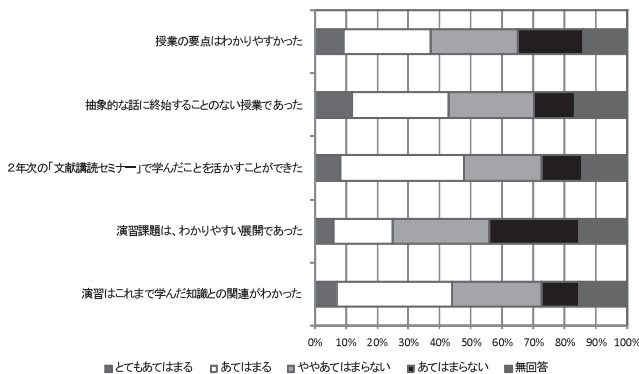
表3 学生による授業評価の自由記載－講義－（人）

<p>■良かった点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・わかりやすかった。研究、看護研究のたまかな部分が理解できた（3） ・良かったと思う（1） ・次年度も行うべきである（1） <p>■改善点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・演習の進め方やレポートの書き方についてもう少し説明がほしい（2） ・演習を進める際に参考となる資料や具体的な例示がもっとあると演習への導入がスムーズになると思う（1） ・研究テーマの設定について、実習や演習が昔のことで、その時感じた疑問を忘れてしまったので、できれば前学期実習前に、「研究セミナー」で取り組むので実習で感じた疑問を書き留めておくようにと伝えたり、夏休み前にも同様にアナウンスがあったりすると、よりテーマ設定しやすかったと思う（1） ・他の科目の課題と重なり、考える時間を確保するのが難しかった。他の授業との兼ね合いを考えてほしい（2）

表4 学生による授業評価の自由記載－演習－（人）

<p>■良かった点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員が細かく、丁寧に指導してくれた（2） ・グループディスカッションでの教員のアドバイスがわかりやすく、とても参考になった（3） ・演習は学びを深めるのによかった、わかりやすかった（2） ・各看護学科目に分かれて行ったので、自分の興味があった分野への関心がさらに深まった（1） ・セミナーは大学らしい科目でとても楽しい（1） <p>■改善点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各看護学科目で指導や到達レベルに差があった、統一してほしい（13） ・科目責任者より総合実習や看護総合セミナーでは必ずしも同じテーマで取り組む必要はなく再考してよいということであったが、同じテーマで取り組むという教員がいた（1） ・レポートの内容がわかりにくかった、求められる内容が難しかった（8） ・時間がなかった、他の科目の課題との兼ね合いを考えてほしい、レポート提出期日と他の科目のテストを重ねないでほしい（11） ・レポートの進め方・書き方について教員のサポートがもっとほしかった、個別指導の時間がほしかった（2） ・威圧的に指導されていやだった（2） ・グループディスカッションをもっと深めたかった（1） ・自分の看護学科目グループは演習の進め方のスケジュールが提示されず、進め方がよくわからなかった（1）
--

図2 学生による授業評価の結果－演習－



答があり、それを除くと全体的には「とてもあてはまる」，「あてはまる」と回答した者と、「ややあてはまらない」，「あてはまらない」と回答した者は半々であった。評価が高かった項目は、「2年次の『文献講読セミナー』で学んだことを活かすことができた」であり、評価が低かった項目は、「演習課題は、わかりやすい課題であった」であった。自由記載への回答は44名から得られ、その結果を表4に示す。

5. 今後に向けた課題と改善点

1) 第6回目までの講義について

学生による授業評価において、評価が低かった項目は、「わかりやすい教科書・教材を用いていた」であった。また、自由記載では参考となる資

料や具体的な例示があると演習への導入がスムーズになると思う、という意見があった。教科書を指定せず、参考書を20件提示し、簡単に紹介したが、学生は参考書をうまく活用できなかったと考えられる。卒業後も、看護専門職として専門性を深め、看護実践の開発を追求していくためには、研究的な取り組みは重要であり、看護研究に関する図書が手元にあることは、本科目だけではなく、卒業後も役立つものであると考える。したがって、今後は教科書を指定することを検討したい。併せて、講義における学習内容の理解を助けるために、実際の看護研究論文を教材として用いるなど、今年度以上に教材を工夫していく必要がある。

また、第2回目～第4回目においては、学生が、それまでの講義・演習・実習で感じた看護に関わる疑問を手がかりに、個人ワークを取り入れることにより、学習内容の理解の深まりと、研究の問いの明確化を目的とした演習への円滑な導入を図

った。しかし、学生による授業評価の自由記載において、1名からの意見ではあるが、講義・演習・実習から時間が経過しており、その時感じた疑問を忘れてしまっているため、事前に学習方法を伝えておいてもらえば、疑問を書き留めておいたり、感じた疑問を思い出すようにしたり、準備することができるという主旨の意見があった。この意見を踏まえて、今後は前学期始めの3年次オリエンテーション又は後学期始めの履修ガイダンス等の機会を利用したり、シラバスの備考を活用したりして、学生は本科目を履修するためにどのような準備が必要であるのか、授業開始前に周知していく必要があると考える。

2) 第7回目からの演習について

学生による授業評価において、評価が低かった項目は、「演習課題は、わかりやすい課題であった」であった。また、自由記載では、教員が丁寧に指導してくれた、グループディスカッション等における教員の助言がわかりやすかった、という意見があった一方で、看護学科目によって指導方法や求められるレベルに差があった、という意見があった。演習を各看護学科目に分けて実施することには、学生個々の関心や学習の進め方に応じて教員が細やかに指導したり、グループディスカッションにより、学生が他の学生や教員と意見交換をしたりして、学習目標の到達度を高めるというねらいがある。しかし、看護学科目間の指導内容や指導方法の相違が学習目標の到達度に影響する可能性もある。今年度は、初めて開講した科目であったことから、3月の授業研究会において、本科目の実施状況を報告し、意見交換を行い、演習による学習の目標と、その進め方について再確認し、教員間の共有を図った。今後も、何らかの方法により、演習の目標や方法の再確認や、効果的な指導方法の検討を各看護学科目の教員間で実施していくことが必要であると考えられる。また、科目責任者は、各看護学科目任せにし過ぎず、演習の進め方や本科目で求めるレポートの内容等について、学生に丁寧にオリエンテーションしていく必要がある。

さらに、学生による授業評価の自由記載には、他の科目の課題レポートやテストとのバランスを考慮してほしい、という意見があった。3年次は、選択科目を除くと週3日間5科目10コマの時間割で

あり、複数科目の課題レポート等が重なっても、そのための学習時間は十分、確保できると考える。しかし、学生は、授業のない空き時間を学習のために有効に活用できていないと考えられる。これについても、前学期始めの3年次オリエンテーションや後学期始めの履修ガイダンス、シラバスの備考を活用したりして、3年次後学期に配置されている各科目で課されるレポート等と、そのために空き時間を有効に活用して、学習時間を確保していく必要性を周知していく必要があると考える。

専門看護師の育成について

成田 伸

1. はじめに

本学看護学研究科では、2006年度の開設当初より専門看護師（CNS：Certified Nurse Specialist）の教育を開始し、2007年度には、母性看護専門看護師、小児看護専門看護師、クリティカルケア看護専門看護師、精神看護専門看護師の教育課程の承認を受け、また2008年度にはがん看護学が開設され、2009年度にがん看護専門看護師の教育課程の承認を受け、粛々とその教育を行ってきた。私は、母性看護専門看護師教育を行っている教員として、その育成状況と今後の課題について報告する。

2. 専門看護師の教育と資格の認定

専門看護師は、複雑で解決困難な看護問題を持つ個人、家族及び集団に対して水準の高い看護ケアを効率よく提供するため、特定の専門看護分野の知識及び技術を深め、保健医療福祉の発展に貢献し併せて看護学の向上をはかることを目的に、平成6年にその認定が始まった。専門看護師は、現在認定された教育機関の課程を修了後、実務研修を6ヶ月積み（当初は1年で平成21年に短縮する方向で変更された）、日本看護協会で年1回実施する専門看護師認定審査で認定される。5年ごとに再認定が必要とされている。平成23年春の時点で612名の専門看護師が認定されている。

専門看護師の教育は、資格の認定に先んじて看護系大学院修士課程において開始されていたが、看護系大学協議会において度々検討された末、平成10年に教育課程認定の制度が成立し、その年から教育課程の認定が開始している。2011年春の時点で11の専門の課程の認定が行われている。教育課程の再認定は10年ごとである。

母性看護専門看護師は、当初そのサブスペシャリティとして周産期母子援助、女性の健康への援助、地域母子援助の3つが立ち上がったが、修了生が輩出しているのは前2者のみで、10の大学院で課程が認定され、その課程を修了したうちの35名が母性看護専門看護師として認定されている。

3. 母性看護専門看護師の育成状況

本研究科の2010年度までの入学、修了、専門看護師資格の取得状況について表1に示した。入学した院生総数は6名で、全員が院修了後、臨床現場に復帰している。そのうち平成22年度に受験要件を満たしている修了生は3名で、うち1名が資格試験に合格し、母性看護専門看護師として栃木県内の病院で活躍している。3名中1名は2011年度の受験をめざしており、もう1名は復帰後看護管理業務に専念していたことと自身の産休・育休取得等の事情があり、しばらく受験の予定はない。

表1 母性看護専門看護師課程への入学・修了・資格取得状況

入学年度	人数	修了	資格取得	取得年
2006年度	1	2008年度	0	
2007年度	1	2008年度	1	
2008年度	2	2009年度	0	
2009年度	2	2010年度	0	

4. 専門看護師教育の実際

専門看護師の教育では実地での教育が重視され、2年次に6単位の実習が課せられている。専攻教育課程に関する審査基準には「実習の6単位は1単位が30～45時間ではなく、到達する能力の質を示す単位である」と規定されている。ここで到達すべき能力とは、高度看護実践、教育、相談、調整、研究、倫理調整の6つであり、必要数のケースや病棟スタッフとのかかわりを通してこの能力が達成された場合に、単位取得を認定することになり、実習期間はそれぞれの院生の能力や実習状況によって異なってくる。

3期6名の院生に対して母性看護専門看護実習（母性看護特別演習から名称変更）を教育指導してみても明らかになったことは、これら6つの機能に関わる実習は、それぞれの機能あたり1ケース、1状況というわけではなく、機能同士が相互に関連していることである。例えば、心理社会的に複雑なケース1例を受け持つと、院生自身が対象者に対して「高度看護実践」を実施し、その支援を通して対象者から得られた信頼から、対象者の状況について病棟スタッフの理解を深める関わりと

して病棟スタッフの実践を支援する「相談」が行われ、母子を無事に退院させるための他部門との「調整」が必要であることが多かった。また、このようなケースでは、対象者の治療等に対する希望・思いと医療者側のその状況の把握に溝が生じて不具合を起こしていることがあり、そこに「倫理調整」の機能が必要となってくる場合もあった。このように1ケースを受け持ち看護実践することで、達成すべき6つの機能それぞれの発揮が次々と必要となり、面白いように課題が達成されていったのである。専門看護実習では、その時々ケースや状況との出会いが院生の実習達成状況に大きく影響するといえる。

「教育」の実践においても面白い展開があった。実習施設の一つの地域支援病院で実施した新生児蘇生に関わる教育である。これは、初めて入学した院生が新生児蘇生法（NRP）のインストラクターの資格を米国で取得していたことをきっかけに始まった。病院状況のアセスメントの結果、当該施設では出生時の新生児の処置について助産師・看護師スタッフ間で協力する必要性が高いにもかかわらずその実践が少ないことが明らかとなった。この分析結果に基づき、3期6人の院生で、出生直後の新生児蘇生に関連する教育を継続して開催し、最終的に、院生2名がインストラクターを務め、日本版NRP公式認定（NCPR）のBコースの開催に至ったものである。しかもそのコースを受講した病棟の勉強会係から院生に対して、受講できなかった看護スタッフ向けの勉強会開催の申し出と協力依頼があり、非公式の講習会として開催することになった¹⁾。院生が主体の「教育」からスタッフ主体の「学習」に発展しており、CNSの実習で求められる「教育」の機能を十二分に発揮した展開となったのである。

前述したように、母性看護専門看護師は全国でまだ35名であり、本学が教育を開始した時点では、栃木県内に母性看護専門看護師はいなかった。臨床現場での実習はそれこそ手探りの状態であったが、ここまで成果をあげることができた。院生たちの頑張りはもちろんであるが、病棟看護管理者の、事例の選択や日々のアドバイスを通しての手厚い支援があってこそ達成できたものと思う。

5. 修了生に対する資格取得までの支援

専門看護師の資格の認定は前述したように日本

看護協会が行っている。受審には、看護職としての実務研修5年以上、そのうち通算3年以上は専門看護分野での実務研修、かつ大学院修了後6ヶ月以上の実務研修が必要とされている。審査には事前に実績報告の提出が必要で、報告は実践事例3例、相談（コンサルテーション）事例3例、調整（コーディネーション）事例2～3例、倫理調整事例2例である。受験自体は専門看護師の実践に関わる論述試験である。

大学院修了後の期間が6ヶ月に短縮されたことで、大学院入学までに実務期間5年以上（専門看護分野3年以上を含む）の条件を満たしている場合には、大学院を修了した年の11月に試験し、合格すれば年内に資格取得が可能となった。しかし、修了後の半年間の実践から10例以上の実績報告を準備することは至難の業である。しかもその半年間彼らは、教育課程の修了生として専門看護師をめざしてはいるが専門看護師ではないという微妙な立場にある。その微妙な状態で専門看護師担当の実践を行いなさいとする制度なのである。

日本看護協会が専門看護師と同様に資格認定している制度に認定看護師の制度がある。認定看護師は6ヶ月の期間で、「実践」「指導」「相談」の3つの機能を果たす専門職として教育される。必要とされる実務研修期間は、専門看護師と同様である。しかし、認定看護師に必要とされる実務研修期間はすべて教育機関入学前のもので、また6ヶ月の教育修了時の資格試験に合格すれば、認定看護師として臨床に復帰することができる。専門看護師が臨床に復帰してもある期間は無資格であることと、ここが大きく異なっている。

特に「相談」「調整」「倫理調整」等の機能の実践には、専門看護師として活動できる職場環境が必要である。なかには専門看護師をめざす状態でも看護部付きで特別に配置されている場合もあるという²⁾。実際本学修了生のうち2名は、勤務時間すべてではないが一般のスタッフとは別待遇になっており、その2名については実績事例の積み重ねが出来上がっている。それでも修了年での受験はかなわなかった。

他の修了生は一般のスタッフとして再就職している。一般のスタッフとして再就職した場合には、受験に当たって必要な専門看護師相当の実績を積み重ねていくことは本当に難しい。彼らから活動についての相談があった場合には、さまざまな活

動のアイデアをアドバイスしているが、なかなか実践には結びついていない。つまり、専門看護師教育課程を修了した再就職時点で、専門看護師相当として活動可能なように、一般スタッフとは別建てで特別に配置・雇用してもらう必要があるということである。それには、再就職の時点で就職先の看護部あるいは病院人事部との交渉が非常に重要であり、その「交渉力」そのものの育成も、専門看護師教育に必要とされているといえる。

さて、専門看護師資格を取得後も、施設内におけるポスト獲得の重要性とその問題は続くという。濱口³⁾は2005年の報告において、専門看護師が単なるスタッフでの活動から看護管理者（副師長、師長等）での活動まで、組織上多様な位置づけで働いていることを報告している。また専門看護師としての資格や能力を給与に反映させるシステムを持たないことが多く、そのため待遇改善の一案として副師長や師長などの看護管理者として処遇することが行われている。しかしその結果として管理業務負担が大きくなり、専門看護師としての活動時間を管理業務の合間になんとか捻出しているという。

2011年に行われた浅野らの対談⁴⁾には、母性看護専門看護師である浅野氏の公立の母子医療センターでの活動の様子が紹介されている。浅野氏の雇用は専門看護師としての外来専従であるが、外来の一スタッフとしての業務に縛られており、組織横断的に活動できるのは週1日になってしまっている。専門看護師業務に対する手当として月5,000円がようやく確保されているという。その様子からはまだ十分に能力を発揮できていないジレンマが感じられる。

本学修了者の現状からも、組織上の位置づけや活動の実態が、濱口の報告以後に大きく改善されたとは思えない。濱口は、専門看護師の職場選びが切実な問題であり、職場の開拓と雇用の問題解決に、修了生と施設をつなぐ情報システムが必要と結論づけている。

このように専門看護師の育成においては、単にその教育を修了させ、看護界に復帰させれば修了とはいかない。修了生が専門看護師としての機能を発揮できるポストの確保（そのための看護部・病院人事部との交渉支援）、専門看護師認定審査を受験するまでの活動のスーパーバイズ、合格後の専門看護師としての活動のスーパーバイズと常

にその状況に応じた支援が必要となる。

6. 今後の課題

久木元⁵⁾は、日本の専門看護師制度が手本とした米国のCNS（Clinical Nurse Specialist）の現状を報告している。その中で米国においてもCNSの役割は多岐にわたり、仕事の内容は曖昧で、働く施設の状況に合わせた働き方をしていると述べている。日本での育成はまだ始まったばかりであり、米国等を見習い、教育する側も教育を受ける側も、今後とも息長い継続的な努力が必要といえよう。

引用文献

- 1) 高橋斉子, 高木友子, 立木歌織, 沼尾美津穂, 小嶋由美, 渥美清恵, 荒川直美, 手塚久恵, 桑川舞衣夢, 角川志穂, 小川朋子, 齋藤良子, 成田伸: 母性看護専門看護実習として展開したへき地医療拠点病院における新生児蘇生法の導入とその成果. 自治医科大学看護学ジャーナル, 第8巻, pp.119-124, 2011.
- 2) 長坂桂子, 高橋妙子: NTT東日本関東病院助産師外来開設のストラテジー. 助産雑誌, 61 (12) : 1010-1018, 2007.
- 3) 濱口恵子: 専門看護師の現状と課題. 臨床看護, 31 (11) : 1588-1592, 2005.
- 4) 浅野浩子, 林周作, 山田雅子: 医師と妊婦, 組織と組織の間をつなぎ, 底上げを図る. 看護管理, 21 (9) : 817-823, 2011.
- 5) 久木元由紀子: アメリカにおけるCNSの教育・役割・現状. 臨床看護, 31 (11) : 1667-1670, 2005.

看護学部委員会等報告

人事委員会

委員長 水戸美津子

1. 所管事項

- (1)自治医科大学看護学部教員の選考に関する事項
- (2)非常勤講師の選考に関する事項
- (3)その他学部長が必要と認めた事項

2. 委員会の構成

- (1)「自治医科大学看護学部教員の選考方法等に関する内規」に規定する者
(5名以上7名以内)

表1 構成員と役割

氏名	役割
水戸学部長	委員長
春山教務委員長	委員
竹田津学生委員長	委員
中村FD委員長	委員
被選考教員の関連領域の教授等	委員
学部長が必要と認めた者（2名以内）	委員

3. 活動内容

- (1)「自治医科大学看護学部教員の選考方法等に関する内規」第2条の規定により、表1のとおり人事委員会を開催した。

表2 2010年度の審議事項

回	開催日	審議事項
1	2010年 4月20日	・成人看護学助教選考について ・非常勤講師の追加任用（1人）について
2	2010年 4月10日 (持ち回り審議)	・非常勤講師の追加任用（1人）について
3	2010年 9月28日	・小児看護学准教授の選考について ・老年看護学教授の選考について
4	2010年 10月26日	・地域看護学助教の選考について ・非常勤講師の追加任用（1人）について
5	2010年 11月22日	・地域看護学助教の選考について ・非常勤講師の追加任用（1人）について ・母性看護学教授の選考について ・基礎看護学教授の選考について ・基礎看護学准教授の選考について ・老年看護学准教授の選考について ・基礎看護学助教の選考について（2人） ・非常勤講師の追加任用（1人）について

6	2010年 12月20日	・成人看護学講師の選考について ・老年看護学講師の選考について
7	2011年 1月25日	・成人看護学准教授の選考について ・老年看護学准教授の選考について ・非常勤講師の任用（15人）について
8	2011年 2月22日	・小児看護学講師の選考結果について ・英語教育担当講師の選考について ・精神看護学助教の選考について ・非常勤講師の任用（5人）について
9	2011年 3月22日	・小児看護学助教の選考について ・成人看護学助教の選考について ・非常勤講師の任用（6人）について

教務委員会

委員長 春山 早苗

1. 所管事項

本委員会の所管事項は①授業及び試験に関する事項②単位及び課程の修了に関する事項③学生の入学、退学、休学及び卒業等に関する事項④学生の修学指導に関する事項⑤授業関係の予算に関する事項⑥その他学部長が必要と認めた事項である。

2. 委員会の構成

本委員会の構成員を表1に、下部組織を表2に示す。編入制度の廃止に伴い、「既修得単位認定及び編入生履修指導担当」を「既修得単位認定担当」に名称変更した。また、昨年度、設置した「卒業試験導入検討担当」を、試験に限定せず到達度評価の方法を検討する下部組織として「卒業時到達度評価方法検討担当」に名称変更した。

表1 構成員と役割

氏名	役割
春山 早苗 教授	委員長
中島登美子 教授	副委員長
竹田津文俊 教授	委員
中村 美鈴 教授	委員
成田 伸 教授	委員
半澤 節子 教授	委員
本田 芳香 教授	委員
渡邊 亮一 教授	委員
里光やよい 准教授	委員
井上 映子 准教授	委員

表2 2010（平成22）年度 下部組織

担当名	担当者
既修得単位認定担当	●本田芳香, 渡邊亮一
時間割担当	●中村美鈴, 川上 勝, 長井栄子 宮田真理子
夏季へき地研修担当	●竹田津文俊, 里光やよい, 工藤奈織美, 島田裕子, 和久紀子
カリキュラム運用担当	●半澤節子, 永井優子, 井上 映子, 小川朋子, 工藤奈織美, 崎田マユミ, 樋貝繁香
共通物品管理担当	●里光やよい, 小川朋子, 和久紀子, 池下麻美, 島田裕子, 板橋直人, 北村露輝, 石田寿子
助産師国家試験受験資格 関連科目受講生選考担当	●成田 伸, 中島登美子, 渡邊亮一
授業関係予算担当	●中島登美子, 石田寿子
卒業時到達度評価方法 検討担当	●成田 伸, 中島登美子, 半澤節子, 本田芳香

●担当責任者

3. 活動内容

「卒業時到達度評価方法検討担当」の提案に基づき、卒業時到達度は4年次科目「総合実習」及び「看護総合セミナー」によって評価することとなった。総合分野の科目である今年度から開講の「研究セミナー」、次年度から開講の「総合実習」「看護総合セミナー」「看護トピックス」については、看護系教員全員が担当することから、本委員会を進め方等の検討と合意を得る場とした。

2011年3月11日の東日本大震災の発生に伴い、学生委員会との合同委員会を臨時開催し、被災した学生の学習支援について検討し、対応した。

表3 2010（平成22）年度 審議事項

回	開催日	審議事項・報告内容
1	2010年 4月8日	・既修得単位認定 ・下部組織の各担当 ・本委員会年間スケジュール ・助産師国家試験受験資格関連科目の受講生の選考について
2	2010年 5月13日	・前学期履修状況 ・下部組織の各担当役割と年間計画 ・2010年度授業関係予算の配分 ・全体で行う実習の担当
3	2010年 6月10日	・前学期定期試験（4学年） ・全体で行う実習の担当 ・「研究セミナー」の進め方 等
4	2010年 7月8日	・前学期定期試験（1・2学年） ・2011年度授業関係予算及び教室整備に係る予算要求（案） ・夏季へき地研修実施計画 等
5	2010年 9月9日	・2011年度時間割・前学期再試験 ・2011年度本委員会関連学年歴 ・カリキュラム説明会（4年次科目）
6	2010年 10月14日	・退学、休学 ・夏季へき地研修実施報告 等
7	2010年 11月11日	・退学 ・後学期履修状況 等
8	2010年 12月9日	・2011年度科目責任者 ・2011年度シラバスの依頼 ・卒業時到達度評価方法 ・看護トピックスの進め方 等
9	2011年 1月13日	・後学期定期試験の時間割 ・「履修等に関する調べ」の結果 等
10	2011年 2月10日	・4学年後学期単位取得状況 ・卒業認定 ・2011年度時間割
11	2011年 3月17日	・休学、復学 ・後学期単位取得状況（1～3学年） ・助産師国家試験受験資格関連科目受講生の選考結果 ・下部組織の各担当の活動報告 ・2011年度開講科目の科目責任者 ・「総合実習」「看護総合セミナー」の担当学生数
臨時	2011年 3月22日	*学生委員会と合同開催 ・被災した学生の学習支援等 ・4月からの支援体制について

学生委員会

委員長 竹田津文俊

1. 所管事項

- (1)学生の厚生補導及び賞罰に関する事項
- (2)学生の健康管理及び学生相談に関する事項
- (3)学生の進路指導に関する事項
- (4)学長賞等の選考に関する事項
- (5)看護学部学生寮の管理運営に関する事項
- (6)奨学生の採用及び貸与に関する事項
- (7)その他学部長が必要と認めた事項

2. 委員会の構成

学生委員会の機能を果たすために、奨学生選考担当、卒業指導担当、学友会幹事がおかれた。役割担当（委員会外教員も含む）は、表1の通りである。

表1 構成員と役割

氏名	役割
竹田津文俊 教授	委員長 学友会幹事
成田 伸 教授	副委員長 奨学生選考担当
永井 優子 教授	委員
本田 芳香 教授	委員 卒業生社会貢献 調査担当
大塚公一郎 准教授	委員
大脇 淳子 准教授	奨学生選考担当

*進路指導担当：

成田 伸教授, 川上 勝講師, 塚本 友栄講師,
野崎章子講師

3. 活動内容

学生委員会は、「学生が健全な学業生活を送ることができるよう支援すること」を第一の目的とする委員会である。

上記目標に即して、平成22年度も例年通り、学生委員会は、学業（課外活動も含む）の奨励・支援、学生の学業生活上生じた様々な障害や問題の解決への支援、学生の健康問題解決への支援、学生への経済的支援、学生の将来の進路決定の支援を行った。本学部には、女子学生向けの寮があり、健全な寮生活の支援も本委員会が担当した。本学部の学生は学生自治会を、また寮在住学生は寮自治会をそれぞれ組織し、自主的に運営している。この二つの自治会の運営の支援も本委員会が担当した。これらの本委員会の活動は、本学部の事務

を所掌する看護学務課、看護総務課と緊密な相談・連携のもと行われた。

学生の学業生活上生じた様々な障害や問題の解決への支援は、各学生委員の学生との直接相談、学年担当アドバイザーとの緊密な連絡相談、カウンセリングルーム活用の奨励などを通して行った。

学生の健康問題解決への支援は、学生健康管理チームが中心となって行い、また大学保健室の行う検診への受診の奨励、個々の学生の健康相談などを行った。また、大学保健室において、インフルエンザや破傷風の予防接種を希望者に行った。

学生への経済的支援は、主に奨学金の選考・推薦を通して行われた。自治医科大学看護学部奨学金、日本学生支援機構奨学金の選考・推薦を行った。

新たな学生への経済的支援として、平成21年度より、本学においても、日本社会全体の景気低迷による保護者の経済破たんによる就学困難学生への就学資金（授業料等）の援助が開始された。授業料等の免除・徴収猶予の制度が設けられた。平成22年度も、1学生に「半額免除、半額徴収猶予」の措置が講じられた。

学生の将来の進路決定の支援は、卒業指導担当が中心となって行った。

学生自治会、寮自治会の運営の支援は、学生委員会委員と両自治会役員との懇談を通して行われた。寮生活そのものの支援として、入寮案内、寮生活オリエンテーション、防災訓練、寮規則違反者への指導などが行われた。

部活動、クラブ活動、サークル活動などの課外活動を、学友会（本学部では、学生委員会が所掌）を通して奨励した。薬師祭（学園祭）の開催を支援した。薬師祭は、本年度は、10月8日（金）、9日（土）、10日（日）に開催された。

授業中、課外活動中に発生した傷害、疾病、器物損傷に対する保険として損害賠償責任事故保険「WILL」への学生の加入を促した。尚、平成20年度までに入学した学生（平成22年度の3～4年生）は、入学時に、授業中、課外活動中に発生した傷害、疾病に対する保険として、学生教育研究災害傷害保険にも加入している。平成20年度まで「学生教育研究災害傷害保険」と「WILL」の2本立てだったが、平成21年度以降の入学生からは「WILL」に一本化された。

通常の疾病に対する保険として自治医科大学学

生健康保険組合（自治医科大学附属病院での加療に対して一人年間10万円まで給付されるものである）への学生の加入を促した。

学業（課外活動も含む）の奨励・支援の一環として、看護学部校舎における防災訓練を行った。

4学年卒業予定者のなかより、学長賞候補者を選考し3名推薦した。

年度当初より、本学部卒業生の社会貢献度を調査する準備を始めた。

学生委員会は、8月を除いて毎月定例開催され、合計11回開催された。臨時の委員会が、7月、8月、2月（平成23年）に1回ずつ開催された。

平成22年度末、3月11日に東日本大震災が発災した。当日在学の学生委員は、他の在学看護学部教員、事務職員とともにキャンパス内の学生の安否確認、発災直後の当座の生活の援助を行った。その後全学生の安否確認を行った。年度内に全学生の被災状況調査表を作成し発送した。

FD評価・実施委員会

委員長 中村 美鈴

1. 所管事項

FD評価・実施委員会は、定例委員会であり、所轄事項は、1. 授業内容及び方法の評価に関する事項、2. 教員の資質開発に関する事項、3. 研修会の企画、実施に関する事項、4. 教育内容等の改善のための組織的取り組みに関する事項、5. その他学部長が必要と認めた事項である。

2. 委員会の構成

構成委員は6名で、表1に示す通りである。

表1 構成員と役割

氏名	役割
中村 美鈴 教授	委員長
春山 早苗 教授	副委員長
竹田 俊明 教授	委員
井上 映子 准教授	委員
小原 泉 准教授	委員
齋藤 良子 准教授	委員

3. 活動内容

平成22年は、7回の委員会と2回のFD授業研究会を開催した。

第1回目の委員会では、FD評価実施委員会の所轄事項と年間活動計画について、確認した。22年度の課題として、「学生による授業科目の評価票」ならびに「科目責任者による課題の抽出」共に回収率の向上を目指すこと、最終の授業時間内に評価票の記載時間を確保すること、回収率の向上だけに留まらず、その結果が看護学部の教育目標に沿った教育方法・内容の改善に向けた「Faculty Development」に繋がり、委員会の活動・運営を課題とした。また、学生による授業科目の授業評価票について、授業科目の評価票について集計結果が教員のFDに役立つ設問項目に変更した。

第2回の委員会では、第1回授業研究会の開催ならびにその企画内容について、検討した。教員の資質開発を目的として、教員のキャリア開発支援ツールとして開発されたFDマップ（FDプログラム大系表）、「ティーチングポートフォリオ」について、講演依頼をする方向を確認した。また、改訂版の「学生による授業科目の評価票」について、実施を開始した。

第3回の委員会では、継続審議である第1回の授業研究会について検討し、講師として愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室副室長准教授の佐藤浩章氏に依頼し、開催は平成22年8月31日（火）に決定した。また、臨床教員にも授業研究会への出席参加を呼び掛けることになった。

第4回の授業研究会では、第1回授業研究会のアンケート結果をもとに企画を評価した。約8-9割の参加者が良いと回答しており、自由記載については、特に職位ごとの討議が好評であった。目的の達成度としては、第1回の授業研究会の目的に概ね、達成できていることを確認した。一方、前学期の授業科目に対する学生の評価&科目責任者の課題抽出の状況は、「学生による授業科目の評価票」の回収率(34.4%)及び「科目責任者による課題の抽出票」の提出率(90.2%)であった。平成23年度のFD活動の展開について検討し、平成23年度は、8月に実施した授業研究会を発展させ、アンケートの結果も踏まえて、職位ごとのFDマップを作成する方向で了承された。

第5回の委員会では、第2回授業研究会について、3月15日（火）に実施される審議し、企画を決定した。臨床教員は、授業研究会の目的から対象とせず、グループ分けは職位ごとではなく各職位を交えたものにする。さらに授業研究会において、23年度の授業評価については、委員会で示した意見を述べて問題を提起し、グループワークで話し合い、その後、グループ毎の意見を発表してもらうこととなった。

第6回の委員会では、平成23年3月15日開催予定の平成22年度第2回授業研究会について、当日の役割分担、プログラムについて確認した。

第7回の委員会では、平成23年度の授業評価の方法について、授業研究会で討議された内容をもとに「学生による授業科目の評価票」の作成及び配布・回収方法は、各科目責任者に委ねることとした。なお、現行の評価票（共通）の使用及び方法で実施しても良いと決定した。ただし、現カリキュラムにおける新規開講科目については、現行の評価票で必ず実施し、現行の評価票を使用しない科目については、2年に一度現行の評価票を使用することとした。また、科目責任者による課題抽出票については、次年度の課題と長期的な目標を記載しているが、有用とはないと意見が出され、次年度からは教育力・授業力を高めるために

提出資料を工夫することとし、記載内容は「授業科目の当該年度の課題」⇒「教授方法、他、工夫内容等」⇒「事後の学生の反応・変化、改善後の成果」などを記載することとした。

平成22年度の第1回FD授業研究会は、8月31日に1日に亘り開催した。「本学部教員のFDにおける現状分析とニーズの把握を行い、それぞれの教員が自己の課題を明確にし、今後の改善・向上に取り組むためのFD方法を検討する」という目的のもとに、愛媛大学の佐藤浩章准教授を講師に迎え、FD授業研究会を開催した。FDの概論とFDマップ作成とその活用について講義がなされた。特に職位別のグループワークは、初めての試みであったが有意義であった。アンケート結果も約8～9割が効果的な研修であったと肯定的な回答であった。今回の成果として、それぞれの教員が自己の職本学部教員のFDにおける現状分析とニーズの把握を行い、それぞれの教員が自己の課題を責を自覚し、今後どのようなFD活動を展開していくべきか、具体的な自己の課題を明確にできた。

平成22年度の第1回FD授業研究会は、3月15日開催予定であったが、東北大震災の影響で3月25日に半日に亘り、開催した。目的は、現行カリキュラムにおける共通科目のFD評価を行い、今後の課題を明確にすることと、23年度からのFD活動に基づく授業評価のあり方について検討することであった。教員全体で検討した結果を踏まえて、第7回の委員会で、授業評価方法を決定した。

平成23年度は、看護学部の将来を担う教員に対するFDのあり方について将来を見据えた組織的なFD企画に取り組むことが課題である。

表2 2010年度の審議事項

回	開催日	議 題
1	2010年4月15日	・FD評価実施委員会の所轄事項と年間活動計 ・学生による授業科目の授業評価票について
2	2010年5月6日	・日本看護系大学協議会FD委員会主催 ・平成22年度第1回授業研究会の開催ならびにその企画内容について
3	2010年6月3日	・平成22年度第1回授業研究会について（継続審議） ・その他
4	2010年10月7日	・平成22年度第1回授業研究会の評価について ・平成22年度第1回授業研究会の報告書作成について ・前学期の授業科目に対する学生の評価&科目責任者の課題抽出の状況について
5	2010年11月4日	・平成23年度のFD活動の展開について ・第2回授業研究会について
6	2011年2月3日	・23年度授業研究会のあり方について ・第2回授業研究会について
7	2011年3月25日	・23年度の授業評価の方法について

広報委員会

委員長 成田 伸

1. 所管事項

本委員会の所管事項は、本看護学部における教育・研究の活動状況について、社会に向けて正確かつ迅速な情報の提供を行う、学内外に向けた広報活動を統括することである。

主な活動は、看護学部パンフレットの作成、機関紙ビタミンN作成、オープンキャンパスの企画・実施・評価、看護学部ホームページの企画、進路相談会、模擬授業等の担当調整、その他PRに関することである。

2. 委員会の構成

本委員会の構成員と役割を表1に示した。

表1 構成員と役割

氏名	役割
成田 伸 教授	委員長
渡邊 亮一 教授	副委員長（HP担当）
永井 優子 教授	ビタミンN・オープンキャンパス担当
小原 泉 准教授	パンフレット/ビタミンN担当
櫻井 美奈 講師	パンフレット/HP担当
樋貝 繁香 講師	オープンキャンパス/HP担当

3. 活動内容

本年度は8回の委員会を開催した。また、委員会に先立って、各担当を中心としたワーキングを開催し、十分な事前検討を行ったうえで資料を作成し、委員会の実効性を高めた。

表2 2010年度の審議事項

回	開催日	審議事項
1	2010年4月15日	年間スケジュール、活動内容・役割分担の確認調整、平成22年度パンフレット及びビタミンNの進捗状況報告
2	22010年6月17日	進路相談・模擬授業担当者調整、平成22年度ふれあい看護体験後の学部紹介の実施報告、平成22年度ビタミンN編集作業報告、HP更新状況報告、平成22年度オープンキャンパス実施案の検討、平成23年度パンフレット作成に向けての活動
3	2010年9月16日	平成22年度オープンキャンパス開催報告及び平成23年度に向けての検討（学生ボランティア用Tシャ

		ツ作成等）、平成23年度パンフレット作成に向けての検討（本学部の“うり”となる部分についての改編と原稿依頼等）、ビタミンN第7号配布報告及び第8号作成に向けての検討、学部紹介DVD簡略版作成についての検討
4	2010年11月19日	大学HPリニューアル、学校教育法施行規則改正に伴う情報公開報告と看護学部HPの修正に向けての検討、平成23年度オープンキャンパス（ミニオープンキャンパス含む）の検討、平成23年度ビタミンNの準備状況報告、平成23年度パンフレット作成の準備状況報告、簡略版看護学部紹介DVDと看護学部紹介用パワーポイントの作成とその活用について
5	2010年12月16日	看護学部HPのリニューアルについて、平成23年度オープンキャンパスの実施計画について（在学生・卒業生紹介DVDの作成含む）、平成23年度ビタミンNの編集方針について、平成23年度パンフレットのコンテンツ検討
6	2011年1月20日	HPリニューアルについて、平成23年度オープンキャンパスについて（在学生・卒業生紹介のDVD作成含む）、平成23年度ビタミンNについて、平成23年度パンフレットについて
7	2011年2月16日	HPリニューアルと情報公開について、平成23年度オープンキャンパスについて（在学生・卒業生紹介DVD作成等）、平成23年度ビタミンN編集について、平成23年度パンフレット（原稿締切・掲載写真等）について
8	2011年3月17日	次期広報委員会への申し送り事項について、HPリニューアルについて、平成23年度オープンキャンパスについて、平成23年度ビタミンNについて、平成23年度パンフレットについて

編集委員会

委員長 本田 芳香

1. 所管事項

本委員会は、自治医科大学看護学部年報、自治医科大学大学院看護学研究科年報および自治医科大学看護学ジャーナルの刊行を所轄する。

2. 委員会の構成

本委員会の構成員と役割は表1に示すとおりである。

表1 構成員と役割

氏名	役割
本田 芳香 教授	委員長
大塚 公一郎 准教授	副委員長 看護学ジャーナル担当
鈴木 久美子 准教授	年報の編集・刊行担当
小原 泉 准教授	
高木 初子 准教授	看護学ジャーナル担当
里光 やよい 准教授	

3. 活動内容

本委員会は、今年度は表2に示すとおり3回の委員会を開催し、平成22年度年報の編集内容の検討、執筆要領の記載方法の変更および看護学ジャーナル投稿規程の一部改定について検討をおこなった。

表2 委員会開催

回	開催日	審議事項
1	2010年5月13日	年間方針、年間計画、役割分担 年報の編集内容の一部変更・追加検討
2	2010年10月21日	看護学ジャーナル論文種類の変更 (案) 検討 看護学ジャーナルのHP掲載方法
3	2011年1月20日	看護学ジャーナル論文種類と定義 (案) 看護学ジャーナル投稿論文審査規定 (案) および投稿論文査読評価基準 (案) 検討

自治医科大学看護学部年報（第8号）は、自治医科大学大学院看護学研究科年報（第4号）とあわせて発行した。編集内容は、新たなに巻頭言、特別報告、活動報告の3項目を追加した。特別報告は、当該年度の特記すべき事項として学部または大学院における新たな事業の取り組みや新たな講座開設などの報告とし、本学大学院看護学研究

科を修了し認定看護管理者資格取得およびクリティカルケア専門看護師資格取得した2名の方に執筆していただいた。活動報告は、委員会、教育研究別分野、大学院看護学研究科より当該年度の特記すべき活動に関する報告とし、委員会活動より実習調整委員会、教育研究別分野より総合分野「文献購読セミナー」、大学院教育より研究構想発表会についてそれぞれ執筆をしていただいた。また年報の執筆要領の記載方法を統一するため、執筆フォーマットを作成し体裁を整えた。

自治医科大学看護学ジャーナル（8号）は、投稿論文は計16編、内訳は原著7編、報告7編、資料2編であった。1編につき3名の査読者が論文内容の査読にあたった。

昨年度より継続審議となっていたホームページの掲載方法を検討した結果、看護学ジャーナル第7号からの掲載を図書館ホームページへのリンク掲載およびメディカルオンライン掲載をすることが了承された。

また論文種類と定義について見直すため審議した結果、次年度以降は論文の種類は「論文」、「総説」、「実践報告」、「資料」に変更となった。さらにより質の高い看護学ジャーナル編集を目指し、看護学ジャーナルの投稿論文審査方法および基準などを明文化する目的で、「自治医科大学看護学ジャーナル投稿論文審査規程」および「投稿論文査読評価基準」をとりまとめた。

なお、自治医科大学看護学部年報（第8号）および自治医科大学大学院看護学研究科年報（第4号）は、国立国会図書館をはじめ、政府関係機関、学外の実習関連施設、全国の看護系大学、栃木県関係、県内の看護系学校、総合病院などへ送付した。

国家試験対策委員会

委員長 渡邊 亮一

1. 所管事項

本委員会の所管事項は、保健師・助産師・看護師国家試験を受験する本学部の在學生や卒業生が国家試験に合格するように、学習環境を整え、学習相談などの支援を行うことである。

2. 委員会の構成

本委員会の構成員と役割を表1に示す。

表1 構成員と役割

氏名	役割
渡邊 亮一 教授	委員長
里光やよい 准教授	副委員長
竹田 俊明 教授	委員
永井 優子 教授	委員
鈴木久美子 准教授	委員
樋貝 繁香 講師	委員

3. 活動内容

平成22年度は、表2に示すような議題で計9回の委員会を開催した。

委員会の具体的な活動としては、まず国家試験受験に向けてのガイダンスを2回実施した。また、これ以外に、3年生を対象にガイダンスを1回実施した。次に、国家試験対策のための模擬試験を、保健師については2回、助産師については2回、看護師については3回実施した。これらの模擬試験の成績を踏まえて、学生の個別面接・指導を行った。個別面接・指導は、学生を6グループに分け、それぞれのグループを1名の本委員会の委員が担当することとし、学習方法や学習上の悩みなどの学習相談を行った。また、国家試験出題科目を担当する他の教員にも協力を要請し、平成22年12月から平成23年1月にかけて、国家試験対策ゼミを開講した。

学習環境の整備については、学生サロンに設けられた国試対策コーナーに、受験参考書や問題集を置き、学生がいつでも利用できるようにした。また、業者が実施する国家試験対策模擬試験・国家試験対策講義（講習）のパンフレットを置き、学生が国家試験に備えるための便宜を図った。

平成22年度の国家試験は、助産師が平成23年2月17日（木）に、保健師が平成23年2月18日（金）に、看護師が平成23年2月20日（日）に実施され、

その結果は表3に示すとおりであった。平成22年度の全国の合格率は、保健師が86.3%、助産師が97.2%、看護師が91.8%であった。本学部は、保健師の合格率が92.4%といくぶん低かったが、助産師と看護師は全員合格という結果であった。特に、看護師国家試験の全員合格は、本学部が開設されて以来はじめての快挙であった。平成22年度の国家試験の結果は良好であったが、次年度以降も高い合格率を維持できるように、引き続き国家試験対策に力を注いでいく必要がある。

表2 2010年度の審議事項

回	開催日	審議事項
1	2010年4月8日	<ul style="list-style-type: none"> ・国家試験対策委員会の所管事項について ・平成21年度国家試験結果の報告について ・4年生に対する学年ガイダンスの実施について ・国家試験対策委員会の方針、役割分担、年間スケジュールについて ・平成22年度国家試験対策模擬試験について ・平成21年度国家試験不合格者の対応体制について
2	2010年5月13日	<ul style="list-style-type: none"> ・国家試験対策模擬試験の日程および担当者について ・3年生に対する国家試験対策について ・4年生の個人面接の結果について
3	2010年7月8日	<ul style="list-style-type: none"> ・国家試験模擬試験実施マニュアルについて ・第1回看護師国家試験模擬試験の結果について ・4年生に対する対応・指導等について
4	2010年9月9日	<ul style="list-style-type: none"> ・保健師・助産師・看護師国家試験の施行（官報）について ・国家試験対策模擬試験日程等の確認について ・4年次授業科目「看護トピックス」と国家試験対策の位置づけについて ・担当学生の近況報告について
5	2010年11月11日	<ul style="list-style-type: none"> ・保健師・助産師・看護師国家試験模擬試験の受験状況について ・学長特別講義および国家試験出願手続説明会等の開催について

		<ul style="list-style-type: none"> ・国家試験対策ゼミについて ・担当学生の近況報告について
6	2010年12月9日	<ul style="list-style-type: none"> ・保健師・看護師国家試験模擬試験について ・国家試験対策ゼミ日程表（案）について ・3年生に対する国家試験ガイダンスについて ・理事長特別講話および国家試験受験説明会の開催について ・担当学生の近況報告
7	2011年1月13日	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回保健師・第3回看護師国家試験模擬試験の実施状況について ・3年生の低学年対象専門基礎科目実力確認テストの申込状況について ・4年生への土曜日・日曜日の学習室・中教室の開放について ・次年度に向けた国家試験対策推薦参考図書について ・担当学生の近況報告
8	2011年2月10日	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回保健師・第3回看護師国家試験模擬試験の結果と担当学生の近況について ・理事長特別講話および国家試験受験説明会について ・国家試験対策ゼミの事後評価について ・3年生の低学年対象専門基礎科目実力確認テストについて
9	2011年3月25日	<ul style="list-style-type: none"> ・第97回保健師・第94回助産師・第100回看護師国家試験の合格発表について ・国家試験対策ゼミに関するアンケートの集計結果について ・低学年対象専門基礎科目実力確認テストの結果について ・次年度の国家試験対策の計画と4年生に対するオリエンテーションについて

表3 2010年度保健師助産師看護師国家試験の結果

区 分	資格	受験者数 (人)	合格者数 (人)	合格率 (%)
自治医科大学 看護学部	保健師	118	109	92.4
	助産師	13	13	100.0
	看護師	111	111	100.0
全 国	保健師	14,819	12,792	86.3
	助産師	2,410	2,342	97.2
	看護師	54,138	49,688	91.8

臨床実習指導研修委員会

委員長 永井 優子

1. 所管事項

本委員会の所管事項は、臨床実習指導研修会のプログラムに関する事項、および臨床実習指導研修会の開催に関する事項である。平成22年度は、臨床実習指導研修会の修了者の調査に関する事項が加わった。

2. 委員会の構成

本委員会の構成員と役割を表1に示した。また、臨床実習指導研修会の修了者を対象とした調査は、本年度の受講生の分析を川上講師と板橋助教が担当し、過去の修了者の追跡に関する調査は委員長、小川講師、崎田講師が担当した。

表1 構成員と役割

氏名	役割
永井 優子 教授	委員長
中島登美子 教授	副委員長
小川 朋子 講師	受講者名簿担当
川上 勝 講師	アンケート担当
崎田マユミ 講師	事例演習主担当
板橋 直人 助教	テキスト担当

3. 活動内容

今年度は8回開催（表2参照）し、第6回までは今年度の「自治医科大学看護学部臨床実習指導研修会」の準備として、前年度委員会で計画した午後のプログラムを事例検討会に変更すること、テキスト印刷を業者委託とすること、本看護学部ホームページ上から受講申し込みを受け付けること等の準備を行った。

今年度の研修会は平成22年9月7日（火）、8日（水）の2日間、本学部大教室で開催した。受講者は、附属病院をはじめ、本看護学部の実習施設9施設、計60名が受講し、2日間の研修を終えた59名に修了証書とバッヂを授与した。

研修会1日目は、午前中に春山教務委員長より「本学部のカリキュラム及び臨地実習の概要について」、永井臨床実習指導研修委員長より「本学部学生の特徴と臨床実習におけるコミュニケーション」について講義を行った。午後は6人編成の10グループで、臨床実習で遭遇する3つの状況の中から各グループで取り組む事例の一つを選び、課題に基づいて討議を行い、その結果を資料にまと

め、発表して全体討議を行った。

2日目は、午前には宇城講師より「臨床実習指導の実際～教員の立場から～」、附属病院の茂呂悦子臨床助教（集中治療室主任看護師）及びとちぎ子ども医療センターの吉川佳孝臨床助教（3A病棟主任看護師）より、「臨床実習指導の実際～臨床助教の立場から～」、高木准教授より「臨床実習における教育支援方法」について講義を行った。午後は『成人期看護臨床実習』における事例について、1日目と同様にグループワークを行った後、全体討議を行った。

また、第7回からは事後アンケート調査を含めて実施評価を行い、次年度実施計画を検討した。

なお、本年度受講動機と事後アンケートの分析を行った結果、動機と受講後の満足度は一致していることが明らかになった。過去の修了者の追跡に関する方法等について検討を重ねたが、実施計画を立案して年度末を迎え、実施できなかった。

表2 2010年度の審議事項

回	開催日	審議事項
1	2010年4月15日	役割分担と開催日程の検討 平成22年度研修会について 1
2	2010年5月13日	平成22年度研修会について 2 修了生の調査について 1
3	2010年6月10日	平成22年度研修会について 3 修了生の調査について 2
4	2010年7月8日	平成22年度研修会について 4
5	2010年8月20日	平成22年度研修会の事前準備 修了生の調査について 3
6	2010年10月14日	研修会実施結果の評価 修了生の調査について 4
7	2010年11月11日	次年度研修会の計画立案 1 修了生の調査について 5
8	2011年1月6日	次年度研修会の計画立案 2 研修会マニュアルの修正 修了生の調査について 6

実習調整委員会

委員長 中島登美子

1. 所管事項

本委員会の所管事項は、1) 実習教育に関する事項、2) その他学部長が必要と認めた事項である。

2. 委員会の構成

委員会の構成員と役割を表1に示す。

表1 構成員と役割

氏名	役割
中島登美子 教授	委員長
高木 初子 准教授	副委員長
里光やよい 准教授	委員
崎田マユミ 講師	委員
塚本 友栄 講師	委員
野崎 章子 講師	委員

3. 活動内容

本委員会は、新カリキュラム進行に伴う実習教育運営上の全般的調整を行うために設置されており、設置期間は、平成20年4月から平成24年3月までである。本年度は計11回の委員会を開催し、1) 看護学臨地実習の計画・実施・評価に関する事項、2) 看護学臨地実習施設との連絡調整に関する事項、3) その他、臨地実習に関する事項を検討した。

1) 看護学臨地実習の計画・実施・評価に関する事項

- (1) 実習要項の作成
- (2) 臨地実習におけるヒヤリハットの蓄積とフィードバック
- (3) 3年次看護学実習全体オリエンテーション
- (4) 病院情報システム利用に伴う教育
- (5) 次年度の3年次前学期実習ローテーション表作成
- (6) 実習終了後の実習記録の取り扱い

2) 看護学臨地実習施設との連絡調整に関する事項

- (1) 自治医科大学附属病院との臨地実習に係わる連絡調整
- (2) 実習教育説明会の計画立案と実施

3) その他、臨地実習に関する事項

- (1) 新任教員への本学の実習教育に関するオリエンテーション

4. 今後の課題

1) 実習施設との連携

教育成果が得られる臨地実習を行うには、実習施設との連携が不可欠であり、主たる実習施設である自治医大附属病院看護部と実習指導に関する連絡調整を行ってきた。今年度はカリキュラム改正3年目に入り、前期の臨地実習および後期の施設外における臨地実習においても混乱なく終了した。次年度の実習については、附属病院において新人研修が開始されること等から、異動期に重なる4年次の総合実習、2年次の日常生活援助実習の連携調整を密に行う必要がある。

2) 実習における安全対策の充実

最近の病院内感染や医療事故、および個人情報漏洩の発生に鑑み、実習における安全への配慮が必要となっている。実習における安全対策として、個人情報漏洩予防対策、事故予防対策等を行ってきたが、今年度は、事故報告6件、ヒヤリハット11件の報告があり、昨年の5件と比較しても増加した。その背景には、報告につなげる意識が高まったこともあるが、実際に事故が増加していることから、今後、基礎看護学教育における安全対策を強化していく必要があるといえる。

研究推進委員会

委員長 半澤 節子

1. 所管事項

研究推進委員会は、平成20年度に看護学部の教員による研究活動の強化を図るために、新たに設置された。研究推進委員会の目的は、平成20年度～平成24年度までの第二期中長期目標、中期計画に基づき、中期目標「教員の教育研究活動を適切に評価するための評価方法を構築する」、中期計画「評価方法を検討する」と明記されている。

本委員会の所管事項として、1) 研究活動評価のためのシステムの構築（平成20年度から24年度）、2) 研究体制の確立を図り、教員の研究能力、研究指導能力の向上を図り、現場の看護職者との共同研究を推進する（平成22年度から24年度）、3) 実践の場における研究の推進、4) 教員の研究能力の向上に資するための環境整備という4つの課題が明記されている。

2. 委員会の構成

氏名	役割
半澤 節子 教授	委員長
井上 映子 准教授	副委員長
小原 泉 准教授	委員
齋藤 良子 准教授	委員
宇城 令 講師	委員
角川 志穂 講師	委員

3. 活動内容

本委員会は、1) 研究体制の確立を図り、教員の研究能力、研究指導能力を向上するための共同研究を推進すること、2) 研究活動評価の方法を確立すること、以上2点を平成24年度までの目標とした。

3年目となった平成22年度は、引き続き現場の看護職者との共同研究を推進し研究体制の確立を図ることを目的に、看護系教員共同研究費申請の調整を行った。また、9月及び2月の年2回開催される附属病院看護部主催看護研究発表会には、研究論文の査読の段階から本委員会委員3名が参加し、発表会でも各病棟の研究発表に対する助言を行った。研究活動評価の方法については、委員会案を作成し、教授総会の了承を得て初年度として、研究活動自己評価を実施した。こうした取り組みの結果、本学看護学ジャーナルの原著、報告、学

術雑誌への論文掲載が増加した。

4. 定例会における議題

第1回定例（22.4.8）

- 1) 平成22年度年間計画の検討
 - 2) 平成22年度看護系共同研究費申請について
- 第2回定例（22.5.13）

* 科学研究費申請に関するセミナーの開催について

第3回定例（22.6.10）

- 1) 平成22年度共同研究費申請一覧について
 - 2) 各種研究費補助金の取得状況
 - 3) 科学研究費申請に関するセミナーの開催
- 第4回定例（22.7.8）

- 1) 科学研究費申請に関するセミナーの開催
 - 2) 競争的資金に係る間接経費について
- 第5回定例（22.10.14）

1) 平成22年度科学研究費申請に関するセミナーの報告

2) 教員の研究活動の評価基準策定の検討

第6回定例（22.12.9）

* 教員の研究活動の評価基準策定の検討

第7回定例（23.1.13）

* 教員の研究活動の評価基準策定の検討

5. 本年度の目標達成状況と次年度の課題

平成22年度の重点課題と明記した、研究体制の確立、教員の研究能力、研究指導能力を向上のため現場の看護職者との共同研究の推進については、前年度に引き続き学内外の研究費補助制度の活用の促進、研究活動の充実強化により、達成することができた。その一例として、科学研究費補助金獲得件数の増加、本学学内学術雑誌「自治医科大学看護学ジャーナル」の掲載論文数の増加にみるように、一定の成果を得ている。

平成23年も、科学研究費補助金の申請及び採択件数を増やすためのセミナーの開催と内容の工夫、附属病院看護部など実践現場の看護職者との共同研究の強化を引き続き課題とする。また、本学で毎年主催される自治医科大学シンポジウムでの発表についても、シンポジウム委員会と連携を図りながら、学内教員の研究発表の場として活用を促していく。

入試実施委員会

委員長 大塚公一郎

1. 所管事項

入試実施委員会の所管事項は、①入試実施説明会に関する事、②入試実施日の役割分担・実施手順に関する事、③推薦指定校の訪問の3つである。

2. 委員会の構成

表1 構成員と役割

氏名	役割
大塚公一郎 准教授	委員長
鈴木久美子 准教授	副委員長
大脇 淳子 准教授	委員
内海 香子 講師	委員
小川 朋子 講師	委員
工藤奈織美 講師	委員

3. 活動内容

平成22年度は、表2に示すような議題で計3回の委員会を開催した。

推薦指定校の訪問については、平成22年6月中旬から7月上旬にかけて、入試実施委員会の委員以外の教授・准教授を含めた計11名の教員と看護学務課・看護総務課の職員が協力して、栃木県18校、埼玉県8校、福島県4校、群馬県2校、茨城県・岩手県各1校の計34校の推薦指定校の訪問を実施した。

入試実施説明会は、平成22年10月28日（木）に推薦入学試験の説明会を、平成23年1月27日（木）に一般選抜入学試験の説明会を実施した。

入試実施日の役割分担・実施手順に関しては、前年度の委員会でこれらを記載した3種類のマニュアル（「推薦入学試験マニュアル」、「一般選抜入学試験第一次試験（筆記試験）マニュアル」、「一般選抜入学試験第二次試験（面接試験）マニュアル」）を作成していたので、この内容の見直しや再検討を行い、マニュアルを完成させた。このマニュアルを用いて、前述した入試実施説明会を行った。

表3 2010年度の審議事項

回	開催日	審議事項
1	2010年4月27日	・入試実施委員会の所管事項ならびに委員等の構成について ・平成23年度看護学部入学試験の概要について ・推薦指定校の訪問について ・入試実施説明会の日程について ・入試実施マニュアルについて
2	2010年10月15日	平成23年度入学試験の実施について、および平成23年度推薦入学試験実施マニュアルについて
3	2011年1月6日	・平成23年度一般選抜入学試験（一次、二次）実施マニュアルについて

大学院看護学研究科委員会等報告

大学院看護学研究科委員会

委員長 水戸美津子

1. 所管事項

- (1)学則の制定及び改廃に関する事項
- (2)研究科の教育課程に関する事項
- (3)入学、休学、退学、転学、転入学、除籍及び賞罰に関する事項
- (4)試験に関する事項
- (5)学位論文審査に関する事項
- (6)その他研究科の学事に関する重要事項

2. 委員会の構成

- (1)「自治医科大学大学院学則」第41条第2項に規定する者（研究科長，専攻分野主任教授，研究科長が指名する教授）

表1 構成員と役割

氏名	役割
水戸 美津子 教授	委員長（研究科長）
半澤 節子 教授	委員（幹事長）
春山 早苗 教授	委員（専攻分野主任）
中村 美鈴 教授	委員（専攻分野主任）
中島 登美子 教授	委員
竹田津 文俊 教授	委員
本田 芳香 教授	委員
成田 伸 教授	委員
(小原 泉 准教授)	オブザーバー

3. 活動内容

- (1)「自治医科大学大学院学則」第41条第1項の規定により，看護学研究科の学事に関する重要事項について審議を行うため，表2のとおり看護学研究科委員会を開催した。

表2 2010年度の審議事項

回	開催日	審議事項
1	2010年 4月1日	<ul style="list-style-type: none"> ・研究指導教員の決定について ・ティーチングアシスタントの決定について
2	2010年 5月6日	<ul style="list-style-type: none"> ・履修科目の決定について ・ティーチングアシスタント（追加）の決定について ・研究構想発表会の企画・運営・評価について ・2011年度入学試験説明会の決定について ・2011年度科目等履修生の募集日程について ・既取得単位の認定について

3	2010年 6月3日	<ul style="list-style-type: none"> ・出願資格認定試験並びに入学試験の実施要領について ・長期履修規程について
4	2010年 7月1日	<ul style="list-style-type: none"> ・休学願について
5	2010年 9月2日	<ul style="list-style-type: none"> ・2011年度予算（案）について ・課題研究について ・休学願について ・ティーチングアシスタント（追加）について
6	2010年 9月30日	<ul style="list-style-type: none"> ・2011年度出願資格認定試験合否判定について ・2011年度入学試験実施について ・休学願について
7	2010年 10月21日	<ul style="list-style-type: none"> ・科目等履修生単位修得（前期履修）について ・2011年度入学試験合否判定について ・大学院教員任用審査について
8	2010年 11月16日	<ul style="list-style-type: none"> ・看護学研究科博士後期課程の設置について ・アドミッションポリシー（案）について
9	2010年 12月2日	<ul style="list-style-type: none"> ・大学院教員任用審査について ・2011年度科目責任者の決定について
10	2010年 12月20日	<ul style="list-style-type: none"> ・学位審査委員会の設置について ・論文審査（口頭試問）及び最終試験（発表会）について
11	2011年 1月27日	<ul style="list-style-type: none"> ・2011年度学年歴（案）について ・2011年度看護学研究倫理審査会等の日程（案）について ・2012年度入学試験日程（案）について ・2011年度科目等履修生の決定について ・2011年度時間割（案）について
12	2011年 2月17日	<ul style="list-style-type: none"> ・論文審査（口頭試問）の結果について
13	2011年 3月3日	<ul style="list-style-type: none"> ・最終試験の判定について ・修了判定について ・単位取得の認定について ・科目等履修生単位修得（後期履修）について ・2011年度研究科運営組織について ・2011年度新入生・在学生オリエンテーション（案）について ・大学院教員任用審査について

※ 本年度（2010年度）の項目については，年度の記載を省略

研究科委員会幹事会

幹事長 半澤 節子

1. 所管事項

研究会委員会幹事会の審議事項は、自治医科大学大学院看護学研究科委員会幹事会運営内規に基づき、(1) 自治医科大学大学院看護学研究科委員会（以下「研究科委員会」という）に付議する事項に関する事前審議、(2) 自治医科大学大学院看護学研究科に係る企画立案、(3) その他大学院看護学研究科の運営に係る日常業務の処理という3点である。

2. 委員会の構成（構成員と役割）

氏名	役割
半澤 節子 教授	幹事長
中村 美鈴 教授	幹事（実践看護学分野主任）
春山 早苗 教授	幹事（地域看護管理学分野主任）
井上 映子 准教授	幹事
大脇 淳子 准教授	幹事
小原 泉 准教授	幹事
齋藤 良子 准教授	幹事
鈴木久美子 准教授	幹事
高木 初子 准教授	幹事

3. 活動内容

本研究科委員会幹事会は、看護学研究科研究委員会の審議事項、報告事項について事前に審議し、研究科委員会幹事会案を提示する。審議事項としては、入学試験実施、次年度予算、広報、授業研究会、研究構想発表会に関する事項を含むものである。

4. 定例会における議題

第1回定例（22.4.15）

1) 平成22年度看護学研究科委員会幹事会役割分担について

2) 既習得単位の認定について

第2回定例（22.5.20）

* 平成23年度看護学研究科入学試験実施について

第3回定例（22.7.15）

1) 平成23年度看護学研究科予算（案）

2) 課題研究・特別研究について

3) 広報について

第4回定例（22.9.16）

1) 授業研究会について

2) 研究構想発表会について

第5回定例（22.11.18）

1) 授業研究会について

第6回定例（23.1.20）

1) 広報について（ホームページ、パンフレット）

2) 非常勤講師の任用について（教授のみ審議）

5. 本年度の目標達成状況と次年度の課題

看護学研究科委員会幹事会として所管する事項を適切に審議し、必要な提案を行うことができた。次年度も引き続き大学院教育の向上に資するよう、必要な事項について事前審議を行っていく。

教育研究分野別報告

基礎科学関連

教授 渡邊 亮一

1. スタッフの紹介

教授 渡邊 亮一

准教授 大塚公一郎

2. 教育の概要

1) 基礎科学関連の教育概要

(1)情報学（1～4年次後学期2単位：選択）

「情報学」は、情報とは何かを学び、情報量の概念を理解し、メディアリテラシー能力を養うことを教育目標としている。渡邊が30時間を担当して講義ならびに演習を行った。

(2)統計学（2年次前学期1単位：必修）

「統計学」は、推測統計学の基本的な概念を理解し、それを医療や看護の場面で応用できる能力を養うことを教育目標としている。渡邊が15時間を担当して講義を行った。

(3)統計学演習（2年次後学期1単位：必修）

「統計学演習」は、「統計学」で学習した内容をさまざまな場面で応用できる能力を養うことを教育目標としている。渡邊が30時間を担当して講義ならびに演習を行った。

(4)疫学（2年次前学期2単位：必修）

「疫学」は、疫学とは何か、保健問題解決のためになぜ必要なのかを理解し、その方法論を習得することを教育目標としている。加えて、健康指標、保健統計関連指標について理解することを教育目標にしている。渡邊が30時間を担当して講義ならびに演習を行った。

(5)保健医療関係法規（4年次前学期2単位：必修）

「保健医療関係法規」は、看護職に必要な保健医療に関する法体系の概要を理解することを教育目標にしている。柳川洋非常勤講師（自治医科大学名誉教授）が20時間、渡邊が10時間を担当して講義を行った。

(6)心理学（2年次前学期2単位：必修）

「心理学」は、心理学の基礎的な知識を理解することを教育目標としている。大塚が30時間を担当して講義を行った。

(7)人間関係論（1～4年次前学期2単位：選択）

「人間関係論」は、集団力学の理論を習得し、相互に影響を与えながら人が他者と形成する人間関係を理解し、円滑な人間関係をつくりあげる能

力を養うことを教育目標としている。大塚が14時間、高村寿子非常勤講師（自治医科大学名誉教授）が16時間を担当して講義ならびに演習を行った。

(8)哲学（1～4年次前学期1単位：選択）

「哲学」は、人間、身体、精神、存在、自己、世界、宇宙などの意味について考察することを教育目標としている。大塚が15時間を担当して講義を行った。

(9)倫理学（1年次後学期1単位：必修）

「倫理学」は、社会的規範（ルール）や道徳的判断、道徳的価値について考察することを教育目標としている。春山早苗教授が2時間、大塚が13時間を担当して講義を行った。

(10)文化人類学入門（1～4年次後学期2単位：選択）

「文化人類学入門」は、家族と親族、地域社会・共同体・民族などの概念から、わが国の土着の文化を含めた多様な文化への理解を深め、文化の比較を行い、文化人類学を理解することを教育目標としている。科目分担者である渡部圭一非常勤講師（早稲田大学人間科学部教員）が10時間、村田敦郎非常勤講師（共栄学園短期大学社会福祉学助手）が10時間、大塚が10時間を担当して講義を行った。

2) 基礎科学関連以外の担当教育概要

(1)看護基礎セミナー（1年次前学期1単位：選択）

「看護基礎セミナー」は、ヒューマンケアの基本を理解することを教育目標としている。大塚は長井栄子助教と組んで、渡邊は崎田マユミ講師と組んで、ともに30時間の演習を担当した。

(2)文献講読セミナー（2年次前学期1単位：必修）

「文献講読セミナー」は、看護にかかわる情報収集の基本的な方法を習得することを教育目標としている。渡邊は、「インターネットの情報資源」に関する2時間の講義を担当した。

(3)生活の理解実習（1年次後学期2単位：必修）

「生活の理解実習」は、健康な生活を理解することを教育目標としている。大塚と渡邊は、ともに90時間を担当した。

(4)在宅看護実習（3年次後学期3単位：必修）

「在宅看護実習」は、健康障害が在宅および学校または職場における生活に及ぼす影響を理解することを教育目標としている。大塚と渡邊は、ともに産業看護実習の3時間を担当した。

(5)大塚は、本学医学部3年生を対象に、2時間の社会精神医学の系統講義を行った。

(6)大塚は、本学医学部4年生を対象に、精神科臨床実習クルズス「サイコネフロロジー」の講義を計16時間行った。

3. 研究の概要

1) 医療情報技師の育成に関する研究

渡邊は、日本医療情報学会医療情報技師育成部会が認定する資格である「医療情報技師」および「上級医療情報技師」の育成にかかわっているが、そのなかで「上級医療情報技師」の育成制度や資格制度に関連した研究を行っている。

2) 日系ブラジル人児童のメンタルヘルス支援

大塚は、本学部教員野崎章子とともに、2010年度明治安田こころの健康財団研究助成金を得て、日系ブラジル人児童のメンタルヘルス支援の調査・研究を行った。

3) 日系ブラジル人の社会精神医学的研究

大塚は、本学附属病院精神科において、日系ブラジル人を中心とした外国人患者の診療にあたるとともに、彼らを対象とした社会精神医学的調査、精神病理学的研究を行い、その結果を学会誌に論文発表した。

4) 難民・難民認定申請者の生活実態調査とその福祉支援の構築についての研究

大塚は、平成22年度～平成24年度科学研究費基盤研究（B）（一般）「日本に在住する難民・難民認定申請者の生活実態調査とその福祉支援の構築に向けた研究」（代表 野田文隆）の連携研究者として、研究の計画、立案に携わっている。

5) 腎透析患者の精神障害、腎移植ドナーのメンタルヘルスについての研究

大塚は、本学附属病院腎臓センター外科部門の依頼のもと、同病院精神科医師である松本健二（平成22年10月まで）、斎藤暢是（同年11月より）とともに生体腎移植のドナー候補者の意思決定を確認するための面接を行うとともに、附属病院精神科外来で透析患者の診療にあたった。以上の診療にもとづき、サイコネフロロジーの研究を行い、その結果を学会発表した。

6) 統合失調症の精神病理学的研究

大塚は、本学医学部精神医学教室加藤敏教授とともに、統合失調症の妄想についての精神病理学的研究を行い、その結果を学会発表した。

4. その他

1) 渡邊は、平成21年度に引き続いて、財団法人日本医療機能評価機構の評価調査者として、第三者病院機能評価事業に参画した。

2) 渡邊は、日本医療福祉設備学会理事ならびに総務委員会委員長、日本医療情報学会理事・評議員ならびに医療情報技師育成部会会長、日本診療録管理学会評議員、日本医療・病院管理学会評議員ならびに研究委員会委員などを務めた。

3) 渡邊は、第30回医療情報学連合大会（第11回日本医療情報学会学術大会）のプログラム委員会委員ならびに一般口演の座長、第39回日本医療福祉設備学会のプログラム委員会委員ならびに一般口演の座長を務めた。

4) 渡邊は、社団法人栃木県看護協会の認定看護管理者ファーストレベル教育「看護情報論」、ならびに認定看護管理者セカンドレベル教育「情報テクノロジー」の講師を務め、講義ならびに演習を行った。

5) 渡邊は、非常勤講師として、女子栄養大学栄養学部保健栄養学科の「情報科学概論」の講義（30時間）を、社団法人南埼玉郡市医師会久喜看護専門学校「看護学概論Ⅲ（看護研究）」の講義および演習（30時間）を担当した。

6) 大塚は、平成22年度自治医科大学公開講座において、「認知症患者の問題行動と対応」という演題で講師を務めた。

7) 大塚は、平成21年1月より多文化間精神医学会理事、同年9月より同学会機関誌「こころと文化」編集委員を務めている。

8) 大塚は、平成21年度より日本社会精神医学会学術委員を務めている。

9) 大塚は、平成22年10月より日本精神病理・精神療法学会評議員を務めている。

10) 大塚は、平成19年度より引き続いて、栃木県障害者介護給付費等不服審査会委員を務めている。

11) 大塚は、非常勤講師として、栃木県立衛生福祉大学校看護学科専科で2時間の精神医学の講義を行った。

12) 大塚は、2010年10月29-30日に宇都宮市で開催された第14回精神医学史学会にて、プログラム委員を務めた。

医学関連

教授 竹田津文俊

1. スタッフの紹介

教授 竹田津文俊

教授 竹田 俊明

2. 教育の概要

新カリキュラムが平成20年度にスタートし、平成22年度は3年目である。

専門基礎（旧カリキュラム）／医学関連分野（新カリキュラム）の主な担当科目は、旧カリキュラムでは「看護の対象である人間の理解および看護実践の基礎となる科目」であった。新カリキュラムでは「発達段階に共通する看護実践となる科目」より構成されている。旧カリキュラム専門基礎領域の竹田、竹田津担当は、平成21年度に終了している。平成22年度担当は無しであった。

新カリキュラムでは、従来通り、竹田が医学関連分野の主な担当科目のなかでもより基礎に近い部分を担当し、竹田津がより臨床に近い部分を担当した。

<新カリキュラム>

竹田は、人体の構造と機能I（1学年対象）と人体の構造と機能II（1学年対象）を主科目として担当し、その他、生化学（1学年対象）、免疫学（1学年対象）とグローバル生物学（2学年対象）を担当した。

竹田津は、病態学概論（1学年対象）、病態学各論（2学年対象）を主科目として担当し、臨床検査学（2学年対象）も担当した。

竹田、竹田津は、1学年に対して看護基礎セミナー、生活の理解実習、保健衛生看護学実習を分担した。

尚、教育の内容に関しては平成22年度看護学部シラバスを参照されたい。

3. 研究の概要

1) 竹田は、ニューラルネットワークの作用と応用について研究を行っている。

2) 竹田津は、過去の医療事故の原因分析を行っている。

基礎看護学

教授 水戸美津子
(2010年度兼任)

1. スタッフの紹介

教授 水戸美津子 (2010年度兼任)
准教授 里光やよい
講師 宇城 令
講師 櫻井 美奈 (2010年9月30日退職)
助教 和久 紀子

2. 教育の概要

基礎看護学科目では、すべての人間を対象とし、看護を実践するために以下の5つを目標に教育活動を行った。

- 1) 看護の諸概念を広く教授する。
- 2) 看護専門職の社会的役割とその貢献について教授する。
- 3) 保健医療福祉の場において看護職者の関わる倫理的課題を教授する。
- 4) 看護の基礎技術の原理原則を教授する。
- 5) 看護における基本的なアセスメントについて教授する。

2010年度は、下記の科目を担当した。括弧内は科目責任者を示す。

「看護学概論」(里光やよい), 「実践基礎看護学Ⅰ」(里光やよい), 「看護技術論Ⅰ」(里光やよい), 「看護技術論Ⅱ」(宇城令), 「看護技術論Ⅲ」(宇城令), 「看護技術演習Ⅰ」(櫻井美奈), 「看護技術演習Ⅱ」(宇城令), 「看護技術演習Ⅲ」(里光やよい), 「看護技術総合演習」(櫻井美奈), 「生活の理解実習」(宇城令), 「日常生活援助実習」(櫻井美奈, 里光やよい)。

その他, 「看護基礎セミナー」を里光・和久が, 「文献講読セミナー」を宇城・櫻井が, 「保健・看護研究セミナー」を里光・宇城・櫻井・和久が, 「卒業研究」を里光・宇城・和久が, 「へき地の生活と看護」・「夏期へき地体験研修」を里光・和久が, 「在宅看護実習」を和久が担当した。

3. 研究の概要

里光は, 看護管理および看護技術教育に関する研究会に参加し研究を進めた。

宇城は, 平成21年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(B))を受け, 附属病院医療安全対

策部および看護部, リハビリテーションセンター等と「転倒・転落事故予防をめざす患者・家族と医療者による協働的リスク回避システムの開発」を課題とした研究を行った。また, 看護学部看護系共同研究費を受け, 附属病院医療安全対策部とともに「転倒した患者の心理および行動傾向を考慮したより安全な病床環境への取り組み」を課題とした研究を行った。

4. その他

宇城は以下を担当した。

- ・栃木県看護協会主催実習指導者講習会における「看護論」の講義・演習
- ・日本医療マネジメント学会第10回栃木地方会「チーム医療の現状—東京都, 埼玉県, 栃木県等の調査から—」と題した特別講演
- ・聖隷佐倉市民病院院内研修における「コンフリクトマネジメント」の講義・演習

地域看護学

教授 春山 早苗

1. スタッフの紹介

教授 春山 早苗

准教授 鈴木久美子

講師 塚本 友栄

講師 工藤奈織美

助教 島田 裕子

助教 関山 友子（2010年12月1日就任）

取得資格：看護師，保健師，精神保健福祉士

学歴：看護学（修士）（東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科博士（前期）課程修了）

職歴：富士重工業健康保険組合総合太田病院看護師（泌尿器科），三越厚生事業団の臨時保健師（健診部門），医療社団法人根岸病院の看護師（精神科），本学部臨時教員を経て着任

2. 教育の概要

1) 地域看護学に関する教育概要

公衆衛生の理念を追求する看護の目的と活動方法の基本を理解し，公衆衛生看護活動の展開に必要なとなる基本的な知識と技術を学生が修得できることを目指して，主に行政に所属する保健師の活動を素材にして，教育にあたっている。担当科目は，実践基礎看護学概論Ⅲ（2年次前学期2単位：必修），公衆衛生看護活動論（3年次後学期2単位：必修），公衆衛生看護方法論（3年次後学期1単位：必修），公衆衛生看護実習（3年次後学期3単位：必修），地域看護学実習<旧カリキュラム（以下，旧カリとする）>（4年次後学期3単位：必修）であり，地域看護学科目教員全員で担当した。また，在宅看護実習（3年次後学期3単位：必修）では，地域看護学科目教員は訪問看護実習，産業看護実習を担当した。

2) 地域看護学以外の担当教育概要

①「倫理学」（1年次後学期：必修）：春山が科目責任者，講義を2時間担当。②「保健医療福祉システム論」（1年次後学期2単位：必修）：春山が科目責任者，鈴木，塚本，工藤とともに担当。③「看護基礎セミナー」（1年次前学期：必修）：春山，鈴木，塚本，島田が担当。④「へき地の生活と看護」（1～4年次後学期：選択）：工藤が科目

責任者，島田も担当。⑤「文献講読セミナー」（2年次前学期：必修）：工藤が担当。⑥「研究セミナー」（3年次後学期：必修）：春山が科目責任者，春山，塚本は講義担当，演習は地域看護学科目教員全員で16名の学生を担当。⑦旧カリ「家族生活援助論」（4年次前学期：必修）：鈴木が科目責任者，講義・演習を8時間担当。⑧旧カリ「国際看護活動論」（4年次前学期：選択）：春山が講義を2時間担当。⑨旧カリ「保健・看護研究セミナー」（4年次前学期：選択）：地域看護学科目教員全員で学生16名の演習を担当。⑩旧カリ「卒業研究」（4年後学期：必修）：春山が2名，鈴木が4名，塚本が3名，工藤が4名，島田が3名，計16名の学生を指導。学生は，ALS在宅療養者支援・介護支援，介護予防，糖尿病の自己管理，育児支援，へき地における妊娠・出産にかかわるヘルスニーズや高齢者の保健行動，男性就労者の生活習慣病予防，慢性腎不全の児童の家族支援等に関する看護研究に取り組んだ。⑪その他：工藤，島田は夏季へき地研修を担当。「へき地の生活と看護」の履修者を含む33名の研修を9カ所の施設において企画・実施した。

3. 研究の概要

1) 自治医科大学看護学部共同研究費「へき地における看護の充実に向けたへき地医療拠点病院の看護の現状と課題」：塚本を中心に地域看護学科目教員全員，並びに，附属病院看護部，へき地医療拠点病院看護部長とともに実施。

2) 自治医科大学看護学部共同研究費「へき地医療支援機構によるへき地で働く看護職への先進的支援事例に関する面接調査」：春山を中心に地域看護学担当教員全員，並びに，附属病院看護部，キャリア支援センター看護師，へき地医療拠点病院看護部長とともに実施。

3) 平成22年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「地域特性の相違性が大きい地域が内在する市町の保健師活動における地区管理方法」：研究代表者は春山，分担研究者は鈴木，塚本，工藤，島田。

4) 平成22年度厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）「大都市部における自然災害等健康危機発生時の保健活動体制と方法に関する研究」（研究代表者：千葉大学看護学部 教授 宮崎美砂子）の分担研究「大都市部の自然災害発生時の感染症対策における保健活

動」：研究分担者は春山，研究協力者は塚本，島田。

5) 平成22年度厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）「災害・重大健康危機の発生時・発生後の対応体制及び健康被害抑止策に関する研究」（研究代表者：日本大学医学部 教授 大井田隆）の分担研究「災害発生に備えた平常時における保健活動の取り組みに関する分析」（研究分担者：国立保健医療科学院公衆衛生看護部 奥田博子）：春山と島田が研究協力者。

6) 平成22年度厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）「都道府県へき地保健医療計画策定支援とその実際に関する研究」（研究代表者：自治医科大学地域医療学センター地域医療学部門 教授 梶井英治）：春山が研究協力者。

4. その他

1) 春山，鈴木：県西地区看護職の連携を考える会のオブザーバー。

2) 春山：群馬県吾妻郡中之条町立六合小学校の総合的な学習の時間にて，講義「年をとっても病気や障害があっても，だれもが暮らしやすい地域のために」及び簡単な介護演習を実施（2010.5.12, 中之条町，4～6年生24名）。

3) 栃木県地域保健中堅職員研修（企画評価編）（2010.6.28, 11.10, 参加者7名）：春山は講師，鈴木は助言者。

4) 栃木県地域保健中堅職員研修（ケアコーディネート・テーマ別編）地域支援従事者コース：宇都宮市保健所エリア（2010.12.14, 2011.1.17, 2.14, 参加者51人）で春山は講師，鈴木はファシリテーター。同研修の今市健康福祉センターエリア（2010.12.8, 2011.1.24, 2.21, 参加者23人）で春山は講師，塚本はファシリテーター。

5) 栃木県看護協会平成22年度実習指導者講習会（受講者39名）：鈴木は「看護論」（6時間，2010.8.23.），塚本は「実習指導の評価」（6時間，2010.9.2.）を担当。

6) 春山は，日本ルーラルナーシング学会理事，編集委員長，工藤，関山は編集委員。

7) 春山，関山：栃木県市町村保健師業務研究会調査研究「事業の多様化・分散配置における市町村保健師のあり方に関する調査」に係る指導及び助

言（2010.4～2011.3）。

8) 春山：①JICA草の根技術協力事業（草の根パートナー型）「メキシコ国保健医療従事者と思春期ピアリーダーによる健康なライフスタイルづくりシステム化支援事業（プロジェクトマネージャー 高村寿子看護学部名誉教授）」（実施期間2009.9～2012.6）：プロジェクトメンバーとして，2010.5.19～5.30に渡墨，ピアサポーター研修の講師，システム化のためのマニュアルづくり等の活動を実施。メキシコ国ベラクルス州の保健医療従事者4人の本邦研修（2010.8.16～9.6）を企画・運営。②JICA「ホンジュラス国オランチョ県思春期リプロダクティブ強化プロジェクト（第3年次）カウンターパート本邦研修」：ホンジュラスの保健医療従事者5名を対象に「思春期保健の地域環境づくり－ピアサポーター養成と地域づくり－」を2時間講義（2010.8.26, 本学部）。③（財）地域社会振興財団 第12回健康教育・ヘルスプロモーション研修会の講師（2010.8.26～8.28, 受講者13名）。④日本ルーラルナーシング学会 第5回学術集会分科会「地域ケアシステムの構築と活用」のファシリテーター（2010.9.4, 長崎市）。⑤国際セミナー「全人的ながん医療の実践者育成と多職種協働体制の発展」：教育講演「Initial Education for Developing Practitioners in Cancer Nursing: Education Program for Novice Nurses at a University Hospital」の座長（2010.9.1, 下野市）。⑥栃木県看護協会平成22年度 新任保健師支援研修会：第2回，第3回の講師（2010.9.25, 12.4, 受講者49名）。⑦下野市立南河内第二中学校の総合的な学習の時間：全生徒を対象に「介護について」を1時間講義。⑧第29回関東甲信越地区市町村保健活動業務研修会シンポジウム「紡いできた保健師マインドをいかに伝承していくか～保健師の人材育成～」（2010.11.18, 宇都宮市，参加者273人）の座長。⑨平成22年度富山大学公開講座「保健師・訪問看護師のためのケーススタディおよび業務現状分析のすすめ」第4回目の講師として「地域看護領域における実践活動を見直す・評価するとは」を講義，また助言者を務めた（2011.2.19, 富山市，受講者4人）。⑩日本家族計画協会，予防医学事業中央会主催の第12回自己効力感（セルフエフィカシー）を高め主体的な行動変容を支える健康教育実践セミナーの講師として「地域づくりとソーシャルキャピタル」を1時間講

義（2011.1.23, 東京, 受講者84人）。⑪厚生労働省「看護教育の内容と方法に関する検討会 保健師教育ワーキンググループ」のメンバー（2010年9月まで）。⑫厚生労働省保健師助産師看護師試験委員。⑬厚生労働省医道審議会専門委員。⑭日本地域看護学会査読委員。⑮日本公衆衛生雑誌査読委員。⑯独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会専門委員。⑰日本私立看護系大学協会平成22年度研究助成事業選考委員。

9) 鈴木：①下野市介護認定審査会委員。②栃木県立小山西高等学校の学校評議員。③栃木県看護協会監事。

10) 塚本：①日本看護教育学学会20周年記念大会において企画委員兼実行委員を努めた。②日本看護教育学学会査読委員。③日本ルーラルナーシング学会査読委員。

精神看護学

教授 半澤 節子

1. スタッフの紹介

教授 半澤 節子

教授 永井 優子

講師 野崎 章子

助教 宮田真理子（2011年3月31日退職）

助教 板橋 直人

2. 教育の概要

当学科目では、あらゆる健康水準の個人及び集団を対象に、対象者の人権を尊重するとともに、その人の希望を踏まえた精神看護実践の基礎的知識と技術の修得を学士レベルの教育目標としている。我が国の精神保健福祉に関する施策の流れを背景として、平成22年度は、新カリキュラムが3年次学生に展開されるのを期に、授業科目、演習科目、実習科目を大幅に変更した。精神の健康を増進し、精神の健康障害からの回復を促進する看護の提供体制は、精神科医療を提供する精神科病棟だけでなく、多様な場と支援者のネットワークにより精神障害者とその家族が生活者として健康の回復と社会生活の向上を図れるための看護を展開できる能力を育成することを目標とした。それに伴い、精神科病棟を主としていた実習は、地域の多様な施設をフィールドとした精神保健看護実習へと大幅な変更を行い、学内演習も在宅の精神障害者と家族のアセスメントができる内容に修正された。

3. 研究の概要

精神看護学では、継続的に学科目の教員全員が協力して、学内の看護系教員共同研究費による研究に取り組んだ。平成19年度から開始している「精神科における長期入院患者の退院を促進する看護に関する研究」は、関東甲信越地域の精神科医療機関の看護職者を対象に質問紙調査を継続しており、学内外の研究会、学会、学術雑誌への論文掲載など、一定の成果を得てきた。平成22年度はそうした研究成果を踏まえて、助教の板橋を中心として学内研究費を取得し、栃木県内の精神科医療施設の看護職者を対象に介入研究を展開し、自治医科大学シンポジウムでの発表を行い、自治医科大学シンポジウム・ベストポスター賞（JMU

Best Poster Award）を受賞した。その他、各教員が科学研究費補助金などを取得して研究を継続し、国内外の学会での発表、学内外の学術雑誌への論文掲載など一定の成果を得ている。また、永井教授を中心に発足して5年目を迎える北関東精神保健看護研究会は、年2回の研究会を継続しており、栃木県のみならず北関東の精神科看護職者の情報交換、現場の問題解決の知恵を共有する貴重な機会となっている。

4. その他

半澤は、日本精神障害者リハビリテーション学会の常任理事（学会誌編集担当）、同学会誌編集委員、査読委員、日本社会精神医学会理事、同学会編集委員、査読委員、日本精神保健・予防学会の評議員を務めた。

永井は、栃木県看護協会等が主催する各種研修会の講師として、看護職の継続教育に協力した。また、日本精神保健看護学会理事（学術連携委員会）・査読委員、日本生活指導学会監事、日本ルーラルナーシング学会（渉外担当）、日本看護科学学会（社会貢献委員会）、千葉看護学会、文化看護学会の評議員、日本精神保健看護学会、日本看護科学学会、日本看護研究学会、日本看護学教育学会、日本家族看護学会の査読委員を務めている。

野崎は、千葉看護学会、日本精神科看護技術協会千葉県支部など学術団体や職能団体のほか、関東近県の複数の医療施設でも現任教育や看護研究指導を行った。

母性看護学

教授 成田 伸

1. スタッフの紹介

教授 成田 伸

准教授 齋藤 良子

講師 小川 朋子（2010年4月1日就任）

取得資格：看護師，助産師

学歴：筑波大学医療技術短期大学部看護学科卒業，聖母女子短期大学専攻科助産学専攻修了，放送大学卒業 学士（教養），北里大学大学院看護学研究科修了 修士（看護学）。

職歴：社会福祉法人聖母会聖母病院，医療法人川村会くほかわ病院等に助産師として勤務，聖母女子短期大学専攻科講師，聖母大学看護学部助手・講師として勤務。

講師 角川 志穂

助教 西岡 啓子

2. 教育の概要

1) 母性看護学に関する教育概要

(1)生涯発達看護学概論Ⅰ（妊産褥婦）（1年次後学期1単位：必修）

成田が担当した。母性看護学の基本概念，母親になっていくプロセス，生殖医療と倫理・法的な問題などを講義した。

(2)生涯発達看護学概論Ⅱ（胎児・新生児期）（2年前学期1単位：必修）

小児看護学中島教授が科目責任であったが，齋藤が分担し，胎児から新生児期への移行について講義を行った。

(3)周産期実践看護学Ⅰ（妊産褥婦）（3年次前学期1単位：必修）

齋藤が科目責任として総括し，母性看護学全教員で実施した。特に周産期看護実習につながる妊産褥婦及び新生児のアセスメントについては，臨床助教等にも補助をお願いし，丁寧な指導を行った。

(4)周産期実践看護学Ⅱ（胎児・新生児期）（2年次前学期1単位：必修）

小児看護学中島教授が科目責任であったが，齋藤，角川が分担し，それぞれ新生児のヘルスアセスメントと新生児の養育に必要な母乳育児支援について講義を行った。

(5)周産期看護実習（3年次前学期2単位：必修）

齋藤が科目責任者となり，母性看護学全教員が分担して担当した。自治医科大学附属病院，さいたま医療センター，小山市民病院それぞれの産科病棟・産科外来等で実習すると共に，栃木県助産師会が下野市で実施している地域育児支援の活動に参加し，効果的な実習を展開できた。

2) 助産学に関する教育概要

(1)助産学概論（3年次後学期1単位：選択）

新カリキュラムの科目で，受講希望の学生は受講可能である。科目責任者として全体を総括した。山口氏（葛飾赤十字産院助産師）に非常勤としてJICAの活動を通じた異文化における助産実践について教授いただいた。

(2)基礎助産学Ⅰ（3年次後学期1単位：選択）

新カリキュラムの科目で，受講希望の学生は受講可能である。角川が科目責任者として総括し，成田と齋藤が分担した。助産の基礎となる形態機能，妊娠・分娩の生理について，確実な知識として定着するように教授した。

(3)助産学Ⅰ（4年次前学期1単位：選択）

旧カリキュラム科目であり，受講希望の学生は受講可能である。小川が科目責任者として総括し，成田が分担した。助産師の実践の基礎となる関連法規，助産過程等について押さえた。

(4)助産学Ⅱ（4年次前学期1単位：選択）

旧カリキュラム科目であり，受講希望の学生は受講可能である。成田が科目責任者として総括し，妊産褥期の正常経過と異常経過について教授した。新生児期の正常と異常については，小児科学の河野准教授が担当した。

(5)助産診断・技術学Ⅰ（4年次前学期2単位：選択）

旧カリキュラム科目であり，助産学実習受講の助産学生11名が受講した。成田が科目責任者として総括し，助産における教育・カウンセリング機能について，演習を含めて教授した。助産師の診断の基礎となる知識については，助産学・産科学でそれぞれ専門の非常勤講師に教授いただいた。

(6)助産診断・技術学Ⅱ（4年次前学期2単位：選択）

旧カリキュラム科目であり，助産学実習受講の助産学生11名が受講した。角川が科目責任者として総括し，成田，齋藤，西岡が分担し，分娩介助に必要な技術について演習を行った。立木氏，渥美氏に非常勤を依頼し，標準化された新生児蘇生

法を含む出生直後の新生児のケアについて教授いただいた。

(7)助産管理（4年次前学期1単位：選択）

旧カリキュラム科目であり、助産学実習受講の助産学生11名が受講した。成田が科目責任者として総括し、助産実践における安全管理等を演習を通じて教授した。非常勤として水流氏が最新の知識に基づいて助産サービスマネジメントについて教授した。

(8)助産学実習（4年次後学期5単位：選択）

旧カリキュラム科目であり、助産学実習受講の助産学生11名が受講し、主に自治医科大学附属病院で7名、済生会宇都宮病院2名、日光市民病院2名が実習し、必要な分娩介助件数を達成した。また助産師の行う新生児訪問や助産所で見学実習を行った。

3) 母性看護学・助産学以外の担当教育概要

(1)基礎看護セミナー（1年次前学期1単位：必修）

成田、齋藤、西岡が分担者としてそれぞれのグループを担当し、レポート作成を指導した。

(2)文献講読セミナー（2年次前学期1単位：必修）

小川、角川が分担者としてそれぞれのグループを担当し、文献講読およびレポート作成を指導した。

(3)研究セミナー（3年次後学期1単位：必修）

成田、齋藤、小川、角川が分担者として担当し、母性看護学領域に配分された学生をまた小グループとして受け持ち、テーマに関連した文献の収集、プレゼンテーション、レポート作成を指導した。

(4)家庭生活援助論（4年次前学期2単位：必修）

旧カリキュラム科目で、地域看護学鈴木准教授が科目責任者で、角川が分担者として一部を担当し、誕生死についてのグループワークを行いながら、子どもの死を体験した家族への支援について講義を行った。

(5)保健・看護研究セミナー（4年次前学期1単位：選択）

旧カリキュラム科目で、成田、齋藤、小川、角川で母性看護学領域に配置された学生16名を担当し、卒業研究につながるテーマについての探求を指導した。

(6)卒業研究（4年次後学期4単位：必修）

旧カリキュラム科目で、成田、齋藤、小川、角川で母性看護学領域に配置された学生16名を担当し、臨床でデータを収集し、分析して、卒業研究

としてまとめた。

3. 研究の概要

1) 成田は、「避妊・性感染症予防カウンセラーの育成とカウンセリング介入の評価研究」のテーマで文部科学省科学研究補助金（基盤研究（B））を取得し、齋藤、小川、角川、段ノ上を研究分担者とし、野々山（東邦大学）を含む学外者を研究協力者として研究を実施した。

2) 角川は、研究代表者として取得した「祖父母教育に向けた孫育て手帳の開発と評価」（文部科学省科学研究補助金（若手研究（B））について、孫育て手帳の素案を作り、対象者に配布し、意見をもとに加筆および修正を行い、最終的に手帳を完成させた。

3) 成田は、新道氏（日本赤十字広島看護大学）を研究代表者とする「看護系大学学士課程助産学生に有用な産婦ケア（分娩介助を含む）の教育方法の開発」（文部科学省科学研究補助金（基盤研究（A））に連携研究者として参加し、研究を行った。

4) 成田は、大月氏（埼玉県立大学）を研究代表者とする「周産期医療ケアシステム・看護の質改善を推進するための研究」（文部科学省科学研究補助金（基盤研究（C））に連携研究者として参加し、海外の周産期ハイリスクケアについて研究を行った。

5) 齋藤は、看護学部看護系教員共同研究費として「安静入院妊婦の適切な口腔ケアに関する検討—歯周病と早産との関連より—」のテーマで研究代表者となり助成を受けた。附属病院産科病棟、歯科口腔外科病棟および外来の協力を得て実施した。

6) 角川は、看護学部看護系教員共同研究費として「児がNICU入院中の母乳育児支援の効果についての研究」のテーマで、角川が研究代表者となり助成を受けた。成田、齋藤、小川が分担すると共に、附属病院産科病棟、NICUの協力を得て実施した。成果は、第35回栃木県母性衛生学会（宇都宮）、第12回日本母性看護学会（津市）において発表すると共に、論文化の作業を行った。

4. その他

1) 成田は、聖マリア大学大学院看護学研究科「ウイメンズヘルス看護学特論」において、非常

勤講師として「日本におけるリプロダクティブヘルス／ライツ，性差医療，ウイメンズ・ヘルスの現状と課題」「薬物療法を含む女性総合医療の動向と看護の課題」について教授した。

2) 成田は，第14回日本看護管理学会学術集会において，シンポジウム「集約化がすすむ周産期医療体制を牽引するリーダー育成を看護管理者はどのように行うか」を企画し，座長を務めた。

3) 成田は，茨城県看護協会助産師職能研修会「周産期における医療の安全と質の保障」の講師を担当した。

4) 成田は，第51回日本母性衛生学会において，ミニシンポジウム「MFICUのスタッフのストレスと看護管理上の課題」を企画し座長を務めた。

5) 成田は，一般社団法人栃木県助産師会の法人化作業を行うと共に会長に就任し，会の活動を総括した。また社団法人日本助産師会地区理事として北関東地区を総括した。

6) 成田は，栃木県看護協会が主催した助産師就業支援研修のカリキュラムを作成すると共に，講師を務めた。

7) 齋藤は，神戸大学医学部保健学科「セクシャリティ・ジェンダー看護論」において，非常勤講師として「ライフサイクルとジェンダー・セクシャリティ，性成熟期のジェンダー・セクシャリティ，セクシャリティにおける看護者としての援助的役割」について教授した。

小児看護学

教授 中島登美子

1. スタッフの紹介

教授 中島登美子

准教授 大脇 淳子（2010年4月1日就任）

資格：看護師

学歴：山梨医科大学大学院修士課程（看護学）修了，山梨大学大学院医学工学総合教育部博士課程（医科学）修了

職歴：国立病院医療センター看護師，日本医科大学看護専門学校専任講師，杏林大学保健学部看護学科学内講師・講師を経て就任。

講師 樋貝 繁香

助教 石田 寿子（2011年3月31日退職）

2. 教育の概要

小児看護学では，子ども（出生から成人に達するまでの人）を総合的に理解し基礎的小児看護実践能力を育成することを目標に，下記の科目を担当した。

1) 小児看護学に関する教育概要

(1)生涯発達看護学概論Ⅲ（1年次後学期2単位：必修）子ども（出生から成人に達するまでの人）を総合的に理解し，小児看護の役割を学習する。

(2)小児実践看護学Ⅰ（2年次前学期1単位：必修）子どもの最良の健康状態を保持・増進するための援助および日常的な健康問題に対しての援助を学習する。

(3)小児実践看護学Ⅱ（2年次後学期1単位：必修）子どもに対する特徴的な生活の援助方法を学習する。また，日常的な健康問題や日常起こりうる生命の危機状態にある子どもや家族への援助を学習する。

(4)小児実践看護学Ⅲ（3年次前学期1単位：必修）健康課題をもち，さまざまな状況にある子どもの看護を学習する。

(5)小児期看護実習（3年次前学期2単位：必修）健康課題をもつ子どもと親・家族の生活を理解し，看護の展開を学ぶ。

2) 小児看護学に関連する教育概要

(1)生涯発達看護学概論Ⅱ（胎児・新生児）（2年次前学期1単位：必修）胎児・新生児の特徴を総合的に理解し，周産期における看護の役割を学ぶ。

(2)周産期実践看護学Ⅱ（胎児・新生児）（2年次

前学期1単位：必修）胎児・新生児およびその家族への生活の援助の特徴および，日常的な健康問題への援助を学習する。

3) 小児看護学以外の担当教育概要

学部全体で担当する科目として，看護基礎セミナー（1年次前学期1単位：必修），文献講読セミナー（2年次前学期1単位：必修），保健・看護研究セミナー（4年次前学期1単位：選択），卒業研究（4年次後学期4単位：必修）を担当した。

3. 研究の概要

1) 看護学部看護系教員共同研究費では「看護基礎教育におけるシミュレーション学習方法の開発と試行」をテーマとして，臨床判断能力を育成するシミュレーション学習方法を開発し学内演習にて試行した。

4. その他

1) 自治医科大学附属病院NICUで，退院後の育児相談や親同士の交流を目的に月1回行っている「すくすくクラブ」という親子教室の会誌（すくすくだより）の原稿執筆を行った。

2) 樋貝は，2010年8月に臨床指導者講習会（栃木県看護協会主催）で，「実習指導の実際」というテーマで講義を行った。

成人看護学

教授 中村 美鈴

1. スタッフの紹介

教授 中村 美鈴

講師 内海 香子（2011年3月31日退職）

講師 崎田マユミ（2011年3月31日退職）

助教 松浦利江子（2010年5月1日就任）

略歴

＜資格・学位＞看護師，高等学校教諭一種，教養学士，修士（文学）

＜学歴＞新潟大学医療技術短期大学部卒業，埼玉大学教養学部卒業，千葉大学教育学部研究生，東北大学大学院文学研究科（哲学専攻）修了。

＜職歴＞労働福祉事業団燕労災病院看護師，医療法人風心堂小原病院看護師，国家公務員共済組合連合会東北公済病院看護師，長野県看護大学助教を経て着任。

助教 北村 露輝（2010年4月1日より成人看護学へ異動）

助教 段ノ上秀雄

2. 教育の概要

1) 生涯発達看護学概論Ⅳ（成人期）

生涯発達看護学概論Ⅳ（成人期）は，1年次後学期，2単位30時間の必須科目である。学習目的は，生涯発達という観点から成人期にある対象を深く広く理解し，成人看護に有用な理論ならびに概念を学び，看護観を養うことである。成人期にある人の成長と発達，成人期にある人の発達課題，成人の生活，引き起こしやすい健康課題，さらに健康課題の多様性，成人の保健行動，健康行動理論，アンドラゴジー，セルフケア・セルケアマネジメント，危機理論，ストレスコーピング，病みの軌跡，成人患者を取り巻く家族への支援等，成人期に有用な理論や概念，その実践への応用について講義を行った。学生による授業評価は，良好であった。中村が12時間，内海が8時間，崎田が8時間の講義を担当した。

2) 成人実践看護学Ⅰ

成人実践看護学Ⅰは，2年次前学期，2単位30時間の必須科目である。学習目的は，健康危機を引き起こしやすい機能障害をもつ成人とその家族に

看護を実践するための知識を学習することである。呼吸機能障害，循環機能障害，消化・吸収機能障害，身体防御機能障害，性・生殖機能障害をもつ成人・家族に各機能障害に伴う治療・検査が生命・生活へ及ぼす影響，各機能障害をもつ成人の治療・検査に伴う機能障害をもつ成人とその家族の把握方法と看護実践について理解するために，講義・演習を行った。学生による授業評価は，概ね良好であった。中村が10時間，崎田が6時間，松浦が6時間，段ノ上が6時間担当した。評価は，定期試験，出席状況で行った。

3) 成人実践看護学Ⅱ

成人実践看護学Ⅱは，2年次後学期，1単位30時間の必須科目である。学習目的は，健康危機を引き起こしやすい機能障害をもつ成人とその家族に看護を実践するために，必要な看護援助を学習することである。呼吸機能障害・循環機能障害をもつ成人の安楽な療養生活への支援，手術療法を受ける成人とその家族・生命の危機状況にある成人とその家族への支援について，成人と家族の把握とその方法ならびに必要な看護について講義・演習を行なった。これらの講義・演習を踏まえ，健康危機を引き起こしやすい機能障害をもつ成人とその家族に看護を実践するために，個人学習・グループ学習を取り入れて事例を用いた看護過程の演習を行なった。教材とした事例作成については，かかわる教員全員で検討を重ねた。臨床場面で遭遇することが多く，かつシンプルでわかりやすい事例で，国家試験出題基準も踏まえて，事例作成を心がけた。

中村が12時間，崎田が8時間，松浦が2時間，北村が2時間，段ノ上が4時間，講義・演習を担当した。看護過程の演習10時間，手術療法を受ける成人の看護2時間，呼吸障害・循環障害をもつ成人の看護の演習4時間においては，内海を含め成人看護学教員全員で指導を行った。また，看護過程を除く各演習においては，1～3名の臨床助教の協力も得て，学生の指導にあたり効果的な学習につながった。学生による授業評価も肯定的な意見が多く，良好であった。

評価は，定期試験，出席状況で行った。

4) 成人実践看護学Ⅲ

成人実践看護学Ⅲは，2年次後学期，1単位15時

間の必須科目である。学習目的は、長期的な療養生活が必要となる機能障害をもつ成人とその家族に看護を実践するための必要な知識を学習することである。内部環境調節機能障害、脳・神経機能障害をもつ成人の看護について講義・演習を行った。内部環境調節機能障害をもつ成人の看護の講義6時間については内海が担当、演習2時間については、内海中心に成人看護学全教員で指導した。脳・神経機能障害をもつ成人の看護の講義6時間は、北村が担当した。学生による授業評価は良好であった。評価は、定期試験、出席状況で行った。

5) 成人実践看護学Ⅳ

成人実践看護学Ⅳは、3年次前学期、1単位30時間の必須科目である。学習目的は、長期的な療養生活が必要となる機能障害をもつ成人とその家族に看護を実践するための必要な知識について、講義・演習を通して学習することである。具体的な授業展開として、感覚機能障害をもつ成人とその家族に必要な看護実践の講義を内海が8時間、運動機能障害をもつ成人とその家族に必要な看護実践の講義を崎田が6時間担当した。また、感覚機能障害をもつ成人の演習について、内海を中心に成人看護学教員全員で2時間担当した。さらに、運動機能障害をもつ成人の演習について、崎田を中心に成人看護学教員全員で2時間担当した。いずれの演習も患者体験、並びに看護師体験を教育方法として組み入れたことで教育的効果があったと評価できる。

学生による授業評価は、過密スケジュールという意見もあったが、概ね良好であった。評価は、課題レポート、定期試験、出席状況で行った。

6) 成人期臨床看護実習

成人期臨床看護実習は、3年次前学期、2単位90時間の必須科目である。具体的な実習目標は、①健康課題がある成人の健康の回復と生活への適応を支援する実践能力を養う、②看護師—患者関係を築き、自分の実践を常に問いながら看護を行う、③倫理的問題に対する考えや態度をはぐくむ、④看護専門職として、質の高い看護を提供するための探究的姿勢をはぐくむであった。

具体的な実習展開は、自治医科大学附属病院の成人期の入院を比較的多く認める外科系内科系病棟に1グループ6-7名の学生配置で1クール5病棟に

分かれて行った。方法は、内科的治療ならびに外科系治療を受ける成人とその家族を1-2名受け持ち、2週間継続して臨地実習を行った。実習中は、学生が主体的にテーマカンファレンス或いはケースカンファレンスを行い活発に意見交換し、受け持ち患者の看護について深く考える機会となった。また、担当教員は、看護専門職としての倫理観、探究的姿勢・態度を培うことを主眼に指導した。学生の臨地実習で成人患者とその家族の体験を実際に知り、信頼関係を丁寧に着みながら、その人の望む方向に向かって看護を実践できるよう取り組んでいた。学生は教員の指導に概ね満足していたが、さらなる指導力の強化と質の担保のために、教員の臨床能力、調整力が求められた。学生による授業評価では、教員ならびに臨床助教の指導により、学びが深まったと良好な意見が多かった。中村は実習全体の統括を行い、内海は4クール、崎田は4クール、松浦は5クール、段ノ上は5クール、北村は5クールにおいて実習指導を行った。

7) 成人期看護フィールド実習

フィールド実習は、3年次前学期、2単位90時間の必須科目である。学習目的は、健康課題をもつ成人を多面的に捉え、看護師—患者関係を築く基礎的能力を養うことである。

また、実習目標は、①さまざまな健康課題をもつ成人を多面的に捉え、生命・生活への影響を理解し、成人とその家族に必要な看護を考える、②さまざまな健康課題をもつ成人とその家族を看護する者としてふさわしい態度、責任感、倫理観を養い、看護師—患者関係を築く資質を培う。実習方法は、健康危機を引き起こしやすい／引き起こした機能障害をもつ成人が療養する実習場所と、長期的な療養が必要な機能障害をもつ成人が療養する実習場所から、実習場所を一つずつ選択し、2つの実習場所で、それぞれ1-2人の成人とその家族にかかわり、実習を行った。また、看護における倫理的問題についてカンファレンスを行い、看護する者としてふさわしい態度、責任感、倫理観を養えるよう指導した。さらにショートカンファレンス・まとめのカンファレンス、統合カンファレンスに参加し、相互に体験を共有し、健康課題をもつ成人を多面的に捉え、看護師—患者関係を築くことの重要性やその成立・発展の過程について看護の役割について理解を深められるよう指導

した。学生による授業評価では、概ね良好であった。成人看護学の内海は科目責任者として全体を統括しながら、崎田、松浦、北村、段ノ上とともに、実習を5クール担当した。

8) 看護基礎セミナー

看護基礎セミナーは、1年次前学期、1単位30時間の選択科目である。学習目的は、ヒューマンケアの基本を理解することである。このセミナーは、教員3名が学生7-8名を担当し、グループワーク、文献学習、討議、見学（必要時）等の方法で進行する。具体的な授業展開としては、学生の関心のある個人や、個人の人生や体験が書かれた書籍を読み、自分の体験を振り返り、グループでのディスカッションを通して、「人間とは」、「人間の尊厳」、「人権擁護」、「ケアすること」などについて、学習を深めた。内海は竹田津文俊教授（医学関連）、段ノ上は成田教授（母性看護学）、北村は春山早苗教授（地域看護学）と共にセミナーを行った。

9) 文献講読セミナー

文献講読セミナーは、2年次前学期、1単位30時間の必修科目である。学習目的は、看護にかかわる情報収集の基本的な方法を習得することである。学習目標は、看護に関する学生の興味や関心を明らかにするために文献・情報を収集する、図書館の効果的活用と文献検索ができることである。これらの目標達成のために、講義とグループ学習にて、学習指導を行った。成人看護学では、中村が科目責任者として15回の授業を統括した。具体的な授業展開としては、中村が4コマ（内、1コマはレポート作成）、永井教授（精神看護学）5コマ、渡邊教授（基礎科学関連）1コマ、グループ別学習5コマで運営した。特に、記念棟11階の情報センターで各学生がパソコンを操作しながら、文献検索を演習で経験できたことは学生による授業評価からも効果的であった。他、グループ別学習では、崎田講師（成人看護学）、松浦助教（成人看護学）、宇城講師（基礎看護学）、櫻井講師（基礎看護学）、樋貝講師（小児看護学）、川上講師（老年看護学）、野崎講師（精神看護学）、小川講師（母性看護学）、角川講師（母性看護学）、工藤講師（地域看護学）が担当し、グループ学習を中心に指導を行った。

10) 研究セミナー

研究セミナーは、3年次後学期、1単位30時間の必須科目である。学習目的は、保健・看護に関する研究テーマの選び方、研究の進め方について学ぶことである。学習目標として、看護研究の意義と看護研究方法の基本を理解すること、これまでの講義・演習・実習から生じた疑問や自分自身の課題に関する文献検討により研究成果を確認するとともに、看護実践の改善問題を整理すること、看護実践課題の改善・充実に向けた研究の問いを明らかにすることの3点である。このセミナーは、学生が看護実践課題の改善・充実に向けた研究の問いで、各自関心のある看護に関する文献を検索し、見出した論文をクリティークし、討議を通して看護研究に対する方法を深めていく。成人看護学では、小グループ制（1グループ5-6名）で行った。グループワークは、個々の学生が自分の興味ある内容の論文を批判的に読み、その結果を各グループメンバーがプレゼンテーションを行い、その後討議を行うという形式で実施した。セミナーでは、内海、崎田、松浦、北村、段ノ上、ティーチングアシスタントとしてクリティカルケア看護学修士課程1年生の上澤、谷島も含め、15名の学生を担当した。中村は、全体の学習内容と進捗の統括を行った。

11) 看護研究

看護研究は、4年次後学期、4単位120時間の必須科目である。学習目的は、「看護の研究の方法や進め方から論文の作成までの過程を体験し、学ぶ」ことである。成人看護学領域では、この目的に「主体的に研究に取り組む姿勢をはぐくむ」という点を加え、指導した。担当は、中村、内海、崎田、松浦、北村、段ノ上の6名と、ティーチングアシスタントとしてクリティカルケア看護学修士課程2年生の樺山も含め、16名の学生を指導した。授業方法は、研究プロセスならびに学習の状況に応じて、ゼミ形式、個別指導、集団指導で行った。研究課題は、学生の関心を尊重しながら先行研究を概観し、丁寧に課題の絞り込みを進めた。卒業研究全体の進行過程としては、4月末にオリエンテーション、8月上旬に面接法に関するミニ講義、8月末に研究計画書の報告会を自主ゼミ形式で行った。同様に8月末頃からデータ収集開始のための準備・研修・フィールドとの連絡調整を

各担当教員が学生と共に実施した。9月中旬頃からは、データの分析、考察、論文作成と、学生は比較的、順調に研究プロセスを体験できた。また、12月の発表会に向けて、効果的なプレゼンテーションを実施するためのミニ講義を実施した。このように、研究の進行過程の要所でミニ講義を実施し、内容の理解と全体の調整を図った。学生は戸惑いながらも、主体的に研究を進めることができ、教員は、論理的に一貫性のある研究が進められるように一緒に考えを整理しつつ、指導した。学生の教員に対する評価は、概ね良好で、満足度の高い評価であった。教授方法として、成人看護学関連科目群で行った先行研究「看護系大学学士課程学生の卒業研究における困難の変遷と指導の工夫」の成果を実際に取り入れながら、卒業研究の指導を強化したことの成果と考えられる。

3. 研究の概要

1) 成人看護学における学内共同研究では、平成22年度自治医科大学看護学部看護系教員共同研究費による研究課題「上部消化管がん患者の術後機能障害の緩和を目指した看護師とのパートナーシップのあり方」について、北村を中心に成人看護学教員（共同研究者：中村、内海、崎田、松浦、段ノ上）と附属病院第一外来看護職と共に取り組み、倫理審査委員会の承諾、データ収集を実施し、進捗状況の報告書を作成した。

2) 成人看護学における学内共同研究の二つ目として、平成21年度自治医科大学看護学部看護系教員共同研究費による研究課題「ペースメーカー埋め込み術を受けた患者の退院後の日常生活における困難とその対応」をテーマに研究をまとめ、段ノ上を筆頭者として、共著者（中村、内海、崎田、松浦、北村）で自治医科大学看護学ジャーナルに原著論文として投稿し、掲載された。

3) 成人看護学における学内共同研究の三つ目として、平成22年度自治医科大学看護学部看護系教員共同研究費による研究課題「ペースメーカー埋め込み術を受けた成人への病棟看護師による退院後の日常生活についての看護支援に関する研究」をテーマとして、段ノ上を中心に、成人看護学教員（共同研究者：中村、内海、崎田、松浦、北村）と附属病院循環器病棟の看護職と共に取り組んだ。データ収集方法を再検討のうえ、昨年度の研究成果を踏まえ、質問調査票案を作成後、プレテスト

実施するなど、活動を推進した。

4) 中村は、文部科学省科学研究費補助金基盤(C)による研究課題「上部消化管がん患者の術後機能障害評価尺度（短縮版）の開発とその信頼性・妥当性の検討」（研究代表者：中村美鈴）をもとに、成果研究として臨床研究をまとめ、共同研究者と共に英文誌に投稿した。今後は、上部消化管がん患者の術後機能障害評価尺度（短縮版）の欧米版を開発し、確立することが課題である。

5) 松浦は、「看護師の陰性感情」をテーマに研究を行っている。看護学系大学院生を対象に行った患者に対してもつ陰性感情に関する状況の調査結果をもとに質問紙を作成した。この経緯の一部が、「日本看護管理学会誌 vol.14, No.1, 2010」に掲載された。今後は、この質問紙を用いた調査結果から、陰性感情に関する関連要因を探索していくことが課題である。

4. その他

1) 中村は、2010年4月に独立行政法人 日本学術振興会「最先端・次世代研究開発支援プログラム」ライフ・イノベーションの研究助成の第一次審査員を担当した。

2) 中村は、2010年6月に白鷗大学「救急医療と看護の役割」1コマ（2時間）講義を担当した。

3) 中村は、2010年8月に「実践に活用できる看護過程」（栃木県看護協会主催）というテーマで臨床看護師50名を対象に12時間講義・演習を担当した。

4) 中村は、2010年8月に臨床指導者講習会（栃木県看護協会主催）で、「実習指導の原理」で講義（3時間）、「実習指導の評価」講義・演習（6時間）を担当した。

5) 中村は、2010年9月に開催されたがんプロ国際セミナー「がん医療にける多職種協働の現状と展望」開催における準備員の委嘱を受け、主に広報責任者を担当した。

6) 中村は、2010年9月に開催されたがんプロ国際セミナーがん医療にける多職種協働の現状と展望の開催において、James Barnett「優れたがん看護実践者育成のための大学病院における取り組み—中堅看護師に対する継続教育—」が講演する座長を務めた。

7) 中村は、2010年11月に認定看護管理者セカンドレベル教育研修会（栃木県看護協会主催）にお

いて、「人的資源活用論：継続教育」の講義・演習を芳賀赤十字病院の久保・塩野谷とともに12時間担当した。

8) 中村は、2010年11月に大阪大学大学院医学系研究科において、がん看護学援助論「手術療法を受けた患者・家族への専門的支援」の講義を3時間担当した。

9) 中村は、2010年12月に認定看護管理者セカンドレベル教育研修会（栃木県看護協会主催）において「根拠に基づいた看護実践」というテーマで講義（3時間）を担当した。

10) 中村は、2010年日本看護協会成人看護Ⅰ（急性期）学会委員と論文編集員長を担当した。

11) 中村は、2006年6月より日本ルーラルナースィング学会の評議員を務めている。

12) 中村は、2008年度から日本ルーラルナースィング学会学会誌編集委員会の査読委員を務めている。

13) 中村は、2009年度から日本看護教育学学会学会誌の専任査読委員を務めている。

14) 中村は、2008年度より日本クリティカルケア学会学会誌編集委員会の編集委員を務めている。

15) 中村は、2006年9月より日本救急看護学会の評議員を務め、評議委員選出委員会、会則委員会の委員、専任査読委員を務めている。

16) 中村は、2006年4月より日本保健医療社会学会の評議員、機関紙編集委員を務めている。

17) 中村は、2010年度に独立行政法人国立病院機構栃木病院において、臨床看護師を対象に看護研究の指導を行なった。

18) 中村は、2009年4月より日本ルーラルナースィング学会事務局副事務局長を務めている。また、内海、崎田、段ノ上、北村は、2009年4月より日本ルーラルナースィング学会事務局の中で、会員管理、ホームページ担当の役割を遂行した。

19) 内海は、2010年8月に栃木県看護協会主催の看護トピック研修「慢性疾患患者の行動変容を促すアプローチ」にて、糖尿病患者を中心に慢性病をもつ患者の行動変容を促すために役立つ慢性病の捉え方、理論や概念の紹介、具体的な看護実践方法について講義を行った。

20) 内海は、2010年9月に開催されたがんプロ国際セミナー「がん医療にける多職種協働の現状と展望」開催における準備員の委嘱を受け、主に広報委員を担当した。

がんプロフェッショナル養成講義開催において、

広報委員を務めた。

21) 内海は、2003年度4月より、日本糖尿病教育・看護学会編集委員会専任査読者を務めている。

22) 崎田、松浦は、中村と共に、2010年度に独立行政法人国立病院機構栃木病院において、臨床看護師を対象に看護研究の指導を行なった。

23) 北村は、2010年8月に「実践に活用できる看護過程」（栃木県看護協会主催）というテーマで臨床看護師50名を対象に開催された看護過程演習において、中村の指導補佐を務めた。

24) 段ノ上は、2010年度日本看護協会成人看護Ⅰ（急性期）の論文集作成における論文選考委員を担当した。

老年看護学

教授 水戸美津子

1. スタッフの紹介

教授 水戸美津子
 准教授 高木 初子
 准教授 井上 映子（2011年3月31日退職）
 講師 川上 勝
 助教 長井 栄子
 助教 池下 麻美（2010年9月30日退職）

2. 教育の概要

老年看護学では、加齢に伴う心身機能の変化と高齢者の発達課題・健康特性及び健康障害を理解し、それに伴って生じる生活障害に関する看護の方法について学び、広義な老年看護技術を取得することを目指している。

1) 老年看護学に関する教育概要

(1) 老年実践看護学Ⅰ（2年次前学期1単位：必修）

高齢者の健康特性・健康評価、健康生活とヘルスプロモーションや高齢者の保健・医療・福祉の連携など、高齢者の健康増進と健康の維持向上をめざしたアプローチについて講義した。

（担当：井上，高木，川上）

(2) 老年実践看護学Ⅲ（3年次前学期1単位：必修）

老年看護学の理論・知識・技術を踏まえた老年看護技術の習得することを学習目的とする。既習の紙上事例を用いて、嚥下・排尿・皮膚・移動障害の観点から対象に合わせた看護技術を検討する講義・演習を展開した。また、認知症高齢者や終末期にある高齢者への援助技術について実践的に学べるよう工夫した。

（担当：高木，井上，川上，長井，池下）

(3) 老年期看護実習（3年次前学期2単位：必修）

附属病院および介護老人保健施設（ユニットケア）・認知症グループホームにおいて、疾病や障害をもつ高齢者に対する看護を実践するための基礎知識・技術について学ぶことを学習目的とする。2週間の実習のうち前半の2日間は施設で、後半は附属病院で実習を行った。（担当：全教員）

(4) 生涯発達看護学概論Ⅴ（老年期）（1年次後学期2単位：必修）

老年看護学の概念・対象及び老年看護学の役割を学ぶことを学習目的とし、特に高齢者を理解することに重点を置き、演習として高齢者のライフ

ヒストリーインタビューを実施した。また、臨床の場における看護の実際が理解できるよう、関道子臨床講師、鮎澤みどり非常勤講師、船田淳子非常勤講師による講義を組み込んだ。

（担当：高木，川上，長井）

(5) 老年実践看護学Ⅱ（2年次後学期2単位：必修）

加齢のプロセスにより生じる様々な健康段階を理解し、生活・療養の場に応じた高齢者のエンパワメントを生み出す看護援助方法について学ぶことを学習目的とする。高齢者の紙上事例を用いた看護過程や倫理的課題の演習等を、積極的に取り入れた。また、臨床の場における看護の実際が理解できるよう、井上佐代子臨床講師、太田信子臨床講師、境野博子臨床講師、野沢博子臨床講師による講義を組み込んだ。

（担当：高木，井上，川上，長井）

2) 老年看護学以外の担当教育概要

(1) 看護基礎セミナー（1年次前学期1単位：必修）

ヒューマンケアの基本を理解することを学習目的とし、学生は人間の生活および人生に関する体験が記述された書籍を選定、熟読し、プレゼンテーション、グループディスカッションおよびレポート作成を行った。

高木は和久紀子助教と7名の学生、井上は島田裕子助教と8名の学生、長井は大塚公一郎准教授と8名の学生、池下は中島登美子教授と7名の学生を担当した。

(2) 文献講読セミナー（2年次前期1単位：必修）

川上は演習（興味・関心のあるテーマ、調べたテーマに対する発表・討議）において1グループ9名を担当した。

(3) 家族生活援助論（4年次前学期2単位：必修）

高木は要介護高齢者と介護する家族の現状と看護の課題、井上は高齢者介護に関する看護の役割・機能について各1コマを担当した。

(4) 保健・看護研究セミナー（4年次前学期1単位：選択）

18名の学生に対し、卒業研究で取り組みたいテーマに沿った先行研究の文献検討、研究計画書の作成に関連した指導を行った。（担当：全教員）

(5) 卒業研究（4年次後学期4単位：必修）

18名一人ひとりが興味・関心をもって決定したテーマで研究を進めた。研究のプロセスを学び、さらに看護研究における倫理について理解を深め

ることができるように、個別及びグループ討論を随時交えながら指導した。卒業研究の中間発表会では、研究の方向が定まるように指導し、論文提出後には卒業研究発表会を開催した。高木は6名、井上は6名、川上は4名、長井は2名に対して、研究指導、中間発表会及び卒業研究発表会の企画と準備、卒業研究論文集の作成を担い、水戸は統括指導をした。

(6)研究セミナー（3年次後学期1単位：必修）

研究方法の理解に基づき自己の看護実践課題を整理することを目的に、12名の学生に対し、テーマに沿った先行研究の文献検討、研究計画書の作成に関連した指導を行った。（担当：全教員）

(7)日常生活援助実習（2年次後学期2単位：必修）

長井が附属病院6AB（循環器）病棟で6名の学生を2週間担当した。

(8)在宅看護実習（3年次後学期3単位：必修）

訪問看護ステーション・通所リハビリテーション実習、学校分野実習、産業分野実習を実施し、井上は科目責任者を務めた。高木は「わくわく訪問看護ステーションおやま」で各5名の学生、川上は「とちぎ訪問看護ステーションみぶ」で6名の学生、長井は「訪問看護ステーションたんぼぼ」で14名の学生を担当した。

3. 研究の概要

1) 高木は、「介護老人保険施設入所高齢者の「発話」と摂食・嚥下機能の関連に関する実証的研究」に取り組んだ（平成21-23年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））：研究代表者井上映子）

2) 井上は、平成21-23年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））により、「介護老人保険施設入所高齢者の「発話」と摂食・嚥下機能の関連に関する実証的研究」を課題とした研究を継続して行った。

3) 川上は、看護学部共同研究費の助成を受け、附属病院看護師らとともに、「微弱無線タグを用いた看護介護職員の所在確認に関する研究～高齢者施設等における業務改善の評価方法の確立を目指して～」に取り組んだ。また、調査結果の一部について医療の質・安全学会学術集会において口頭発表を行った。

4) 長井は、平成21-22年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究（B））により、「ユニットケア

実施施設における認知症高齢者への安全なケア提供に関する研究」を課題とした研究を継続して行った。またその成果を、「介護老人保健施設における認知症高齢者へのユニットケア実施施設職員による安全なケア提供上の困難と工夫」として、第30回日本看護科学学会学術集会および自治医科大学看護学ジャーナルで発表した。

4. その他

1) 水戸

(1)看護協会主催の研修会の講師

・栃木県訪問看護師養成講習会において「認知状態にある人への看護」「家族看護」を講義した。

(2)患者会等活動への支援

・全国認知症の人と家族の会栃木県支部顧問として活動した。

・世界アルツハイマーデー記念講演会（in栃木）

においてコーディネーターを務めた。

(3)埼玉県教育委員会主催の研修会の講師

・高等学校10年経験者研修において「看護研究の方法」を講義した。

(4)学会等関連

日本福祉工学会副理事長、日本ルーラルナースング学会監事、M-GTA研究会会長、栃木県看護協会理事、栃木看護学会企画委員会担当理事

(5)その他

・茨城県看護教育財団 理事

・全人的ながん医療の実践者養成のための国際セミナーにおいて「大学院における人材育成の現状と課題」を講演した。

・自治医科大学地域医療フォーラム『看護フォーラム』で基調講演として「これからの看護」を講演した。

・厚生労働省看護研修研究センター関東支部主催講演会で「技術教育における臨床と学校の連携—自治医科大学看護学部と附属病院での実践」を講演した。

・青森中央短期大学40周年記念講演「現在から未来へ—看護職はどこへ向かうのか」を講演した。

2) 高木

(1)看護協会主催の研修会の講師

2010年9月、栃木県看護協会主催の実習指導者講習会において「実習指導の原理」について講義した。

(2)病院などの講師

2010年1月，独立行政法人国立病院機構栃木病院において「研究方法—データ収集とその分析方法」について講義した。また，2010年7月から2011年2月の8ヶ月間，独立行政法人国立病院機構栃木病院看護部看護師を対象に自治医科大学において看護研究指導を行った。

小山市教育員会開催の生涯学習の一環として，2010年11月に「高齢者の食習慣と生活習慣病」について講義した。

(3)平成22年度がんプロフェッショナル教育セミナー

J.Barnett氏による「看護職として学び続ける意味」の講演の座長を行った。

3) 井上

(1)栃木県看護協会主催の研修会の講師

2010年9月，栃木県看護協会主催の実習指導者講習会において「実習指導の評価」について講義した。

(2)公開講座講師

2010年8月，自治医科大学公開講座において「認知症がある高齢者とその家族への看護」を演題とした講演を行った。

4) 川上

(1)看護協会主催の研修会の講師

2010年9月，栃木県看護協会主催の実習指導者講習会において「実習指導の原理」について講義した。

(2)非常勤講師

2010年12月，独立行政法人国立病院機構 栃木病院附属看護学校における「フィジカルアセスメント」の講義を担当した。

(3)第9回自治医科大学シンポジウム

「一次救命処置研修会に参加した看護学部学生の心肺蘇生技術に対する自己評価」を発表した。

(4)その他

とちぎ医療機器産業振興協会主催の技術情報交流会にて看護分野におけるニーズを発表した。

大学院看護学研究科 教育の概要

母子看護学領域「小児看護学」

教授 中島登美子

1. スタッフの紹介

教授 中島登美子

准教授 大脇 淳子

講師 樋貝 繁香

2. 教育の概要

小児看護学は、さまざまな健康状況にある子どもがよりよく育つことを目的に、子どもとその家族への看護の現状と将来的な展望を踏まえ、専門的な知識や研究課題を探究するとともに、高度な看護実践能力を育み、小児看護の充実と発展に寄与する人材の育成を教育目標としている。

開設5年目を迎えた本年度は、「小児看護学特別演習」「小児看護専門看護実習」「母子看護学特別研究」「母子看護学課題研究」を開講した。これらは、小児看護における現状を分析し課題を見いだし、高度医療および地域医療の場において小児看護専門職として高度な看護実践能力を発展させること、および小児看護における研究課題を明確にすることを目標としている。また、明らかになった課題の中から、看護学の改善・改革につながるテーマを選んで研究し、研究論文を作成する。

母性看護学

教授 成田 伸

1. スタッフの紹介

教授 成田 伸

准教授 齋藤 良子

講師 角川 志穂

2. 教育の概要

平成22年度は母子看護学領域母性看護学科目に入学生はなく、平成21年度入学生2名の院生に対して教育を行い、前期に母性看護専門看護実習を、後期に母性看護学特別研究を開講した。母性看護専門看護実習においては附属病院総合周産期母子医療センターおよび日光市民病院において実習を行い実習目標を達成した。また、母性看護学特別研究として研究を実施し、修士論文を提出した。

院生の状況を配慮しつつ、院生はティーチングアシスタントとして、母性看護学・助産学の講義・演習・実習・卒業研究等を補助し、教育方法について学んだ。

1) 母性看護専門看護実習

成田が科目責任者として主に指導し、角川講師の協力を得た。平成21年度入学生の2名が、自治医科大学附属病院および日光市民病院において実習を行った。専門看護師の6つの機能のうち、附属病院においては、主に高度看護実践、相談、調整、倫理調整、研究について、日光市民病院においては、主に教育の機能に関わる実習を行った。

附属病院においては、複数の事例を受け持ち、看護計画を立案し、ケアを実践し、必要時カンファレンスをにに参加する等、学習を進め、学習目標を達成した。

日光市民病院においては、これ以前の院生からの実習内容を引き継ぎ発展させる形で、周産期に関わる医療スタッフを対象とした新生児蘇生法公式Bコースの開催を主催し、13名修了させた。またそれに留まらず、その後の病院スタッフによる主体的な院内の勉強会開催につながった。この経緯については、院生が筆頭となって論文を作成し、自治医科大学看護学ジャーナル第8巻に投稿している。

3) 母性看護学課題研究および修士論文の作成

平成21年度入学生の2名に対して開講した。主な指導は成田が担当したが、角川講師、齋藤准教授が補佐した。テーマはそれぞれ「精神疾患をもつ妻とその夫にとっての妊娠、出産、育児を通しての夫婦の体験」「早産児の母親が長期間搾乳を継続する過程で直面する困難と搾乳継続を支えた要因」であり、前述の論文は1事例から、後述の論文は5事例から得られたデータを質的に分析し、修士論文としてまとめた。

健康危機看護学領域 クリティカル看護学

教授 中村 美鈴

1. スタッフの紹介

教授 中村 美鈴

講師 内海 香子（2011年3月31日退職）

講師 崎田マユミ（2011年3月31日退職）

2. 教育の概要

平成22年度は、クリティカルケア看護学講義Ⅰ、クリティカルケア看護学講義Ⅱ、クリティカルケア看護学講義Ⅲ、クリティカルケア看護学演習Ⅰ、クリティカルケア看護学演習Ⅱ、クリティカルケア看護学演習Ⅲ、クリティカル看護学特別演習、クリティカルケア看護専門実習、健康危機看護学課題研究の9科目を開講した。

1) クリティカルケア看護学講義Ⅰ

クリティカルケア看護学講義Ⅰは、前期、2単位30時間の必須科目である。他領域の院生も履修可能であるが該当者はいなかった。授業目標は、健康危機に関する人間の反応や立ち直りの過程にある人間の体験世界を哲学的に考察する諸理論を学修する。また、クリティカルな状況にある成人を心身統一として捉え、衝撃的な体験に際しての人間の反応や立ち直りの状況を理解し、成人とその家族に必要な専門的支援方法と看護の課題について学修することであった。

具体的内容としては、クリティカルな状況にある成人（小児、高齢者を含）とその家族に関する看護の動向と課題、クリティカルな状況にある人間の存在意味や体験世界を考察するための哲学的な諸理論、危機的な状況にある人間の反応や立ち直りの過程を把握するための諸理論、危機的な状況にある患者の家族に関する諸理論ならびに支援方法、危機的な状況にある患者とその家族への看護の専門性・独自性、クリティカルな状況から心身の回復過程にある患者と家族の状況に応じた専門的支援等についてであった。授業は、講義、討議、プレゼンテーション形式で行った。また、その都度、必要な文献および最新の論文を提示した。評価は、授業への出席状況、討議内容、課題レポートで行った。

中村が14時間、内海4時間、崎田が4時間、田畑

（非常勤）が8時間の講義を担当した。

2) クリティカルケア看護学講義Ⅱ

クリティカル看護学講義Ⅱは、前期、2単位30時間の必須科目である。授業目標は、危機的な状況/クリティカルケアな状況にある成人を総合的に捉え、衝撃的な体験に際しての人間の反応や立ち直りの状況を理解し、成人とその家族に必要な専門的支援方法と看護の課題について学修することであった。

具体的内容としては、危機的な状況にある人間の反応や立ち直りの過程を把握するための諸理論として、危機理論とストレスコーピングの理解、それぞれの理論を活用した危機的な状況にある患者とその家族への支援、危機的な状況にあるせん妄患者とその家族員を把握する方法と支援、危機的な状況から脱出し心身の回復過程にある患者とその家族へのアプローチ、心身の回復過程にある患者と家族の状況に応じた専門的支援、危機的な状況にある患者とその家族の総合理解、危機的な状況にある患者とその家族に対する専門看護師の役割に関して理解を深め、クリティカルケアへの応用について討議を行った。授業は、講義、討議、プレゼンテーション形式で行った。また、その都度、必要な文献および最新の論文を提示した。評価は、授業への出席状況、討議内容、課題レポートで行った。

中村が14時間、内海が4時間、崎田が4時間、綿貫（非常勤）4時間、中村恵子（非常勤）が4時間の講義を担当した。

3) クリティカルケア看護学講義Ⅲ

クリティカルケア看護学講義Ⅲは、後期、2単位30時間の必須科目である。授業目標は、健康危機状態時のアセスメントの基礎となる高度な病態生理の知識を学修する。また、クリティカルケア・集中治療を必要とする患者の健康危機状況のアセスメントに必要な理論と高度な知識を学修することであった。

具体的内容としては、クリティカルケアの基礎となる呼吸循環動態について、成人を中心に学修し、小児ならびに高齢者の特徴を踏まえ、クリティカルな状態にある成人の病態、生理学的変化について把握するために、フィジカルアセスメントを習得できるよう進めた。また、クリティカルな

状態にある成人とその家族の生活行動、機能回復の状況を把握するための方法を知るために、治療環境と複雑で困難な生活状況についての理解、取り巻く生活環境を把握し、状況に応じた専門的支援と看護の課題、変化する時期を把握し、状況に応じた専門的支援と看護の課題について、講義、討議、プレゼンテーション形式で行った。また、その都度、必要な文献および最新の論文を提示した。評価は、授業への出席状況、討議内容、課題レポートで行った。

中村が14時間、内海が4時間、布宮（非常勤）4時間、平林・多賀・和田・鈴木（非常勤）が各2時間の講義を担当した。

4) クリティカルケア看護学演習 I

クリティカルケア看護学演習 I は、前期、2単位60時間の必須科目である。授業目標は、クリティカルな状況にある個人を心身統一として捉え、医学的治療並びに療養生活等の全療養過程における個人の選択・意思決定を支援し、療養生活を支える看護援助について、理論を活用し、文献並びに事例を用いて演習する。選択や意思決定の支援に伴う複雑な問題と倫理的支援、健康危機にある成人に関わる保健医療福祉関係者との連携について学修することであった。

クリティカルな状況にある個人を心身統一として捉え、医学的治療を受ける患者・家族の選択・意思決定を支援し、療養生活を支える看護について、理論を活用し学修する。また、療養生活を支える福祉制度について、理論を活用し学修する。クリティカルな状況にあるがん患者の治療および生活に関わる選択・意思決定を支援し、療養生活を支援する看護援助について、理論を活用し学修する。また、がんの遺伝子診断／治療と倫理ならびに現状の課題について学修する。授業の半分は履修内容を踏まえ、各自が関心のあるテーマに合わせて文献を概観し、クリティカルケアにおける実践的知識に基づいた専門的援助、専門看護師の課題を検討する。

授業は、事例並びに文献を用いてその現状と課題を学修できるように、講義、討議、プレゼンテーション形式で行った。また、その都度、必要な文献および最新の論文を提示した。評価は、授業への出席状況、討議内容、課題レポートで行った。

中村が48時間、崎田が8時間、藤野（非常勤）

が4時間の講義・演習を担当した。

5) クリティカルケア看護学演習 II

クリティカルケア看護学演習 II は、前期、2単位60時間の必須科目である。授業目標は、クリティカルな状況にある患者と家族の療養生活を支える看護と福祉制度について、理論を活用し学修する。また、クリティカルな状況／健康危機にある成人に関わる保健医療福祉関係者との連携について学修する。さらに、がんの遺伝子診断／治療と倫理ならびに現状の課題について学修することであった。

具体的内容は、クリティカルな状況にある患者と家族の総合的理解を深めるために、療養生活を支える福祉制度と活用できる社会資源、治療・療養経過に起こる健康危機の理解、治療の選択と意思決定を支える看護、慢性病の治療・療養経過に起こる健康危機の理解、治療の選択と意思決定を支える看護、セルフケア能力を高める看護、医療チームにおける治療管理と連携・協働、CNSの専門的援助と実際の活動内容、がんの遺伝子診断／治療と倫理ならびに現状の課題について学修した。

授業は、事例並びに文献を用いてその現状と課題を学修できるように、講義、討議、プレゼンテーション形式で行った。また、その都度、必要な文献および最新の論文を提示した。評価は、授業への出席状況、討議内容、課題レポートで行った。

中村が32時間、内海が8時間、崎田が8時間、松本（非常勤）が8時間、藤井（非常勤）が4時間の講義・演習を担当した。

6) クリティカルケア看護学演習 III

クリティカルケア看護学演習 III は、後期、2単位60時間の必須科目である。授業目標は、クリティカルな状況における痛みに関する人間の反応と治療ならびに緩和ケアに関する理論と方法を学修することであった。

具体的内容は、クリティカルな状況の患者における痛みの病態生理、痛み治療の現状と課題、患者および家族の心身の苦痛とその緩和を学修した。具体的内容は、痛みの病態生理、痛み治療の現状と課題、クリティカルな状況で痛み・苦痛を抱える成人・家族の理解と看護援助、痛みの理解・把握痛み・苦痛緩和に関わる原理・理論、クリティカルな状況における成人・家族の痛み・苦痛の特

徴、クリティカルな状況における成人の痛み測定ツール、クリティカルな状況における成人の痛み・苦痛アセスメント、痛み・苦痛の緩和をはかる看護援助として薬理的介入と非薬理的介入、痛み・苦痛の緩和をはかる看護援助の評価、痛み・苦痛の緩和をはかる看護援助の評価、クリティカルな状況で痛み・苦痛を抱える成人および家族を理解し支援するための理論と方法、専門看護師の役割と機能等である。授業は、事例並びに文献を用いてその現状と課題を学修できるように、講義、討議、プレゼンテーション形式で行った。また、その都度、必要な文献および最新の論文を提示した。評価は、授業への出席状況、討議内容、課題レポートで行った。

中村が44時間、内海が4時間、新貝（非常勤）8時間、井上（非常勤）が4時間の講義・演習を担当した。

7) クリティカルケア看護学特別演習

クリティカルケア看護学特別演習は、後期、4単位120時間の選択科目である。授業目標は、クリティカルケア看護に関する研究課題の明確化、研究課題に基づいた研究の進め方、研究成果の実践への応用について学修する。また、クリティカルケア領域における実践上の課題を見出し、専門的な援助・技術の向上のために改善・開拓する方法を修得することであった。

具体的内容は、看護研究の重要性とその意義、看護研究の概要、看護研究のプロセスと科学的方法、研究課題に関して研究課題の明確化、および絞り込みの過程、前提条件、文献検討ならびに文献検討の意義、ならびにその方法、概念枠組みとモデル、理論的文脈での研究、仮説の組み立て、研究デザイン、研究設計の原理、標本抽出、各種研究方法；実験研究、質的研究、量的研究、研究データの分析、推測統計、研究計画書の作成、研究結果の応用、クリティカルケアにおける関心のあるテーマに関する文献の概観、各自の研究課題に関連した文献検討の発表であった。これらの学修課題を通して、クリティカルな状況にある患者と家族に関する実践研究課題の明確化につながるように授業を展開した。

評価は、授業への出席状況、討議内容、課題レポートで行った。

中村が12時間、内海が36時間、崎田が36時間、

ゼミ形式36時間で講義・演習を担当した。

8) クリティカルケア専門看護実習

クリティカルケア専門看護実習は、前期、6単位270時間の必須科目である。授業目標は、健康危機状態にある成人と家族に対する救急医療、集中治療、高度医療の特性と課題、高度な看護実践、調整・教育・コンサルテーション・倫理的調整の必要性とあり方、専門看護師の役割について学修することであった。実習の概要は、クリティカルな状態にある成人と家族のケアを行う部署にて実習し、複雑多岐に渡る病態、ならびに治療への反応に関する高度なアセスメントに基づく看護実践を行う。また、外来ならびに病棟等において高度な治療を受けて生活する患者への専門的看護実践を行う。さらに、医療施設内あるいは地域で健康危機にある成人のケアにかかわる家族、看護職、他職種などに対する調整・教育・コンサルテーション・倫理的調整の機能を実習する。クリティカルケアにおける看護学実践研究の課題を見出すことである。

実習施設は、自治医科大学附属病院のICU、CCU、手術室、他関連部署、であった。今回の実習生2名の関心は、重症患者の回復を促進する高度実践と術後の疼痛コントロールを要する患者にあった。実習方法は、実習生の関心領域において、高度の実践知識・スキルの修得、専門看護師の役割・機能などの内容を網羅した実習計画を熟考の上、実習要項に基づき計画書を作成し、実習先で事前研修、実習を6週間以上にわたり行った。2月から事前研修に取り組み、実習期間は5月上旬から7月下旬となった。

実習指導者は、高度医療施設の担当教員として中村美鈴、へき地における病院においては、中村美鈴、内海香子、崎田マユミの3名と自治医科大学附属病院における各実習部署の師長、およびクリティカルケアCNS相当の看護職で指導した。評価は、実習目標達成度とし、実践状況、実習記録、ケースレポート、課題レポート、実習へ出席状況で行い、概ね目標には達成できていた。

9) 健康危機看護学課題研究

健康危機看護学課題研究は、4単位120時間の必須科目である。授業目標は、クリティカルケア看護学、精神看護学の学修ならびに看護実践を通し

て見出された研究課題について研究を行い、研究指導をうけて修士論文を作成することであった。該当する院生は今回は1名であった。大学院生の主体的な取り組みを前提に、学内及び研究フィールドにおいて見出された研究課題に関する直接的助言・指導及び修士論文の作成について、状況に応じて、個別または集団で指導をおこなった。また、クリティカルケア看護学では、主にクリティカルケアの専門性・独自性に関する研究、クリティカルな状況にある人々への生活に関する研究、クリティカルケアが必要とされる看護実践への貢献に関する研究をテーマとしており、当該年度の大学院生の研究課題は「2型糖尿病をもつ長距離運転手の血糖コントロール不良要因についての認識と悪化予防」、「生命の危機状況にある患者の家族の代理意思決定」に関するテーマであった。データ分析、得られた結果の解釈、考察に多くの指導を要したが、実践に寄与できる価値ある修士論文を完成できた。研究指導教員として中村が、研究指導補助教員として、内海、崎田が担当した。

健康危機看護学領域「精神看護学」

教授 半澤 節子

1. スタッフの紹介

教授 半澤 節子

教授 永井 優子

講師 野崎 章子

2. 教育の概要

実践看護学分野健康危機看護学領域の精神看護学の科目を主科目群として選択した大学院生（1名）に対して、半澤が担当教員として研究指導を行い、精神看護学主科目群の授業科目は永井と半澤で分担した。院生は、修士論文作成、最終審査を経て、看護学修士の学位を取得することができた。また、本研究の一部を学会で口頭発表する機会を得た。

がん看護学領域「がん看護学」

教授 本田 芳香

1. スタッフの紹介

教授 本田 芳香

准教授 小原 泉

2. 教育の概要

がん看護学領域は、平成19年度に文部科学省の「がんプロフェッショナル養成プラン」において、本学の取り組みである「全人的ながん医療の実践者養成」が採択された。本学大学院看護学研究科において、平成20年度より高度専門看護職に求められる看護実践能力の育成強化を教育課程の特徴とする実践看護分野に、がんの急性期から終末期に至る様々な健康状態にある患者とその家族に対して、看護実践を提供するための実践理論とその方法を系統的に教授するがん看護学領域を開講した。この領域はがん看護学のみで、がん看護における専門的知識や研究課題を探究するとともに、がん患者とその家族に生じる複雑な状況を的確に判断し、苦痛や苦悩を緩和し、生活の質の向上を目指した高度な看護実践のできるがん看護のスペシャリストを育成する。

1) がん看護学に関する教育概要

平成22年度は2名の学生を受け入れた。2名とも標準コースにて講義・演習を開始した。

【がん看護学講義Ⅰ】（1年次前期科目）2単位

がんの疫学、病態生理、診断、治療法に関する最新知見を理解する。がん患者およびその家族に生じる複雑な健康課題を包括的にアセスメントする視点を修得し、最新のケア実践への適応を探究することを授業目標とした。がん患者とその家族に生じる複雑な健康課題に対して、がんの疫学、病態、診断、治療法などの最新知見から包括的なアセスメントを行う視点を、学生によるプレゼンテーション、討議を通して最新のケア実践へ繋げる方策を考察した。評価方法は、プレゼンテーション、討議及び課題レポートで評価をおこなった。本田、小原、非常勤講師9名が担当した。

【がん看護学講義Ⅱ】（1年次前期科目）2単位

がん患者とその家族が抱える複雑な健康問題を理解する基盤となる概念や理論を学び、看護モデルへの適応を探究することを授業目標とした。が

ん患者とその家族を理解するための基盤となる概念枠組みを理解するため、国内外の文献と討議をもとに、がん看護領域における基本的概念について考究した。またがん看護領域に関連するストレスコーピング理論、ニューマン理論、危機理論などの諸理論の理解についてプレゼンテーション、討議をし、それをもとにがん看護における本理論の適応を考究した。評価方法は、プレゼンテーション、討議及び課題レポートで評価をおこなった。本田、小原、非常勤講師2名が担当した。

【がん看護学演習Ⅰ】（1年次前期科目）2単位

がん患者とその家族が抱える複雑な健康問題を身体的、心理的、社会的、スピリチュアルな側面から包括的にアセスメントする方法を学修することを授業目標とした。がん患者とその家族の健康問題を身体的、精神的、社会的、スピリチュアルな視点から包括的にアセスメントするための観察スキルの習得や、専門的コミュニケーションスキルを習得するため、3回（2コマずつ）シリーズで行った。また各期（急性期～終末期に至る）におけるがん患者とその家族の症状アセスメントを実践事例の分析を通して系統的に習得する方法を教授した。評価方法は、プレゼンテーション、討議及び課題レポートで評価をおこなった。本田、小原、非常勤講師1名が担当した。

【がん看護学演習Ⅱ】（1年次前期科目）2単位

がん看護の基盤となる概念や理論、および緩和医療の知識を活用した事例分析や看護介入モデルの展開を通して、がん患者とその家族が抱える複雑な健康問題に対する自己の看護観の洞察や、専門的な看護実践の介入方法を学修することを授業目標とした。がん看護に関連する上記の諸理論を用いて実践事例を分析し、発表と討議を通して自己の看護観を考究した。また実践事例が有する健康課題を的確に捉える視点を、がん看護に関連する理論や概念を用いて看護介入モデルを作成し、プレゼンテーション、討議を通して実践への適用を検証及び考察した。評価方法は、プレゼンテーション、討議及び課題レポートで評価をおこなった。本田、小原、非常勤講師5名が担当した。

【がん看護学講義Ⅲ】（1年次後期科目）2単位

がん診断から終末期に至るまで、様々な健康問題を抱えるがん患者とその家族に緩和ケアを系統的かつ体系的システムとして提供するための専門的な看護支援方法を探究することを授業目標とし

た。各領域（周手術期，化学療法，放射線療法，遺伝性のがん看護，長期療養過程にある看護，終末期にある看護，地域看護）の様々な健康課題を抱えるがん患者とその家族に緩和ケアを系統的かつ体系的システムとして提供する看護支援方法を，各専門領域の講師より最新知見の提供を受けた。またがん看護専門看護師が果たすべき役割機能として探求するため，実践事例に基づきプレゼンテーション，討議形式で系統的に習得できるように教授した。評価方法は，プレゼンテーション，討議及び課題レポートで評価をおこなった。本田，小原，非常勤講師8名が担当した。

【がん看護学演習Ⅲ】（1年次後期科目）2単位

様々な健康課題を抱えるがん患者・家族に緩和ケアを提供するための専門的な看護支援の実際を，CNSの6つの機能（実践，教育，相談，調整，倫理，研究）に基づいて学修することを授業目標とした。実践事例や国内外の文献を検討し，質の高い緩和ケア提供方法を探究するため，プレゼンテーション，討議を通して，がん看護や緩和ケアにおける課題や展望について考察した。評価方法は，プレゼンテーション，討議及び課題レポートで評価をおこなった。本田，非常勤講師3名が担当した。

【がん看護専門看護実習】（2年次前期科目）2単位

がん患者およびその家族が体験する様々な健康課題の時期に適した専門的看護支援を継続的に提供するため，臨地実習を通して高度な看護実践・教育・相談・調整・倫理調整の実際について理解を深め，創造的ながん看護ケア開発を目指すことを授業目標とした。CNS役割開発実習と上級がん実践看護実習の2つに分け系統的かつ包括的な実践能力を育成する。CNS役割開発実習では，CNS役割実習と在宅がん看護実習を通して，CNSのスーパービジョンを受けながら，その役割機能の実際を学んだ。上級がん実践看護実習では，CNSとして，複雑な健康問題のあるがん患者とその家族に対して，高度な看護実践・教育・相談・調整・倫理調整の役割機能を遂行できる能力を養うため主体的な実践を通して，CNSのスーパービジョンを受けながら，創造的ながん看護ケア開発を学修した。評価方法は，実習態度，実習目標に対する自己評価，他者評価，レポート評価，総括報告会で評価をおこなった。本田，小原が担当した。

2) その他 看護学部教育に関連する教育概要

1) がん看護学に関連する教育概要

がん看護学（4年次前期科目1単位：選択）の科目責任者を小原が務めた。学習目的は，対象ががんを患う意味と，生命・生活への支障・影響を理解し，対象とその家族に必要な看護を学習することである。がんの特徴やがん治療の特徴，がん治療を受ける患者とその家族への看護，がんと共に生きる患者とその家族への緩和ケアについて，主に講義形式で授業が進められた。老年期あるいは小児期の発達課題をふまえたがん看護についても授業を行い，がんの小児とその家族に対する看護については小児看護学の教授が担当し，臨床助教による実践的なテーマ設定でグループワークと討議を行った。

履修した学生は61名で，授業は，1名の非常勤講師，小児看護学科目群教授および臨床助教（がんの小児とその家族に対する看護），小原が担当した。

2) がん看護学以外の担当教育概要

看護基礎セミナー（1年次前期科目1単位：必修）では，7～8名の学生を対象にセミナー形式ですすめていった。保健・看護研究セミナー（4年次前期科目1単位：必修），卒業研究（4年次後期科目4単位：必修）は，10名の学生を対象に前期の一部は全員にて文献検討をおこない，その後研究テーマ別に5名ずつのグループに分かれ，グループ指導および個別指導をおこなった。

老年地域看護管理学領域 「老年看護管理学」

教授 水戸美津子

1. スタッフの紹介

教授 水戸美津子

准教授 高木 初子

准教授 井上 映子（2011年3月31日退職）

2. 教育の概要

老年・地域看護管理学領域「老年看護学，老年看護管理学」には3名の学生が在籍した。そのうち2名は有職者であり長期在学制度を利用した。平成20年度入学生からカリキュラムを改正したため，新旧両方のカリキュラムに沿って授業を展開した。

老年看護管理学領域では，地域で生活する健康な高齢者のための健康の保持・増進に積極的に寄与するとともに，健康障害をもつ高齢者とその家族に対して，高度で適切な看護ケア能力とコンサルテーション能力を活用して健康な生活を支援できる看護管理能力の取得を目指して。

平成22年度修了生1名の論文題名は「高齢者の口腔吸引・鼻腔吸引に伴うリスク要因の検討～FMEA（Failure Mode and Effects Analysis）を用いて～」であった。

本年度大学院生が履修した科目の概要及び担当者は以下のとおりであった。

【老年看護管理学演習Ⅱ】（2年次前学期4単位）

ここでは，老年看護に関連する特定分野の研究を系統的に整理し，今後の研究課題を探求する。大学院生1名が履修した。（担当：水戸，高木）

【老年看護管理学特別演習】（2年次後学期4単位）

ここでは老年看護管理学講義Ⅰ・Ⅱおよび老年看護管理学演習Ⅰ・Ⅱでの学習内容を発展させフィールド調査・実習を通して自分自身の研究課題を明確にする。大学院生1名が履修した。（担当：水戸，高木）

【老年看護学特別演習Ⅱ】（3年次前学期2単位）

ここでは，老年看護学講義Ⅰ・Ⅱ及び老年看護学演習Ⅰ・Ⅱでの学習を発展させ，さらに特別演習Ⅰで明確にした課題に基づき，地域を中心としたフィールド調査・実習等を通して自分自身の研究課題を明確にした。大学院生1名が履修した。（担当：水戸，高木）

【老年・地域看護管理学特別研究】（3年次前学期・後学期）

ここでは，これまでの学修並びに看護実践を通して見出された研究課題に沿って研究を行い，修士論文を作成する。学生は自分自身の研究計画に基づきデータ収集及び分析を行い，修士論文を作成した。大学院生2名が履修した。（担当：水戸，高木，井上）

老年・地域看護管理学領域 「地域看護管理学」

教授 春山 早苗

1. スタッフの紹介

教授 春山 早苗
准教授 鈴木久美子
講師 塚本 友栄
講師 工藤奈織美

2. 教育の概要

地域看護管理学を選択している1年生は2名、2年生は4名（2年目1名、3年目以上3名）で4名が長期在学制度を利用している。

地域看護管理学では、地域特性に応じた政策立案や地域資源づくり、地域ケア体制づくり、その他の地域看護管理に関わる知識や技術を教授し、地域ケアの現場において管理的・指導的役割を担い、地域のニーズに合った看護サービス提供システムを改善・改革・創出できる人材育成を目指した教育活動をしている。今年度の開講科目は「地域看護管理学講義Ⅰ」（2単位、春山担当）、「地域看護管理学講義Ⅱ」（2単位、春山・鈴木担当）、「地域看護管理方法Ⅰ」（2単位、春山・非常勤講師担当）、「地域看護管理方法Ⅱ」（2単位、春山・鈴木・非常勤講師担当）、「地域看護管理学演習」（4単位、春山・鈴木担当）、「地域看護管理学特別演習」（4単位、春山担当）、「老年・地域看護管理学特別研究」（6単位、旧カリ4単位）であった。

【地域看護管理学講義Ⅰ・Ⅱ】

講義Ⅰの授業目標は、文献検討や近年の地域看護活動の課題の検討を通して、地域看護管理に係る主要概念、地域における看護活動体制づくりの理論と考え方、地域資源の評価と開発に関わる看護活動について学修することである。1年生1名が履修した。

講義Ⅱの授業目標は、文献抄読により、へき地に住む人々のヘルスニーズと地域診断の視点、へき地看護理論の基礎、へき地看護活動の展開方法と看護管理体制のあり方について学修することである。1年生1名が履修した。

【地域看護管理方法Ⅰ・Ⅱ】

方法Ⅰの授業目標は、実践事例や先行研究の知見から地域連携体制の構築や地域看護管理活動の展開方法、施策化に関わる看護専門職の役割と看

護活動の展開方法について検討することである。1年生2名が履修した。

方法Ⅱの授業目標は、山間へき地や離島、豪雪地帯における実践事例や国内外の文献を検討し、へき地における看護活動発展のための方法を考えることである。1年生2名が履修した。

【地域看護管理学演習】

授業目標は、地域特性とヘルスニーズの分析から、地域における看護提供体制を評価検討し、看護管理に関する改善・改革の課題を明らかにすることである。1年生2名が履修した。授業目標に関連した目標を学生自身が立て、1名は県内市町1カ所と県内事業所4カ所で、1名は附属病院地域連携部と県内訪問看護ステーション1カ所において実習を実施した。

【地域看護管理学特別演習】

授業目標は、地域における看護提供機関の看護管理に関する改善・改革の課題を達成するために、研究的アプローチを検討し、研究を計画することである。1年生1名が履修した。文献検討、並びに、学生が自分の研究テーマである離島保健師の活動について、複数の離島に出向き保健師からの情報収集を行い、ゼミと個別指導により、研究計画を精練した。

【老年・地域看護管理学特別研究】

春山が2年生3名の研究指導を行い、鈴木、塚本が研究指導を補助した。

2名が修士課程を修了し、修士論文のテーマは「へき地診療所における看護の役割を発揮できるための看護サービス提供体制づくりに関する研究」、「生活習慣病予防活動に関わる市町村保健師の判断に関する研究－個別支援から保健サービスの充実へと発展させていく活動に焦点を当てて－」であった。

共通科目

大学院看護学研究科
幹事長 半澤 節子

大学院看護学研究科の共通科目として、「地域医療論」「看護管理・政策論」「看護倫理」「看護実践研究論」「看護継続教育論」「コンサルテーション論」「地域調査法」「フィジカルアセスメント特論」の計8科目各2単位を設置している。全て選択科目として前期及び後期科目として開講している。全ての共通科目は、1・2年次の配当になっており、いずれの年次も履修することができる。この中で「看護管理・政策論」「看護倫理」「看護実践研究論」「看護継続教育論」「コンサルテーション論」の5科目（10単位）は、専門看護師教育課程の共通科目として平成20年度に認定されている。上記より選択し4科目（8単位）以上取得することが必要要件となっている。母性看護学、クリティカルケア看護学、精神看護学、がん看護学、小児看護学の5領域は専門看護師教育課程として認定されている。

共通科目の教育概要として、「地域医療論」は、地域に根差した医療や保健を展開する方法を理解することを目標に、地域ニーズの捉え方及びその展開方法、地域の保健医療施設の有機的連携等の実際等を教授した。「看護管理・政策論」は、保健・医療・福祉システムにおいて有効に機能する看護活動管理の組織化の方法並びに看護制度、政策的働きかけについて学修することを目標に、保健医療福祉システムの中で質の高いケアを提供するための機能・役割や活動方法等を教授した。「看護倫理」は、看護場面における複雑な判断を要する倫理的課題として、看護専門職としての立場から果たすべき機能について学修することを目標に、倫理的葛藤や課題並びに倫理的調整活動に必要な知識を教授した。「看護実践研究論」は、看護分野における実践研究の特徴を知り、その実際について学修することを目標に、専門的看護の質の向上に寄与する看護研究をすすめていく上での各種研究法の具体的展開について教授した。「看護継続教育論」は、生涯学習の視点から看護継続教育の現状を理解し、看護の継続教育に関する知識と技術について学修することを目標に、看護ケ

アの質を高めるために必要な上級看護職者が行う教育的働きかけ、教育環境づくり等、看護の継続教育に関する知識と技術を教授した。「コンサルテーション論」は、コンサルテーションに関する理論と倫理的側面を含むコンサルテーションをめぐる問題や課題について検討することを目標に、上級看護職が必要とするコンサルテーション技能と役割について教授した。「地域調査法」は、地域における健康問題や健康ニーズを把握するための調査方法並びに分析方法等を学修することを目標に、地域において効果的かつ効率的な看護活動・保健活動やその管理的活動を展開する上で必要な地域の健康問題やニーズを把握するための質的・量的調査法を教授した。「フィジカルアセスメント特論」は、身体の急激な変調とその原因・要因となる病態を捉え、治療ならびに看護援助に生かすためのアセスメントを実例を通して学修することを目標に、特に救急、慢性疾患の治療、在宅患者における病態評価に重点をおいて教授した。

研究業績録

- 注 1) 掲載対象は2010年1月1日から同年12月31日までである。
2) ゴシック体の人名は対象年に本学に所属していた者である。

基礎科学関連

(1) 論文

1) Kondo, S., Otsuka, K., Sawaguchi, G, T., Honda, E, T., Nakamura, Y. and Kato, S.: Mental health status of Japanese-Brazilian children at Brazilian schools in Japan. *Asia-Pacific Psychiatry*, 2: 92-98, 2010.

2) 大塚公一郎, 辻 恵介, 加藤 敏: 在日日系ブラジル人とうつ病親和型性格. *日本社会精神医学会雑誌*, 19 (1) ; 7-15, 2010.

3) 野崎章子, 岩崎弥生, 大塚公一郎: 看護は文化にどう取り組んできたか『異文化看護・精神看護の立場から』. *こころと文化*, 9: 106-110, 2010.

(2) 著書・総説

1) 渡邊亮一: 9 高度情報社会における診療情報 (I 診療情報学総論). *診療情報学 (日本診療情報管理学会編集)*. 医学書院(東京), 70-81, 2010.

2) 岡本悦司, 小橋 元, 坂田清美, 佐藤敏彦, 西浦 博, 横山英世, 岡田充史, 尾島俊之, 亀崎豊実, 高橋美保子, 富田敦子, 山本秀樹, 渡邊亮一: サブノートF第34版 保健医療論・公衆衛生学 (2011年版). *Medic Media (東京)*, 2010.

3) 大塚公一郎: 1. 現症を理解しよう (第II章 精神を病む人はどんな状態を示すのか). *看護学テキストNICE 精神看護学 こころ・からだ・かかわりのプラクティス (萱間真美, 野田文隆編集)*. 南江堂 (東京), 26-31, 2010.

4) 大塚公一郎: 2. 精神症状とはなんだろう? (第II章 精神を病む人はどんな状態を示すのか). *看護学テキストNICE 精神看護学 こころ・からだ・かかわりのプラクティス (萱間真美, 野田文隆編集)*. 南江堂 (東京), 32-54, 2010.

(3) その他

1) 大塚公一郎, 加藤 敏: 統合失調症における generation (生殖=世代) 主題-1慢性統合失調症患者に出現した妄想寓話をもとにして-. 第33回日本精神病理・精神療学会, 東京. 2010年10月7日. (*臨床精神病理* 32: 59-60, 2011)

2) 大塚公一郎: G.ベイトソンとクレッチマーの類型 - 『Navenナヴェン (1936, 1958)』における言及から -. 第14回精神医学史学会, 宇都宮. 2010年10月29日. (プログラム・抄録集, 32)

医学関連

(1) 論文

1) 竹田俊明, 村松慎一: ニューラルネットワークと自己組織化マップを応用した川芎茶調散証の解析. 漢方と最新治療, 19(1), 71-77, 2010.

(2) その他

1) Takeda, T., Muramatsu, S., Shimizu, I., Matsushita, Y.: A self-organizing map (SOM) analysis of the Kampo medicines for headache, Neurosci.Res. 68, Suppl. 1, Abstract of the 33rd Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society (Neuro 2010) (2010).

2) 竹田俊明: 心臓の解剖生理と基礎心電図の読み方. 招待講演, 埼玉県臨床工学技士会主催 第9回臨床工学セミナー, 大宮ソニックシティホール, 2010年7月4日.

基礎看護学

(1) 論文

1) Ushiro R. and Nakayama, K. : Gender Role Attitudes of Hospital Nurses in Japan : Their Relation to Burnout, Perceptions of Physician/Nurse Collaboration, Evaluation of Care, and Intent to Continue Working. Japan Journal of Nursing Science, 7(1) : pp55-64, 2010.

(2) その他

1) Ushiro, R. : Nurse-Physician Collaboration Scale: Examination of the Reliability and Factor Validity. 2nd Japan China Korea Nursing Conference, Tokyo (Japan). 11月21日(2010)

2) 野中 静, 里光やよい, 大島康晴 看護技術に関するSP参加型学習に対する学習者による評価. 第42回日本医学教育学会大会, 東京都. 2010年7月31日 (第42回日本医学教育学会大会予稿集, 41:101, (2010))

3) 宇城 令 : チーム医療の現状—東京都, 埼玉県, 栃木県等の調査から—. 日本医療マネジメント学会第10回栃木地方会 特別講演, 栃木県. 2010年10月30日.

4) 井上佐代子, 宇城 令, 市田 勝, 大柴幸子, 大貫幸子, 樋口一江, 長谷川 剛 : 転倒・転落ワーキンググループ「患者・家族へのアプローチグループ」の取り組み—「転ばぬ先のパンフレット」作成と評価—. 医療の質・安全学会, 千葉県. 2010年11月27日.

5) 狐塚正子, 宇城 令, 寺山美華, 川合直美, 上野久子, 大川美代子, 塚原由江, 樋口一江, 長谷川 剛, 河野龍太郎 : 放射線技師が関与する転倒・転落リスク要因の現状と課題. 医療の質・安全学会, 千葉県. 2010年11月27日.

6) 宇城 令, 樋口一江, 市田 勝, 井上佐代子, 大柴幸子, 大貫紀子, 寺山美華, 鶴見真理子, 河野龍太郎, 長谷川 剛 : 転倒予防に関する患者の医療者への情報提供と転倒予防行動. 医療の質・安全学会, 千葉県. 2010年11月28日.

7) 川合直美, 寺山美華, 宇城 令, 狐塚正子, 塚原由江, 上野久子, 大川美代子, 河野龍太郎, 長谷川剛 : 転倒・転落に関する院内ハザードマップ作成1年評価 : 転倒・転落に関する院内ハザードマップ作成1年評価. 医療の質・安全学会, 千

葉県. 2010年11月28日.

8) 川上 勝, 宇城 令, 櫻井美奈, 長井栄子, 福田真紀, 山中 瞳, 相賀美幸, 大久保裕幸, 芦澤拓也, 梶原 忠 : 看護師の所在確認システムの有用性—モニタアラーム聞き逃しリスクの評価ツールとして—. 医療の質・安全学会, 千葉県. 2010年11月28日.

9) 宇城 令 : 医師と看護師の協働が医療の質指標へ及ぼす影響と協働に関連する要因 調査報告書 (平成19~20年度文部科学省科学研究費補助金若手研究 (B) 課題番号19791667) 2010.

地域看護学

(1) 論文

1) 塚本友栄, 小川貴子, 工藤奈織美, 鈴木久美子, 春山早苗, 関山友子, 小谷妙子, 工藤祝子, 福田順子, 佐藤里美: へき地診療所看護職の学習ニード. 日本ルーラルナーシング学会誌, 5; 1-15, 2010.

2) 塩ノ谷朱美, 工藤奈織美, 鈴木久美子, 春山早苗: 集落が散在している山間へき地における介護予防のための市町村保健師の活動に関する研究. 日本ルーラルナーシング学会誌, 5; 17-30, 2010.

3) 福田順子, 塚本友栄, 春山早苗: キャリア発達から見た看護職の出向・派遣の意義. 日本ルーラルナーシング学会誌, 5; 67-77, 2010.

4) 宇城 令, 塚本友栄, 井上映子, 春山早苗, 水戸美津子: 本学部卒業生の進路決定と就業継続に関する調査. 自治医科大学看護学ジャーナル, 7; 89-97, 2010.

(2) 著書・総説

1) 鈴木久美子: 第1章 地域看護学概論 第II節 地域看護の歴史 第1項 保健婦規則制定以前の地域における看護活動. 最新地域看護学 第2版 総論 (宮崎美砂子, 北山三津子, 春山早苗, 田村須賀子編). 日本看護協会出版会 (東京), 21-28, 2010.

2) 春山早苗: 第1章 地域看護学概論 第II節 地域看護の歴史 第2項 保健婦規則制定以後の保健婦活動 第3項 ヘルスニーズに対応した保健婦活動の確立. 最新地域看護学 第2版 総論 (宮崎美砂子, 北山三津子, 春山早苗, 田村須賀子編). 日本看護協会出版会 (東京), 28-66, 69-99, 295-321, 2010.

3) 春山早苗: 第2章 健康課題の特性に応じた活動論 第IV節 感染症保健福祉活動 第1項~第5項. 最新地域看護学 第2版 各論1 (宮崎美砂子, 北山三津子, 春山早苗, 田村須賀子編). 日本看護協会出版会 (東京), 260-300, 2010.

4) 春山早苗: 第2章 地域特性に応じた活動論 第I節 へき地における地域看護活動 第1項 へき地における地域看護活動. 最新地域看護学 第2版 各論2 (宮崎美砂子, 北山三津子, 春山早苗, 田村須賀子編). 日本看護協会出版会 (東京), 144-158, 2010.

5) 塩ノ谷朱美, 春山早苗: 第2章 地域特性に応じた活動論 第I節 へき地における地域看護活動 第3項 山村・豪雪地帯における地域看護活動. 最新地域看護学 第2版 各論2 (宮崎美砂子, 北山三津子, 春山早苗, 田村須賀子編). 日本看護協会出版会 (東京), 178-186, 2010.

6) 塚本友栄: 第6章 退院支援・調整に関する看護師の教育. 平成22年度診療報酬改定対応版入院時から始める退院支援・調整 第2版 (福島道子, 河野順子編). 日総研 (名古屋), 142-162, 2010.

(3) その他

1) 春山早苗: 新型インフルエンザ発生時の保健所保健師の活動と役割. 日本地域看護学会 第13回学術集会ミニシンポジウム「健康危機時における公衆衛生上の緊急課題と地域看護活動」, 札幌. 2010年7月11日. (日本地域看護学会 第13回学術集会講演集; 26, 2010)

2) 郷間悦子, 川野英子, 阿久津梢, 藤原いづみ, 塚本友栄, 福島道子: 退院調整活動内容と活動上の困難点の現状. 第14回日本看護管理学会年次大会, 横浜. 2010年8月21日. (日本看護管理学会講演抄録集; 115, 2010)

3) 尾崎章子, 中尾八重子, 春山早苗, 鈴木和代, 佐野けさ美, 安武綾, 公平絵里, 上野桂子, 川村佐和子: 児童・生徒に対する在宅療養に関する学習支援の推進 (第1報) - 概要・プロセス -. 第69回日本公衆衛生学会総会, 東京. 2010年10月27日. (日本公衆衛生雑誌総会抄録集 57 (10); 290, 2010)

4) 中尾八重子, 尾崎章子, 春山早苗, 鈴木和代, 川村佐和子, 上野桂子, 公平絵里: 児童・生徒に対する在宅療養に関する学習支援の推進 (第2報) - 小学校での健康教室 -. 第69回日本公衆衛生学会総会, 東京. 2010年10月27日. (日本公衆衛生雑誌総会抄録集 57 (10); 290, 2010)

5) 工藤奈織美, 春山早苗, 鈴木久美子, 小川貴子, 島田裕子, 塚本友栄, 福田順子, 尾崎章子, 中尾八重子, 鈴木和代, 川村佐和子, 上野桂子, 公平絵里: 児童・生徒に対する在宅療養に関する学習支援の推進 (第3報) - 中学校での健康教室 -. 第69回日本公衆衛生学会総会, 東京. 2010年10月27日. (日本公衆衛生雑誌総会抄録集 57 (10); 290, 2010)

- 6) 鈴木和代, 川村佐和子, 尾崎章子, 中尾八重子, 春山早苗, 公平絵里, 上野桂子: 児童・生徒に対する在宅療養に関する学習支援の推進(第4報) - 高校での健康教室 - . 第69回日本公衆衛生学会総会, 東京. 2010年10月27日. (日本公衆衛生雑誌総会抄録集 57(10); 290-291, 2010)
- 7) 春山早苗: 保健所の視点から: 保健師. 第69回日本公衆衛生学会総会 公衆衛生行政研究フォーラム2 21世紀のパンデミックにどう対応すべきか - 新型インフルエンザの経験から学ぶ -, 東京. 2010年10月27日. (日本公衆衛生雑誌 57(10); 90, 2010)
- 8) 春山早苗, 山口佳子, 櫻山豊夫, 倉橋俊至, 筒井智恵美, 堀裕美子, 北島信子, 有馬和代, 川人礼子, 塚本友栄, 島田裕子: 大都市部における感染症集団発生時の保健活動. 第69回日本公衆衛生学会総会, 東京. 2010年10月29日. (日本公衆衛生雑誌総会抄録集 57(10); 461, 2010)
- 9) 奥田博子, 宮崎美砂子, 牛尾裕子, 春山早苗, 田村須賀子, 岩瀬靖子, 島田裕子: 災害発生に備えた平常時における保健活動の取り組みに関する分析. 第69回日本公衆衛生学会総会, 東京. 2010年10月29日. (日本公衆衛生雑誌総会抄録集 57(10); 465, 2010)
- 10) 宮崎美砂子, 松島郁子, 田中由紀子, 岩瀬靖子, 奥田博子, 春山早苗, 藤田美江, 牛尾裕子: 大都市部の地震災害発生時の保健活動上の課題 - 災害時対応マニュアル等の多角的分析 -. 第69回日本公衆衛生学会総会, 東京. 2010年10月29日. (日本公衆衛生雑誌総会抄録集 57(10); 470, 2010)
- 11) 高村寿子, 上原里程, 春山早苗, 江角伸吾, 中村好一: 保健医療従事者と思春期ピアリーダーによる健康なライフスタイルづくり支援事業. 第69回日本公衆衛生学会総会, 東京. 2010年10月29日. (日本公衆衛生雑誌総会抄録集 57(10); 565, 2010)
- 12) 春山早苗: 地域看護の実践 Rural Nursing とは. J I M (Journal of Integrated Medicine), 20(7); 520-523, 2010.
- 13) 春山早苗: 新型インフルエンザ発生時の保健所保健師の活動と役割 - 従来の活動を活かし今後につなげるためには -. 日本地域看護学会誌, 13(1); 32-36, 2010.
- 14) 春山早苗, 鈴木久美子, 塚本友栄, 工藤奈織美, 小川貴子, 島田裕子: 離島・山村過疎地域における市町村保健師活動のプライオリティの判断に関する研究. 平成19~21年度科学研究費補助金研究成果報告書, 2010.
- 15) 春山早苗, 山口佳子, 櫻山豊夫, 倉橋俊至, 筒井智恵美, 堀裕美子, 北島信子, 有馬和代, 川人礼子, 塚本友栄, 島田裕子: 大都市部における感染症集団発生時の保健活動. 平成21年度厚生労働科学研究費補助金 健康安全・危機管理対策総合研究事業「大都市部における自然災害等健康危機発生時の保健活動体制と方法に関する研究」平成21年度 総括・分担研究報告書, 61-88, 2010.
- 16) 宮崎美砂子, 奥田博子, 春山早苗, 藤田美江, 牛尾裕子: 大都市部における自然災害等健康危機発生時の保健活動体制と方法に関する研究. 平成21年度厚生労働科学研究費補助金 健康安全・危機管理対策総合研究事業 平成21年度 総括・分担研究報告書, 1-8, 2010.
- 17) 奥田博子, 宮崎美砂子, 岩瀬靖子, 牛尾裕子, 春山早苗, 田村須賀子, 森下安子, 島田裕子: 災害発生に備えた平常時における保健活動の取り組みに関する分析. 厚生労働科学研究費補助金 健康安全・危機管理対策総合研究事業「災害・重大健康危機の発生時・発生後の対応体制及び健康被害抑止策に関する研究」平成20年度総括・分担研究報告書, 11-66, 2010.
- 18) 春山早苗: II 在宅療養支援教材を活用した健康教室の開催 2-2中学校, III 学校教員に向けた在宅療養支援教材を活用した健康教室の手引き 中学校向け授業の手引き 2. 平成21年度 独立行政法人福祉医療機構 長寿・子育て・障害者基金助成事業「児童・生徒を中心とした在宅療養に関する学習支援の推進事業」報告書, 全国訪問看護事業協会, 65-88, 137-143, 2010.
- 19) 春山早苗: 分科会「僻地の人びとの健康を守る看護職の役割拡大に向けて」のシンポジスト発表内容. 第14回日本看護サミット北海道 '09看護の未来を拓く~北の大地から生命を支える看護の創造にむけて~開催報告書 140-171, 2010.
- 20) 塚本友栄, 春山早苗, 鈴木久美子, 工藤奈織美, 小川貴子, 小谷妙子, 工藤祝子, 福田順子, 佐藤里美: 看護学領域共同研究報告: へき地診療所における看護活動の現状と看護職の学習ニーズ. 自治医科大学看護学ジャーナル, 7; 105-106, 2010.

精神看護学

集：182, (2010).

(1) 論文

1) Hanzawa, S., Bae, JK., Tanaka, H., Tanaka, G., Bae, YJ., Goto, M., Inadomi, H., Nakane, H., Ohta, Y. and Nakane, Y. : Personal stigma and coping strategies in families of patients with schizophrenia: Comparison between Japan and Korea. *Asia-Pacific Psychiatry*, 2 ; 105 – 113, 2010.

2) Hanzawa, S., Bae, JK., Tanaka, H., Bae, YJ., Tanaka, G., Inadomi, H., Nakane, Y. and Ohta, Y. : Caregiver burden and coping strategies for patients with schizophrenia: Comparison between Japan and Korea. *Psychiatry Clin. Neurosci.*, 64 ; 377 – 386, 2010.

3) 野崎章子, 半澤節子, 岩崎弥生 : わが国の児童精神科看護実践に関する文献研究 – 1983年から2004年に発表された研究文献にみる看護援助の動向. *自治医科大学看護学ジャーナル*, 7 ; 49 – 62, 2010.

4) 半澤節子, 佐藤勢津子, 谷田部佳代弥, 他 : 精神科看護師が評価する統合失調症事例の地域生活困難度の検討 : 個人的スティグマ認知との関連性をとおして. *日社精誌*, 19 ; 187 – 198, 2010.

5) 半澤節子 : 家族との共同治療と家族支援 – 精神障害者家族の介護負担と家族支援. *最新精神医学*, 15 ; 245 – 250, 2010.

(2) その他

1) Nosaki, A. and Hanzawa, S. : Attitude and beliefs among psychiatric nursing staff to the people living in community with schizophrenia. 14th Pacific Rim Congress of Psychiatry, Brisbane Australia. 2010.10.29 – 31.

2) Hanzawa, S., Yatabe, K. and Tanaka, G. : Toward understanding the internalized stigma of schizophrenia : A study of psychiatric nurses in Japan. 14th Pacific Rim Congress of Psychiatry, Brisbane Australia. 2010.10.29 – 3.

3) 板橋直人 : 統合失調症事例を用いた地域生活の困難に関する精神科看護職者の認識 : 職種と経験年齢との関連について. 日本精神障害者リハビリテーション学会第18回浦河大会, 北海道浦河郡浦河町. 2010.10.24. (日本精神障害者リハビリテーション学会 第18回浦河大会 プログラム抄録)

母性看護学

(1) 論文

1) 成田 伸：避妊・性感染症予防カウンセラー育成プログラムの評価. 山梨大学大学院博士論文 2010.

2) 沼尾美津穂, 立木歌織, 高木友子, 高橋斉子, 渥美清恵, 小嶋由美, 山下 瞳, 齋藤良子, 成田 伸：へき地医療拠点病院における母性看護専門看護実習の実践. 日本ルーラルナース学会誌, 5: 79-85, 2010.

3) 黒田裕子, 西岡啓子, 加藤優子, 成田 伸：へき地で乳児を育てる母親の育児支援-1ヶ月健診受診児の母親調査-. 日本ルーラルナース学会誌, 5: 95-104, 2010.

(2) 著書・総説

1) 加藤尚美編：成田 伸. 家族計画：助産業務指針, 第1版. 日本助産師会出版, 131-137, 338, 339, 2010.

(3) その他

1) 小川朋子, 高橋有美, 山本智美, 松永伊代, 森久美子, 和智志げみ, 東野妙子, 和田サヨ子, 島田真理恵, 津波古澄子：産後2・3か月の母親支援プログラムの効果. 第24回日本助産学会学術集会, つくば市. 2010年3月21日. (日本助産学会誌 23 (3) : 428, 2010)

2) 高橋斉子, 高木友子, 立木歌織, 沼尾美津穂, 天谷恵美子, 金田陽子, 寒河江かよ子, 塚田祐子, 藤川智子, 角川志穂, 齋藤良子, 成田 伸：児がNICU入院中の母親に対する 母乳育児支援 -搾乳量が低迷する事例から-. 第35回栃木県母性衛生学会, 宇都宮市. 2010年6月12日.

3) 野々山未希子, 成田 伸, 工藤里香, 鈴木幸子, 遠藤俊子, 水流聡子：避妊・性感染症予防カウンセラー育成プログラムの評価 (その1) -ロールプレイを用いたカウンセリングの受講前後の評価-. 第12回日本母性看護学会, 津市. 2010年6月19日. (第12回日本母性看護学会学術集会抄録集: 65, 2010)

4) 工藤里香, 成田 伸, 野々山未希子, 鈴木幸子, 遠藤俊子, 水流聡子：避妊・性感染症予防カウンセラー育成プログラムの評価 (その3) -受講者 (介入群) と自己学習者 (比較群) における

態度の変容状況の比較-. 第12回日本母性看護学会, 津市. 2010年6月19日. (第12回日本母性看護学会学術集会抄録集: 67, 2010)

5) 林ひろみ, 前原邦江, 石井邦子, 成田 伸, 大月恵理子：諸外国におけるハイリスク妊娠を含む周産期ケアシステムの現状. 第12回日本母性看護学会, 津市. 2010年6月19日. (第12回日本母性看護学会学術集会抄録集: 68, 2010)

6) 沼尾美津穂, 成田 伸：女性にとっての性と生殖に関わる体験-第2子以降の出産時点でのふり返りから-. 第12回日本母性看護学会, 津市. 2010年6月19日. (第12回日本母性看護学会学術集会抄録集: 70, 2010)

7) 立木歌織, 成田 伸：Late Preterm児を出産した母親の授乳と育児に関連する困難と乗り越えるのに影響した要因~周産期第3次医療施設で出産した母親を対象にして~. 第12回日本母性看護学会, 津市. 2010年6月19日. (第12回日本母性看護学会学術集会抄録集: 72, 2010)

8) 立木歌織, 高橋斉子, 沼尾美津穂, 高木友子, 小嶋由美, 西岡啓子, 角川志穂, 齋藤良子, 成田 伸：児がNICU入院中の母親に対する母乳育児支援-搾乳状況からみた母乳育児の実態-. 第12回日本母性看護学会, 津市. 2010年6月19日. (第12回日本母性看護学会学術集会抄録集: 73, 2010)

9) 成田 伸, 角川志穂, 寒河江かよ子, 工藤祝子：地域支援病院への派遣勤務が助産師のキャリア発達に与える影響-地域支援病院への派遣勤務前後の助産師の体験-. 第5回日本ルーラルナース学会, 長崎市. 2010年9月4日. (第5回日本ルーラルナース学会抄録集: 32, 2010)

10) 高木友子, 高橋斉子, 立木歌織, 沼尾美津穂, 小嶋由美, 渥美清恵, 久野文人, 小川朋子, 角川志穂, 齋藤良子, 成田 伸：新生児蘇生法講習会を活用した出生直後の新生児管理の向上 (その1) -母性専門看護実習としての開催から, シミュレーションセンターでの開催まで-. 第9回自治医科大学シンポジウム, 下野市. 2010年9月4日.

11) 高橋斉子, 高木友子, 立木歌織, 沼尾美津穂, 小嶋由美, 渥美清恵, 荒川直美, 手塚久恵, 桑川舞衣夢, 小川朋子, 角川志穂, 齋藤良子, 成田 伸：新生児蘇生法講習会を活用した 出生直後の新生児管理の向上 (その2) -日光市民病院における新生児蘇生法への取り組みとその発展-. 第9回自治医科大学シンポジウム, 下野市. 2010年9

月4日.

12) 小川朋子, 酒井敦子, 本郷真基, 東野妙子:
第2子妊娠時に第1子の出産体験を振り返り語るこ
この意味. 第51回日本母性衛生学会, 金沢市.
2010年11月5日. (母性衛生 51 (3) : 133, 2010)

13) 石田みなみ, 山岸貴子, 高柳希美子, 小川朋
子: 祖父母から受けた産後支援・子育て支援状況
-産後1か月の母親のニーズを探る-. 第51回日
本母性衛生学会, 金沢市. 2010年11月5日. (母性
衛生 51 (3) : 147, 2010)

14) 林ひろみ, 前原邦江, 石井邦子, 成田 伸:
海外のハイリスク妊娠看護に関する書籍の構成内
容. 第51回日本母性衛生学会, 金沢市. 2010年11
月6日.

15) 成田 伸: 地区理事報告-北関東地区. 助産
師, 65 (1) : 104-105, 2010

16) 矢野美紀, 成田 伸, 西岡啓子, 加藤優子,
森島知子, 天谷恵美子, 金田陽子, 塚田祐子, 立
木歌織, 沼尾美津穂, 小嶋由美, 藤川智子, 角川
志穂: NICUに入院した子どもと母親のための母
乳育児支援~NICUから地域につなぐ継続的な支
援をめざして~. 自治医科大学看護学ジャーナル
(自治医科大学看護学部共同研究費報告), 7 : 101,
2010

17) 成田 伸, 矢野美紀, 西岡啓子, 加藤優子,
森島知子, 寒河江かよ子, 工藤祝子: 地域支援病
院への派遣勤務が助産師のキャリア発達に与える
影響. 自治医科大学看護学ジャーナル (自治医科
大学看護学部共同研究費報告), 7 : 103, 2010

18) 成田 伸 (研究代表者), 鈴木幸子, 野々山
未希子, 工藤里香, 遠藤俊子, 水流聡子, 齋藤良
子, 角川志穂, 西岡啓子, 段ノ上秀雄, 他: 避
妊・STD予防カウンセリングの開発とウェブを用
いたサポートシステムの構築. 平成19 - 21年度科
学研究費助成金基盤研究 (b) (一般) 研究成果報
告書, 2010

小児看護学

(1) 論文

1) 中島登美子, 山崎 希, 藤浪千種, 中山真紀子, 長田千奈美, 樋貝繁香, 石田寿子: 青年後期から成人期の女性の育児における将来見通しの不確かさとジェンダー・アイデンティティおよびソーシャルサポートが子どもをもつ希望に与える影響. 自治医科大学看護学ジャーナル, 7; 3-11. 2010.

2) 中島登美子, 山崎 希, 藤浪千種, 中山真紀子, 長田千奈美, 樋貝繁香, 石田寿子: 育児における将来見通しの不確かさ尺度の信頼性・妥当性の検討. 自治医科大学看護学ジャーナル, 7: 63-71. 2010.

(2) その他

1) Nakajima, T., Ogawa, Y., Nagasawa, N.: Implementation of a kangaroo care program in pre-term infants. 7th Biennial Joanna Briggs Colloquium Chicago, USA. Sep. 13, 2010 (7th Biennial Joanna Briggs Colloquium-Program, 23, 2010.)

2) Higai, S., Watanabe, T., Komoriya, K and Sugimoto, R.: Mothers' Attitudes toward Children's Fever. 2nd Japan China Korea Nursing Conference, Tokyo. Nov. 20, 2010 (2nd Japan China Korea Nursing Conference, 170-171, 2010.)

3) 武藤彩子, 渡邊隆子, 籠谷京子, 杉本礼子, 樋貝繁香: 子どもの発熱に対する母親の対処行動に関する実態調査. 第11回山梨県母性衛生学術集会. 山梨. 2010年5月22日. (山梨県母性衛生学術集会, 10: 2, 2010)

4) 古俣侑香里, 西原 彩, 伊藤きよ美, 大脇淳子: 保育園児の午睡と5歳児の生活リズムの関連. 小児保健学会, 新潟. 2010年9月17日 (第57回日本小児保健学会講演集: 119, 2010)

5) 佐藤貴広, 小坂浩子, 元山 悠, 大脇淳子: 小児病棟における男性看護師の役割に関する文献検討. 小児保健学会, 新潟. 2010年9月17日. (第57回日本小児保健学会講演集: 213, 2010)

成人看護学

(1) 論文

- 1) Nakamura, M., Hosoya, Y., Yano, M., Doki, Y., Miyashiro, I., Kurashina, K., Morooka, Y., Kishi K and Lefor AT : Extent of Gastric Resection Impacts Patient Quality of Life: The Dysfunction after Upper Gastrointestinal Surgery for Cancer (DAUGS32) Scoring System. *Annals Surgery Oncology*, Volume 18 Issue 2 ; 314-220, 2010.
- 2) 中村美鈴, 細谷好則, 段ノ上秀雄, 武正泰子, 矢野雅彦, 土岐祐一郎: 胃切除後障害 胃切除後の機能障害とQOLの評価 現状と展望. *臨床消化器内科*, 24 (11) ; 1477-1485, 2010.
- 3) 茂呂悦子, 中村美鈴: 集中治療室中に人工呼吸器を装着した術後患者の回復を促すための看護援助の検討. *日本クリティカルケア看護学会学会誌*, 6 (3) ; 37-45, 2010.
- 4) 松浦利江子: 患者に対して陰性感情をもつ体験に付随する倫理的葛藤. *日本看護管理学会誌*, 14 (1) ; 77-84, 2010.
- 5) 内海香子, 麻生佳愛, 磯見智恵, 大湾明美, 小野幸子, 牛久保美津子, 野口美和子: 訪問看護師が認識する訪問看護を利用する後期高齢糖尿病患者のセルフケア上の問題状況と看護. (研究報告) *日本糖尿病教育・看護学会誌*, 14 (1) ; 30-39, 2010.

(2) 著書・総説

- 1) 中村美鈴: 患者体験を取り入れた教育実践の工夫と未来 患者がつづる開腹手術体験記からの教育方法の検討. *日本看護研究学会誌* 33 (2). 日本看護研究学会 (横浜), 148-149, 2010.
- 2) 中村美鈴: 看護記録と看護過程の悩み解決現場の悩みにズバット! 術中記録の書き方. *かんごきろくと看護過程* 20 (2). 日総研出版 (名古屋), 52-65, 2010.

(3) その他

- 1) Kitamura, T and Minigishi, H.: The collaborative partnership between a patient with perioperative head and neck cancer and a nurse. *International Society of Nurses Cancer Care*, Atlanta Georgia USA. Mar. 8, 2010. (16th International conference on cancer nursing; 122,

(2010))

- 2) Shimizu, Y., Uchiumi, K., Asou, K., Kuroda, K., Murakado, N., Seto, N., Masaki, H. and Ishii, H. : THE DEVELOPMENT OF AN EVALUATION SCALE FOR DIABETES SELF-CARE AGENCY. 8th International Diabetes Federation Western Pacific Region Congress. Busan, Korea. Oct. 17, 2010. (2010 IDF WPR Congress Abstract Book; 197, (2010))
- 3) 中村美鈴, 細谷好則, 矢野雅彦, 瀧口修司, 宮代勲, 藤原義之, 段ノ上秀雄, 岸健太郎, 梅下浩司, AlanLefor, 土岐祐一郎: 胃癌術後QOL向上に役立つ手技・再建法とその機能的評価 胃切除後の機能障害評価尺度(DAGUS-20:Dysfunction After Upper Gastrointestinal Surgery-20)とQOL評価 現状と展望. 第110回日本外科学会, 名古屋. 2010年4月10日. (日本外科学会雑誌 111 (臨時増刊号_2) ; 168, 2010)
- 4) 平良由香利, 中村美鈴: 心筋梗塞を発症した成人の復職に伴う困難と対応 (第2報). 第6回日本クリティカルケア学会, 札幌. 2010年7月17日. (日本クリティカルケア看護学会誌6 (1) ; 162, 2010)
- 5) 内海香子, 牛久保美津子, 高木あけみ, 大屋千代子, 林昌子: 訪問看護師を対象とした糖尿病をもつ利用者・家族のセルフケアを支援するための研修要素. 第16回日本糖尿病教育・看護学会学術集会. 東京都東京. 2010年10月10日. (日本糖尿病教育・看護学会誌 Vol.14 (特別号) ; 174, (2010))
- 6) 山本洋子, 中村美鈴, 武正泰子, 内海香子: 生命の危機状況にある患者に代わり延命治療の実施に関する意思決定を行う家族への看護師の関わりと困難. 第30回 日本看護科学学会, 札幌. 2010年12月3日. (日本看護科学学会学術集会講演集30 ; 229, 2010)
- 7) 北村露輝, 中村美鈴, 内海香子, 段ノ上秀雄, 崎田マユミ: 術後早期離床における患者体験を通じたシミュレーション学習による学生の学びと気づき. 自治医科大学シンポジウム ポスターセッション, 栃木県下野市. 2010年9月4日.

老年看護学

(1) 論文

- 1) 井上映子, 高木初子, 長井栄子, 今井宏美, 麻賀多美代, 杉原直樹, 齋藤やよい: 介護老人保健施設入居高齢者の嚥下機能の簡易測定方法の検討. お茶の水看護学雑誌, 5 (1) : 11-17, 2010.
- 2) 長井栄子, 水戸美津子, 渡邊美智子, 太田信子, 吉澤利恵, 池下麻美, 篠原和子: 集中治療部における褥瘡ケアに関する看護師の自己評価. 自治医科大学看護学ジャーナル, 7: 37-47, 2010.
- 3) 池下麻美, 水戸美津子, 太田信子, 吉澤利恵, 長井栄子, 渡邊美智子, 篠原和子: 皮膚・排泄ケア認定看護師が推奨している褥瘡予防・治療ケア用品の使用状況の検討. 自治医科大学看護学ジャーナル, 7: 25-36, 2010.

(2) 著書・総説

- 1) 川上 勝, 真砂涼子, 松田たみ子, 小板橋喜久代: 「活動」に関連したところとからだのしくみ. 最新介護福祉全書12 ところとからだのしくみ (小板橋喜久代, 松田たみ子). メヂカルフレンド (東京), 122-152, 2010.

(3) その他

- 1) 西岡浩子, 高木初子, 水戸美津子: 認知症高齢者を介護する家族の生活の再構築にかかわるプロセス. 日本看護研究学会中国・四国地方会, 香川. 2010年3月7日. (日本看護研究学会中国・四国地方会第23回学術集会抄録集; 98, 2010)
- 2) 鮎澤みどり, 高木初子, 水戸美津子: 訪問看護ステーションに勤務する看護師が連携した他職種とのケア情報. 日本リハビリテーション連携科学学会, 宮崎. 2010年3月20日. (リハビリテーション連携科学11 (1) : 71-72, 2010)
- 3) 田沼美杉, 井上映子, 水戸美津子: 地域支援病院における退院調整看護師の役割. 第11回日本リハビリテーション連携科学学会, 宮崎. 2010年3月20日.
- 4) 川上 勝, 段ノ上秀雄, 宇城 令, 井上映子, 中村美鈴: 一次救命処置研修会に参加した看護学部学生の心肺蘇生技術に対する自己評価. 第9回自治医科大学シンポジウム, 下野市. 2010年9月4日.
- 5) 吉本照子, 酒井郁子, 八島妙子, 渡邊智子,

井上映子, 茂野香おる, 杉田由加里: 介護老人保健施設の在宅支援におけるケア職者の役割行動と看護管理者による働きかけ-介護報酬の在宅復帰支援機能加算算定との関連性. 日本老年看護学会第15回学術集会, 前橋. 2010年11月3日.

6) 川上 勝, 宇城 令, 櫻井美奈, 長井栄子, 福田真紀, 山中 瞳, 相賀美幸, 大久保裕幸, 芦澤拓也, 梶原 忠: 看護師の所在確認システムの有用性~モニタアラーム聞き逃りリスクの評価ツールとして~. 医療の質・安全学会, 千葉. 2010年11月28日. (第5回医療の質・安全学会誌5 (Suppl.) : 140, 2010)

7) 井上映子, 高木初子, 長井栄子, 今井宏美, 齋藤やよい: 単音節分解を用いた介護老人保健施設入居高齢者の「発話」の分析. 日本看護科学学会, 北海道. 2010年12月4日. (第30回日本看護科学学会学術集会講演集30: 495, 2010)

8) 長井栄子, 井上映子: 介護老人保健施設における認知症高齢者へのユニットケア実施施設職員による安全なケア提供上の困難と工夫. 日本看護科学学会, 北海道. 2010年12月4日. (第30回日本看護科学学会学術集会講演集30: 338, 2010)

9) 高木初子, 水戸美津子, 長井栄子, 池下麻美, 境野博子, 井上佐代子, 金子 操: 安静臥床の必要な入院高齢者の日常生活動作能力維持プログラムの検討. 自治医科大学看護学ジャーナル, 7: 113-114, 2010.

10) 川上 勝, 桜井美奈, 宇城 令, 北島元治, 滝恵津, 栗山葉子, 高尾 忍, 永野美奈子, 里光やよい, 戸田昌子, 大久保祐子, 岩永秀子: チューブ型感圧センサーを用いた体動検知装置の実用化に向けた基礎的研究 (第2報) 自治医科大学看護学ジャーナル, 7: 99-100 2010.

11) 太田信子, 吉澤利恵, 渡邊美智子, 篠原和子, 長井栄子, 池下麻美, 里光やよい, 水戸美津子, 大久保祐子: 褥瘡ハイリスク患者ケア加算前後の褥瘡患者の実態と影響要因分析 自治医科大学看護学ジャーナル, 7: 117 2010.

12) 宇城 令, 塚本友栄, 井上映子, 春山早苗, 水戸美津子: 本学部卒業生の進路決定と就業継続に関する調査. 自治医科大学看護学ジャーナル, 7: 89-97, 2010.

がん看護学

(1) 論文

1) Kohara, I and Inoue, T.: Searching for a Way to Live to the End: Decision-Making Process in Patients Considering Participation in Cancer Phase I Clinical Trials. *Oncology Nursing Forum*, 37(2); E124-132, 2010.

2) 本田芳香, 小原 泉: がん看護実践能力を育成するためのリフレクションプロセス. *自治医科大学看護学ジャーナル*, 7; 13-23, 2010.

3) 小原 泉, 本田芳香: 大学院における観察スキル習得プログラムに関する研究. *自治医科大学看護学ジャーナル*, 7; 32-38, 2010.

(2) 著書・総説

1) 新美三由紀, 青谷恵利子, 小原 泉, 齋藤裕子 (共著): ナースのための臨床試験入門. 医学書院 (東京). 2010.

2) 本田芳香, 大橋健策, 宮城 孝 (共著): 地域福祉の理論と方法. 中央法規出版 (東京). 2010.

(3) その他

1) 小原 泉: 教育講演: がん臨床試験における看護師の役割. 第24回日本がん看護学会学術集会, 静岡市. 2010年2月14日. (日本がん看護学会誌 (24 (Suppl.)): 75, 2010)

2) 本田芳香: 在宅療養へ移行する終末期がん患者の緩和ケア継続に関する看護師の倫理的ジレンマ. 第15回日本緩和医療学会学術大会, 東京都. 2010年5月15日. (第16回日本緩和医療学会学術大会; 82, 2010)

3) 小原 泉: ランチョンセミナー: インフォームド・コンセントのための理論と実践. 第10回CRCと臨床試験のあり方を考える会議, 別府市. 2010年10月3日.

4) 本田芳香: 新人看護師のポートフォリオ活用による自己教育力の育成. 第30回日本看護科学学会学術集会, 札幌市. 2010年12月2日. (第30回日本看護科学学会誌: 124, 2010)

資 料

2010年度（平成22年度）看護学部学年暦

○前学期

4月2日（金）	ガイダンス（2・3・4年）
4月5日（月）	授業開始（2・3・4年）
4月9日（金）	入学式、オリエンテーション（1年）
4月12日（月）	授業開始（1年）
4月29日（木）～5月5日（水）	春季休業
5月14日（金）	創立記念日
5月17日（月）～7月23日（金）	前学期実習（3年）
6月30日（水）～7月2日（金）	定期試験（4年）
7月5日（月）～7月30日（金）	地域看護学実習（4年）
7月27日（火）～7月30日（金）	定期試験（1・2年）
7月31日（土）～9月26日（日）	夏季休業
9月1日（水）～9月3日（金）	再試験

○後学期

9月27日（月）	授業開始
9月6日（月）～10月8日（金）	助産学実習（4年）
10月1日（木）～10月21日（木）	日常生活援助実習（2年）
10月8日（金）～10月10日（日）	学園祭
11月22日（月）～12月3日（金）	生活の理解実習
11月22日（月）～12月24日（金）	後学期実習（3年）
1月7日（金）～2月18日（金）	
12月25日（土）～1月3日（月）	冬季休業
1月31日（月）～2月3日（木）	定期試験（1・2年）
3月1日（火）～3月3日（木）	再試験
3月4日（金）	卒業式
3月19日（土）～	学年末休業

自治医科大学看護学部の概況（平成23年3月31日現在）

1. 教員数	40名
2. 学生数	426名
4年生（平成19年4月1日入学）	114名
（平成20年4月1日編入学）	
3年生（平成20年4月1日入学）	102名
2年生（平成21年4月1日入学）	101名
1年生（平成22年4月1日入学）	109名

看護学部教職員名簿

1. 教員

職名	氏名	主要担当科目
教授	水戸美津子	老年看護学
教授	竹田俊明	医学 関連
教授	竹田津文俊	医学 関連
教授	永井優子	精神看護学
教授	中島登美子	小児看護学
教授	中村美鈴	成人看護学
教授	成田伸	母性看護学
教授	春山早苗	地域看護学
教授	半澤節子	精神看護学
教授	本田芳香	がん看護学
教授	渡邊亮一	基礎科学 関連
准教授	井上映子	老年看護学
准教授	大塚公一郎	基礎科学 関連
准教授	大脇淳子	小児看護学
准教授	小原泉	がん看護学
准教授	齋藤良子	母性看護学
准教授	里光やよい	基礎看護学
准教授	鈴木久美子	地域看護学
准教授	高木初子	老年看護学
講師	宇城令子	基礎看護学
講師	内海香子	成人看護学
講師	小川朋子	母性看護学
講師	小川上勝	老年看護学
講師	工藤奈織	地域看護学
講師	崎田マユミ	成人看護学
講師	櫻井美奈	基礎看護学
講師	角川志穂	母性看護学
講師	塚本友栄	地域看護学
講師	野崎章子	精神看護学
講師	樋貝繁香	小児看護学
助教授	池下麻美	老年看護学
助教	石田寿子	小児看護学
助教	板橋直人	精神看護学
助教	北村露輝	成人看護学
助教	北島田裕子	地域看護学
助教	関山友子	地域看護学
助教	段ノ上秀雄	成人看護学
助教	長井井榮子	老年看護学
助教	西岡啓子	母性看護学
助教	松浦利江子	成人看護学
助教	宮田真理子	精神看護学
助教	和久紀子	基礎看護学

2. 事務部

職名	氏名
大学事務部長	川村 廣 栄
大学事務副部長 (看護学部担当)	篠原 修 治

(看護総務課)

職名	氏名
課長	松田 一彦
参事(兼)課長補佐	半田 美治
係長	佐伯 功
主任主事	大石 千代
主事	田中 千里
嘱託	中村 里子

(看護学務課)

職名	氏名
課長	若林 茂行
参事	藍原 孝樹
課長補佐(兼)係長	安島 幸子
主任主事	河原 節子
主事	榭 公一
主事	佐藤 真美

※平成22年4月1日～平成23年3月31日在職者
(各職階ごとの50音順)

2010年度（平成22年度）大学院看護学研究科学年暦

○前期

4月6日（火）	入学式 オリエンテーション、授業開始
4月12日（月）	履修計画の提出締切
5月14日（木）	創立記念日

○後期

10月1日（金）	授業開始 後期科目履修取消届出
12月20日（月）	学位申請書・学位論文（審査用）提出
2月1日（火）～10日（木）	論文審査・口頭試問
2月25日（金）	学位論文発表会（最終試験）
3月7日（月）	学位論文（保存用）提出
3月18日（金）	修了式（学位授与式）

大学院看護学研究科の概況（平成23年3月31日現在）

1. 教員数	27名
2. 学生数	29名
2年生（長期履修制度利用者）	22（8）名
1年生（長期履修制度利用者）	7（2）名

大学院看護学研究科教職員名簿

1. 教員

職名	氏名	主要担当科目
教授	水戸美津子	老年看護管理学
教授	竹田俊明	共通科目
教授	竹田津文俊	共通科目
教授	永井優子	精神看護学
教授	中島登美子	小児看護学
教授	中村美鈴	クリティカルケア看護学
教授	成田伸	母性看護学
教授	春山早苗	地域看護管理学
教授	半澤節子	精神看護学
教授	本田芳香	がん看護学
教授	渡邊亮一	共通科目
准教授	井上映子	老年看護管理学
准教授	大塚公一郎	共通科目
准教授	大脇淳子	小児看護学
准教授	小原泉	がん看護学
准教授	齋藤良子	母性看護学
准教授	里光やよい	看護技術開発学
准教授	鈴木久美子	地域看護管理学
准教授	高木初子	老年看護管理学
講師	宇城令	看護技術開発学
講師	内海香子	クリティカルケア看護学
講師	工藤奈織美	地域看護管理学
講師	崎田マユミ	クリティカルケア看護学
講師	櫻井美奈	看護技術開発学
講師	角川志穂	母性看護学
講師	塚本友栄	地域看護管理学
講師	野崎章子	精神看護学
講師	樋貝繁香	小児看護学

2. 事務部

職名	氏名
大学事務部長	川村廣栄
大学事務副部長 (看護学部担当)	篠原修治

(看護総務課)

職名	氏名
課長	松田一彦
参事(兼)課長補佐	半田美治
係長	佐伯功
主任主事	大石千代
主事	田中千草
嘱託	中村里子

(看護学務課)

職名	氏名
課長	若林茂行
参事	藍原孝樹
課長補佐(兼)係長	安島幸子
主任主事	河原節子
主事	榊公一
主事	佐藤真美

※平成22年4月1日～平成23年3月31日在職者
(各職名ごとの50音順)

編集後記

教員の皆様の御協力のおかげで上梓できる喜びを感じて居ります。御多忙にもかかわらず、御執筆を頂きましたことに心より御礼申し上げます。そして、事務の方々のご協力にも併せて深謝致します。

本年度は、1000年に一度と言われる3月11日に起きた「東日本大震災」による東北地方太平洋沖地震とそれに伴って発生した津波、及びその後の余震は現在も残念ながら進行形で、そのたびに不安や不穏等の複雑な感情が再起します。

編集後記についてペンを執るにあたり、私ごとですが赴任以前の事柄でもあることで、申し訳なさと僭越を感じながら目を通させていただきました。気づいた点は2点ありました。まずは現在も増え続ける本邦看護学部ゆえに、すでに教員不足の波は本学にも押し寄せつつあるなかで、陰りもみせず研究に向かう先生方の真摯な姿、教育への熱き姿を映した本報告書であると気づきました。本当に皆様に心より御礼申し上げます。そしてもう1点、目を惹いたのは「看護職キャリア支援センター」の発足の報告でした。教育プログラムの開発と実施。ここでは10ヶ月をかけた研修であり、最終目標は、ジェネラリストのナース育成であるようです。キャリア支援をきめ細やかにするべく、相談窓口（HPからのアクセスが可能）、キャリア支援のニーズ調査（各自にキャリア相談用紙を配布）などの報告が記されていました。ここにおいても、陰になり日向になりと活躍する教員の姿がありました。

やはり改めて、完成の喜びと日々の努力への労いを強くしたところです。

（平成24年3月 編集委員会副委員長 宮林幸江）

編集委員会

自治医科大学看護学部

委員長 本田 芳香

副委員長 宮林 幸江

委員 小原 泉

鈴木久美子

横山 由美

飯塚 秀樹

自治医科大学看護学部年報（第9号）
自治医科大学大学院看護学研究科年報（第5号）

平成24年3月31日発行

発行者	学部長（研究科長）	水戸美津子
編集責任者	編集委員会委員長	本田芳香
発行所	自治医科大学看護学部	
	栃木県下野市薬師寺3311-159	
	電話 0285（58）7409	
印刷所	(株)松井ピ・テ・オ・印刷	
	栃木県宇都宮市陽東5-9-21	
	電話 028（662）2511(代)	